

# 大湯環状列石

発掘調査報告書(7)

1991-3

秋田県鹿角市教育委員会

## 序

縄文時代後期の特別史跡「大湯環状列石」とその周辺の解明を目的に進めてまいりました大湯環状列石周辺の発掘調査も、7年目となります。

近年、農業機械の大型化により深耕農作業がなされ、包含する遺跡の破壊が懸念されており、史跡とその周辺を発掘調査する必要性がありました。

そのため、昭和59年から昭和61年の3ヶ年間は、野中堂・万座環状列石の性格解明を目的に調査し、昭和62年から昭和63年までの2ヶ年の調査は、環状列石近傍の遺構分布状況を確認するために、そして平成元年には、環状列石と関連する竪穴住居跡の有無を確認するを主目的に発掘調査を実施してきました。

本年度は、平成元年度に引き続き、F<sub>1</sub>区で検出された竪穴住居群の東側への広がりの確認を主目的に、F<sub>1</sub>区の東側20m離れたF<sub>2</sub>区を調査区として設定しました。

調査の結果、F<sub>2</sub>区からは、縄文時代後期の集石遺構、Tピット、フラスコ状土壇等多数の遺構が検出され、竪穴住居跡については、F<sub>1</sub>区で発掘された住居跡と共に通性を有し、その一部と考察されます。

したがって、F<sub>1</sub>区・F<sub>2</sub>区で発掘された竪穴住居群は、環状列石に関連する縄文時代後期の集落を考察する上で貴重な資料といえます。

本書は、これらの調査結果をまとめたものであり、大湯環状列石とその周辺が史跡公園にふさわしい姿として保存・活用されるための資料といたしたいと思います。

なお、追加指定をうけた地域は、広範囲にわたっておる関係から、史跡解明のための発掘調査は、計画的に継続して推し進めなければならないと考えています。このためにも、今よりもさらに文化庁並びに県教育委員会のご指導ご援助を得ながら、発掘調査を進めてまいりたいと思います。

終りに、この調査に際しご指導ご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げるとともに、今後の調査につきましてもご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成3年3月

鹿角市教育委員会

教育長杉山新吉

## 例　　言

1. 本報告書は、平成2年度に国・県の補助を得て実施した大湯環状列石第7次発掘調査の報告書である。なお、大湯環状列石周辺遺跡のほとんどが平成2年3月に特別史跡に追加指定されたため、本報告書より遺跡名を大湯環状列石に変更した。
2. 本調査概要については機会あるごとに発表してきたが、本報告書を正式なものとする。
3. 本報告書の執筆は、調査員、調査補助員が分担し、文責は各々の文末に明記した。
4. 資料の鑑定並びに同定等は下記のとおり依頼した。

石器類石質鑑定　秋田県立十和田高等学校　鎌田 健一

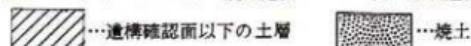
赤色顔料分析　秋田県立十和田高等学校　鎌田 健一

花粉分析　鹿角市理科教育センター　成田 典彦

5. 土層、土器などの色調の記載には「新版 標準土色帖」(日本色彩研究所)を使用した。
6. 遺物の実測・採拓・トレース等の整理作業は、調査員、調査補助員が行なった。
7. 本報告書に収載した図版のスケールについては各々に示した。なお、写真図版は任意の縮尺とした。
8. 本報告書の文中において、用語の主たるものは統一するように努めたが、数度にわたり使用しているものは簡略している場合もある。
9. 図版・表等で下記のような記号やスクリーン・トーンを使用した。

S I …豊穴住居跡　P i t …柱穴状ビット　S K …土壠　S K(F)…プラスコ状土壠

S K(T)…Tビット　S X(F)…焼土遺構　S X(S)…集石遺構



10. 発掘調査・報告書作成にあたっては、下記の方々から御指導・御助言をいただきました。  
記して感謝の意を表します。（敬称略、順不同）

河原純之、岡村道雄、井上和人（文化庁記念物課）、江坂輝彌（慶應大学）

佐原 真、牛川喜幸（奈良国立文化財研究所）、藤本英夫（北海道文化財研究所）

村越 潔（弘前大学）、小林達雄（国学院大学）、阿部義平（国立歴史民俗博物館）

林 謙作（北海道大学）、中野益男（帯広畜産大学）、鈴木保彦（日本大学）

高橋泰時、小林 克（秋田県埋蔵文化財センター）、安村二郎（鹿角市史編さん室）

大里勝藏（小坂高等学校）、板橋範芳（大館市教育委員会）

# 本文目次

序

例言

本文目次

図版・PL・表目次

第Ⅰ章 遺跡の環境

- 1 遺跡の位置と立地 ..... 1
- 2 遺跡の層序 ..... 2

第Ⅱ章 調査の概要

- 1 調査に至るまでの経過 ..... 6
- 2 調査要項 ..... 7
- 3 調査の方法 ..... 8
- 4 調査の経過 ..... 9

第Ⅲ章 検出遺構と出土遺物

- 1 集石遺構 ..... 10
- 2 土壌
  - (1) T ピット ..... 10
  - (2) フラスコ状土壌 ..... 20
  - (3) 土壌 ..... 35
- 3 焼土遺構 ..... 43
- 4 柱穴状ピット ..... 43
- 5 遺構外出土遺物
  - (1) 土器 ..... 45
  - (2) 石器 ..... 58
  - (3) 土製品・石製品 ..... 64

第Ⅳ章 昭和50年度分布調査の概要

- 1 検出遺構
  - (1) 細石遺構 ..... 68
  - (2) 住居跡 ..... 70
- 2 遺構外出土遺物
  - (1) 土器 ..... 78
  - (2) 石器 ..... 80
  - (3) 土製品 ..... 82

第Ⅴ章 自然科学的調査

- 1 大湯環状列石周辺の古環境について ..... 83
- 2 旧地形の復原 ..... 85

第Ⅵ章 分析と考察

- 1 フラスコ状土壌について ..... 89
- 2 T ピットについて ..... 90

第Ⅶ章 調査のまとめ ..... 93

## 図 版 目 次

### 図 版 目 次

第1図	遺跡の位置	1	第29図	遺構外出土土器拓影図(4).....	54
第2図	調査区と周辺の地形	3	第30図	遺構外出土土器拓影図(5).....	55
第3図	F <sub>2</sub> 区基本層序(1).....	4	第31図	遺構外出土土器拓影図(6).....	56
第4図	F <sub>2</sub> 区基本層序(2).....	5	第32図	遺構外出土土器拓影図(7).....	57
第5図	F <sub>2</sub> 区遺構配置図.....	11	第33図	各グリッド石器出土数.....	59
第6図	第411号集石遺構実測図.....	12	第34図	遺構外出土石器実測図(1).....	60
第7図	T ピット実測図(1).....	14	第35図	遺構外出土石器実測図(2).....	61
第8図	T ピット実測図(2).....	17	第36図	遺構外出土石器実測図(3).....	62
第9図	T ピット実測図(3).....	19	第37図	遺構外出土石器実測図(4).....	63
第10図	T ピット実測図(4).....	20	第38図	遺構外出土石器実測図(5).....	64
第11図	フ拉斯コ状土壤実測図(1).....	22	第39図	各グリッド土製品・石製品出土数.....	66
第12図	フ拉斯コ状土壤実測図(2).....	25	第40図	遺構外出土土製品・石製品実測図.....	67
第13図	フ拉斯コ状土壤実測図(3).....	27	第41図	調査実施図.....	69
第14図	フ拉斯コ状土壤実測図(4).....	30	第42図	C地区グリッド配置図.....	70
第15図	フ拉斯コ状土壤実測図(5).....	32	第43図	C地区組石遺構実測図.....	71
第16図	フ拉斯コ状土壤実測図(6).....	34	第44図	C地区確認住居跡.....	72
第17図	土壤実測図(1).....	37	第45図	C地区住居跡出土土器実測図(1).....	75
第18図	土壤実測図(2).....	39	第46図	C地区住居跡出土土器実測図(2).....	76
第19図	遺構内出土土器実測図.....	40	第47図	土器展開模式図.....	77
第20図	遺構内出土土器拓影図(1).....	41	第48図	C地区遺構外出土土器実測図.....	78
第21図	遺構内出土土器拓影図(2) ・石器実測図.....	42	第49図	C地区出土土器拓影図(1).....	79
第22図	第431号焼土遺構実測図.....	43	第50図	C地区出土土器拓影図(2).....	80
第23図	柱穴状ピット実測図.....	44	第51図	C地区出土石器実測図.....	81
第24図	土器分布密度図.....	46	第52図	C地区出土土製品・石製品.....	82
第25図	遺構外出土土器実測図.....	50	第53図	試料の採取地点.....	83
第26図	遺構外出土土器拓影図(1).....	51	第54図	採取層序と採取番号.....	83
第27図	遺構外出土土器拓影図(2).....	52	第55図	フ拉斯コ状土壤の底径と 深さの関係.....	86
第28図	遺構外出土土器拓影図(3).....	53	第56図	旧地形復原図.....	88
			第57図	T ピットの位置とグルーピング.....	91
			第58図	T ピット長軸方向.....	92

## 表・PL目次

### 表 目 次

第1表 検出された花粉化石の固体数.....	84	第3表 F区中央部プラスコ状 土壌の深さ.....	87
第2表 大湯環状列石周辺遺跡			
プラスコ状土壌計測表.....	86		

### PL目次

PL 1 大湯環状列石全景.....	96	PL 16 調査区北端部・西端部.....	111
PL 2 F区全景・礎群.....	97	PL 17 調査区南部・南東部.....	112
PL 3 Tピット(1).....	98	PL 18 昭和50年C地区調査地・住居跡.....	113
PL 4 Tピット(2)・プラスコ状土壌(1).....	99	PL 19 造構外出土土器(1).....	114
PL 5 Tピット(3).....	100	PL 20 造構内出土土器(2).....	115
PL 6 Tピット(4)・プラスコ状土壌(2).....	101	PL 21 造構外出土土器(2).....	116
PL 7 プラスコ状土壌(3).....	102	PL 22 造構外出土土器(3).....	117
PL 8 プラスコ状土壌(4).....	103	PL 23 造構外出土土器(4).....	118
PL 9 プラスコ状土壌(5).....	104	PL 24 造構外出土土器(5).....	119
PL 10 プラスコ状土壌(6).....	105	PL 25 造構外出土土器(6).....	120
PL 11 プラスコ状土壌(7).....	106	PL 26 造構内・外出土石器(1).....	121
PL 12 土 壕(1).....	107	PL 27 造構内・外出土石器(2).....	122
PL 13 土 壕(2)・焼土造構.....	108	PL 28 昭和50年C地区出土土器(1).....	123
PL 14 柱穴状ピット(1).....	109	PL 29 昭和50年C地区出土土器(2).....	124
PL 15 柱穴状ピット(2)・基本層序.....	110	PL 30 昭和50年C地区出土石器・ 造構外出土土製品及び石製品.....	125

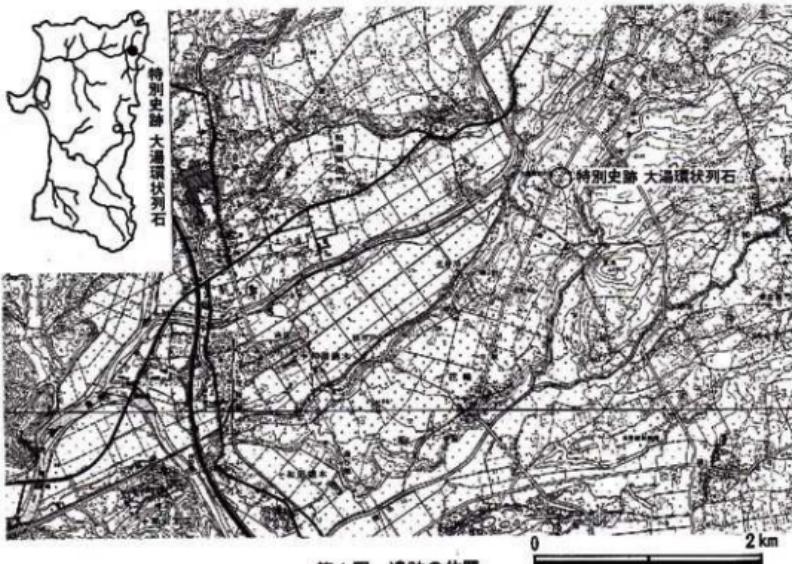
# 第Ⅰ章 遺跡の環境

## 1. 遺跡の位置と立地

鹿角市は、秋田県北東部に位置し、壯年期の山々と盆地からなる。鹿角盆地は東側に標高1,000mを超える急峻な山脈と、西側に標高300m程の穏やかな広森山地に挟まれた南北に細長い断層盆地である。奥羽山脈の一峰である四角岳を源とする米代川は盆地を北上し、十和田地区で小坂川、大湯川と合流し、その流れを変え、大館盆地へと西流する。これらの河川とその支流によって形成された段丘・舌状台地上には、縄文時代から近世までの遺跡が400余も分布しており、県内唯一の遺跡数を誇っている。

特別史跡「大湯環状列石」もその一つで、秋田県鹿角市十和田大湯字野中堂、字万座、字一本木後口に存在する。同列石は、盆地の北東部、大湯川と豊真木沢川の浸食作用によって形成された南西方向へ伸びた長さ5.6km、幅0.5~1km、標高150~190mの舌状台地のほぼ中央にあり、十和田湖への南玄関口であるJR花輪線十和田南駅の北東3.5km、東北縦貫自動車道十和田I-Cの北東3.6kmの地点に位置する。

本年度の発掘調査区（F<sub>2</sub>区）は、F<sub>1</sub>区東側に隣接し、万座環状列石の北側0.15km、台地縁辺より内側に50m程の地点にあり、畠地として利用されている。



第1図 遺跡の位置

## 2. 遺跡の層序

遺跡の層序については、第6次調査までの分層、細分基準をもとにⅠ～Ⅴ層に分層した。F<sub>2</sub>区では深耕がⅤ層(下位火山灰層)にまでおよぶ地域もあるが、本調査区を横断する作業道北側において良好な堆積状況を観察することができる。

第Ⅰ層は、大湯浮石層までの耕作土で黒色を呈する。層厚30cm～60cmを測る。調査区中央部及び南側では深耕がⅤ層までおよび地山粒や浮石粒の混入が著しい地域もある。

第Ⅱb層は、黄褐色を呈する大湯浮石層である。粒径0.1cm～1.0cmの浮石が本層を構成するが、粒径3.0cm程のものも随所にみられる。F<sub>1</sub>区等では、Ⅱb層上位にシルト質のにい黄褐色火山灰(Ⅱa層)が堆積しているが、本調査区においては耕作の擾乱がおよび、所々に見受けられる程度である。また、Ⅱb層下に位置する浮石粒を含む黒色土(Ⅱc層)もⅡa層と同様である。

第Ⅲ層は、大湯浮石層下から暗褐色土(Ⅳ層)上面までの黒色あるいは黒褐色を呈する堆積土で混入物(地山粒)の含有量、しまり等からⅢa～Ⅲd層に分層される。層厚は30cm～80cmを測り、深耕が著しくおよんでいない沢地、凹地部分に厚く堆積している。Ⅲa層は、シルト質の黒色土で、層厚5cm～10cmを測る。全体的に堅くしまっており、銳利なものでカッティングすると光沢を帯びる。Ⅲb層は、Ⅲa層と同色であるが、地山粒を若干含むこと、Ⅲa層と比べしきりの点で劣っている。層厚5cm～25cmを測る。Ⅲc層は、シルト質の黒褐色土である。光の当る角度によってチョコレート色に近い色調を呈する。しまりの点でⅢa層より若干劣っている。層厚5cm～20cmを測る。Ⅲd層は、沢地、凹地に厚く堆積しており、層厚30cm～75cmを測る。混入物として層中に地山粒を少量含み、しまっている。Ⅲ層は縄文時代の遺物包含層で、Ⅲb～Ⅲd層からの出土が多い。概ね、後期の土器はⅢb～Ⅲd層上面、早期の土器はⅢd層より出土している。なお、Ⅲ層まで深耕のおよんでいない調査区東側、西側、北側に存在するTピット、フ拉斯コ状土壙等の遺構確認面はⅢd層上面である。

第Ⅳ層は、地山(Ⅴ層)直上までの漸位層で、暗褐色を呈する。地山粒、同ブロックを多く含み、全体的に堅くしまっている。層厚8cm～20cmを測る。

第Ⅴ層は、中ヶ野火山灰と考えられる黄褐色火山灰層で、拳大の角～亜角礫の混入がみられ、非常に堅くしまっている。本層下には乳白色を呈する火山灰(一般的に言うシラス層)が堆積している。シラス層は、軽石、礫を含み、水分の含有量は他層と比べて多く軟弱である。フ拉斯コ状土壙、Tピットはこのシラス層を底面としている。なお、報告書中では、便宜上、黄褐色火山灰層をⅤ層と、シラス層をⅥ層と表現している。

(藤井 安正)

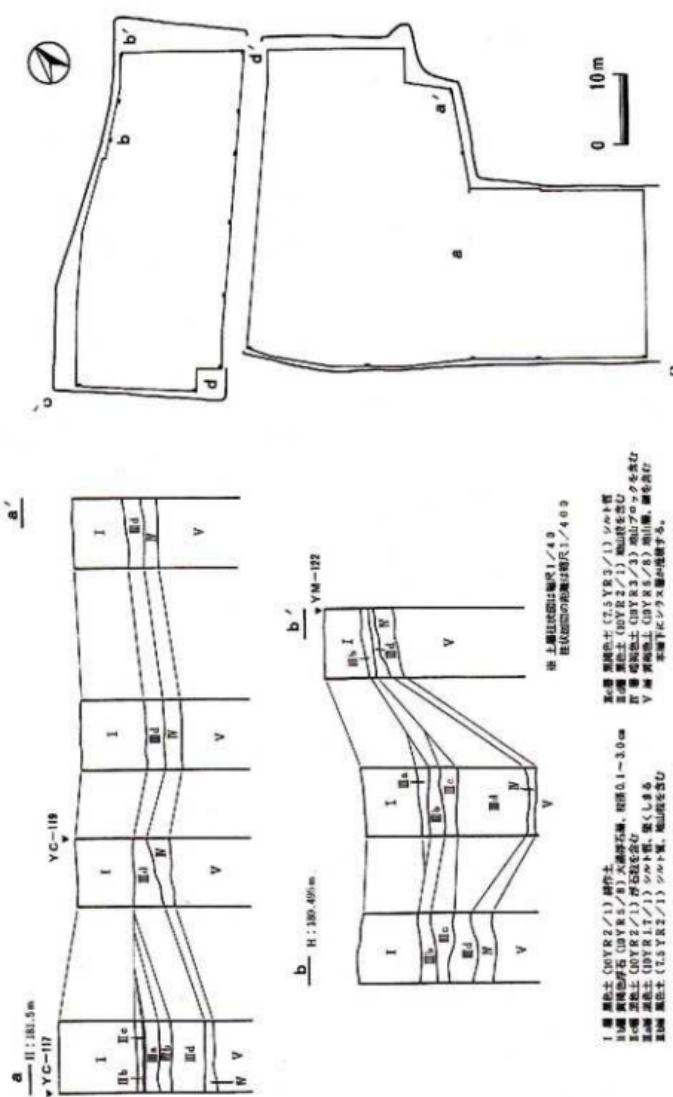


平成2年町界図

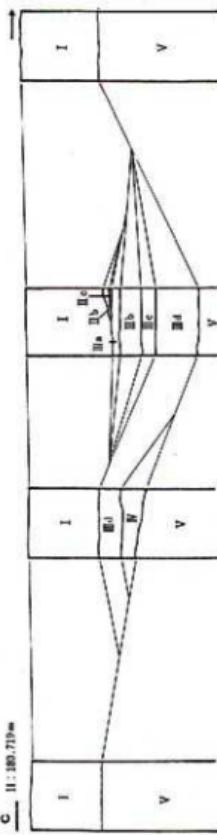
町の範囲

第2回 調査区と周辺の地図

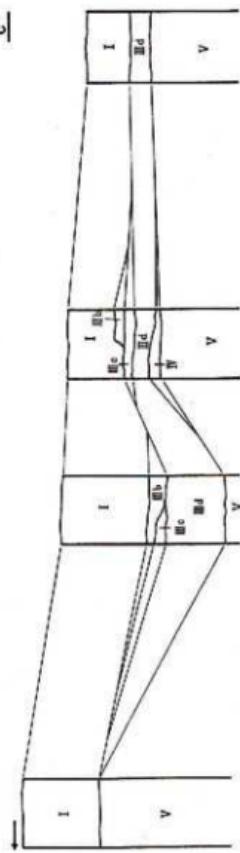




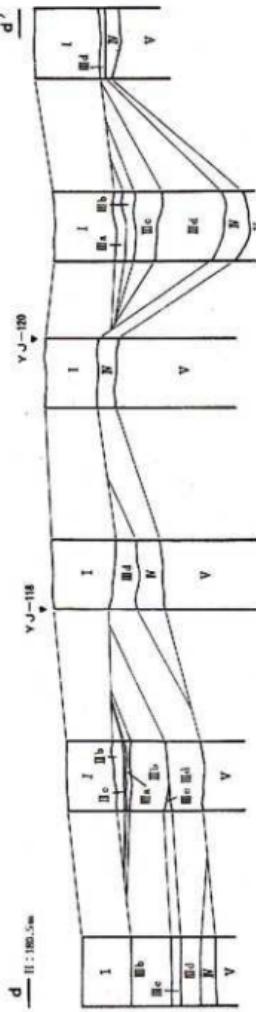
第3図 F<sub>2</sub>区基本層序(1)



c



1



104

P

#### 第4回 $F_2$ 区基本層序(2)

## 第Ⅱ章 調査の概要

### 1. 調査に至るまでの経過

大湯環状列石の発見から昭和31年の特別史跡指定に至るまでの経過については、大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(1)で詳しく述べているので、ここではそれ以降の経過について記する。

昭和40年代になると、遺跡周辺の土木工事が増加し、農業の機械化は、周辺に存在が予想された間違遺跡の存続を脅かしつつあった。

そのため、大湯環状列石と関連ある遺跡（大湯環状列石周辺遺跡）の範囲確認を目的に、秋田県教育委員会、鹿角市教育委員会により、昭和48年から51年まで分布調査が実施され、周辺遺跡の範囲が列石から北東300m、南西180mにおよぶことが判明した。

この調査結果をもとに鹿角市は、昭和51、52年に周辺遺跡をも含めた「特別史跡大湯環状列石保存管理計画書」を作成、さらに59年からは同計画書を具体化、今後の史跡整備計画策定のための資料収集を目的に周辺遺跡の発掘調査を継続している。

第1～3次（昭和59～61年）の調査では、野中堂、万座環状列石の性格解明を目的にして、野中堂環状列石北東250mの地点（A区）の一本木後口配石遺構群の調査に主力が注がれた。この調査では、一本木後口配石遺構群は、野中堂、万座環状列石同様、縄文時代後期の配石遺構の集合体ではあるが、環状とはならず、長椿円形状になるか、一巡せず弧状で終わるものと考えられた。また、全ての配石下に土壇が伴うこと、その堆積状況、甕棺や副葬品と考えられる遺物の出土、残存脂肪分析結果等から、これらの配石遺構は配石墓と推察された。さらに、弧状列石を境に内帶・外帶に区画されること、内帶の配石群は小塊を形成すること、外帶の配石と内帶の1小塊は対応関係にあること等、野中堂、万座環状列石との類似性も確認されている。

第4～5次（昭和62～63年）の調査は、環状列石近傍の遺構の分布状況を確認するために、万座環状列石の北西及び西側隣接地（D<sub>1</sub>、D<sub>2</sub>区）に調査区を設定している。この調査では、列石近傍から建物跡、フラスコ状土壇等が検出され、これらの遺構は環状列石の周囲に規則的に分布する様相を示していた。このため、万座環状列石及びその周辺は、墓域（環状列石）、祭祀場域（埴物跡群域）、居住域（フラスコ状土壇群域）、遺物廃棄域からなる同心円構造の集落形態を呈するものと考えられた。しかし、調査区設定の制約もあり、居住域と想定される地域から竪穴住居跡の検出はできず、列石周辺には居住域がなく、本遺跡は墓域と祭祀場域からなる特殊な遺跡である可能性も依然残ることとなった。

このため、第6次（平成元年）の調査は、列石との位置関係を一時離れ、竪穴住居跡の有無

の確認を主目的とし、最も検出の可能性の高い、万座環状列石北北西150mの台地縁辺部を調査区の一つ(F<sub>1</sub>区)とした。この調査では縄文時代後期の竪穴住居跡4軒他が検出され、環状列石周辺に集落が存在することが初めて確認された。これらの住居跡群はさらに南及び東方向に延びる様相を示し、昭和50年の分布調査により検出されている住居跡に連なるものと考えられた。

このため、本年度の第7次調査では、これらの住居群の東側への広がりの確認を主目的に、F<sub>1</sub>区の東側20mに調査区を設定した。

なお、これらの調査により、周辺遺跡の重要性が確認されたため、鹿角市は総合的な遺跡の保存を目的に、平成元年8月に220,529.81m<sup>2</sup>の特別史跡への追加指定申請を行ない、2年3月に追加指定が認可されている。この追加指定により、特別史跡大湯環状列石の範囲は、236,697.81m<sup>2</sup>となっている。

## 2. 調査要項

1. 遺跡名 特別史跡 大湯環状列石
2. 調査目的 竪穴住居跡群の東側への広がりと、その他の遺構の有無の確認を主目的とする。
3. 調査地 F<sub>1</sub>区 鹿角市十和田大湯字万座17、18
4. 発掘面積 2,810m<sup>2</sup>
5. 調査期間  
発掘調査 平成2年4月20日～平成2年10月6日  
整理・報告書作成 平成2年10月11日～平成3年3月30日
6. 調査主体者 鹿角市教育委員会
7. 調査担当者 社会教育課（主任 秋元信夫）
8. 調査参加者  
調査指導員 熊谷太郎（秋田県教育庁文化課 学芸主事）  
調査員 錢田健一（秋田県立十和田高等学校 教諭）  
成田典彦（鹿角市理科センター 専任）  
三ヶ田俊明（小坂町立小坂小学校 教諭）  
佐藤 樹（鹿角市教育委員会社会教育課）  
藤井安正（鹿角市教育委員会社会教育課）
- 調査補助員 米田直毅、伊藤裕幸、武藤孝一、花海義人、木村昭子
- 作業員 安保ヨネ、木村イヨ、木村千鶴江、木村ヒロ、木村ひろみ  
苗代沢ノブ、松宮カチ、宮沢カヨ、宮沢キヨ、宮沢トミエ

柳沢アエ、柳沢勝江、柳沢ヤス

9. 社会教育課

課長 川又節三  
参事 豊口秀一（8月1日転入）  
課長補佐 柳沢悦郎（8月1日転出）  
主任 秋元信夫（調査・庶務）  
臨時職員 藤井安正（調査）  
臨時職員 古川孝政（庶務）

10. 協力機関・協力者

文化庁記念物課、秋田県教育委員会、秋田県埋蔵文化財センター  
木村直弥（土地所有者）、工藤久吉（土地所有者）、土館昇、柳沢直蔵

（秋元信夫）

3. 調査の方法

第7次調査では、F<sub>1</sub>区で検出された竪穴住居跡群の東側への広がりを確認するため、F<sub>1</sub>区東側20m、台地縁辺部より50m内側に調査区（F<sub>2</sub>区）を設定した。

グリッドは第1次調査以来のN-49°-Wを基準とする5m単位のグリッドとし、F<sub>1</sub>区から延長した。杭番号はアルファベット（北西～南東方向）と算用数字（北東～南西方向）で付し、西隅の杭を以てグリッド名を呼称した。

表土の除去作業については、昭和50年の分布調査結果から重機を導入することにした。重機導入に際しては、事前に調査区内十数ヶ所にテストトレーンチを入れ、出土遺物、遺構の分布状況を把握し、調査員立ち合いのもとでより慎重に行なった。Ⅱ層以下の発掘作業は全て手掘りによる分層発掘とし、深耕によりⅣ層まで擾乱をうける地域もあったが、できるだけ上層での遺構確認に努めた。遺構の番号については、F<sub>1</sub>区に統けて種類別、発見順に付した。なお、調査の結果、遺構としがたいと判断されるものは欠番とし、また整理段階で遺構形態別に細分したため、調査時と本報告書の遺構番号には多少の異同がある。

遺構精査は、二分割法を原則とし、必要に応じて四分割法も用いた。遺構等の実測について簡易造り方測量を用い、縮尺は1/20とし、基本層序の実測には1/50の縮尺も使用した。

遺構外の出土遺物については、各グリッド、各層ごとに一括して取り上げ、遺物カードを同封することとした。遺構内からの出土遺物については、出土レベル、出土地点を1点ずつ図化した。

調査区の基本となる層からは、古環境復原のため各層ごとに土壤サンプルを採取し、花粉分

析を行なった。

写真撮影には、2台のカメラを使用し、調査各段階の状況を白黒、リバーサルフィルムに収めた。

(花海 義人)

#### 4. 調査の経過

大湯環状列石第7次発掘調査は、平成2年4月20日から開始し、全調査を終了したのは10月6日である。以下、調査日誌に基づいて、調査の経過を述べる。

4月20日、作業員への作業説明の後、グリッド設定と併行して、今後の調査計画作成及び重機導入のための基礎資料を把握することを目的に、調査区内にテストレンチを設定し、粗掘りを行なった。なお、調査は、土置場確保のため調査区東半、西半の順で進めた。

5月7日から10日にかけて重機を導入し、調査員の立ち合いのもとで調査区東半の表土除去作業を行う。これに伴って、北端部の除去終了地域より、随時、手掘りによる第Ⅱ層以下の除去作業を行ない、土壠、Tピット、集石造構を確認した。同月26日、調査は東半部中央に移り、ベルトコンベヤーの導入により遺構確認も順調に進み、6月に入ると、フ拉斯コ状土壠、Tピットなど多くの遺構の検出と、縄文時代後期及び早期の土器破片の出土があった。

6月29日、調査区東半の一連の作業も終了したことから、これまで土置場とした調査区西半に調査を移行するとともに、人手による遺構埋め戻しを行う。

7月2日より再度重機を導入し、調査区西半の土の移動と表土除去作業を行う。西側中央部、小丘状を呈する地域より、20数基からなるフ拉斯コ状土壠群を確認し、随時、精査を行なう。

8月4日、昭和50年度試掘調査部分の表土と、その周辺のⅢ層除去、遺構確認作業を行ない、焼土遺構の検出と、後期土器破片の出土があった。

9月4日、調査区南半に調査を移行し、9月中旬には列状に並ぶ柱穴状ピットを確認した。9月29日、作業員は本日で打ち切りとし、以後、担当者、調査員、補助員で残った作業を継続した。10月3日からは基本層序図作成とともに、フ拉斯コ状土壠群の追調査を行なった。

10月6日、F<sub>2</sub>区の全景、近景写真を撮影し、全ての調査を終了した。なお、同日午後より現地説明会を開催し、60余名の参加者があった。

(藤井 安正)

## 第Ⅲ章 検出遺構と出土遺物

F<sub>2</sub>区において検出された縄文時代の遺構は、集石遺構1基、Tピット13基、フラスコ状土壙24基、土壙9基、焼土遺構1基、柱穴状ピット7基である。このほかに平安時代の土壙1基が検出されている。また、遺構内・外より復元土器6個体と、ダンボール箱2箱の縄文土器破片、石器48点、土製品14点、石製品1点が出土した。

### 1. 集石遺構

#### 第411号集石遺構（第6図）

調査区北側において、拳大～人頭大の自然礫の分布密度が極めて高い地域が確認された。これらの礫は、配石遺構の石とはその大きさ、形状において異なること、A<sub>1</sub>区、C区で確認された礫群とはその広がりにおいて違いがみられることから、集石遺構として取り扱った。

本集石遺構は、調査区北側のY K-121・122、Y L-121・122グリッド、調査区北端に入り込む深さ1m程の沢の沢頭西側に位置する。Ⅲc層上面において集石の一部が表出し、その全容が明らかとなったのはⅢd層中位である。

集石は、3.5m×2.5mの範囲内に、径3cm～15cm大の自然礫320個余り集めており、特に西側に密度の高い部分がみられる。集石は沢地へ向う傾斜地に位置することから、西端と東端では10cm程の高低差を有する。

礫は、風化、破碎したものがみられるが、人為的に加工が施されたものや使用痕の観察されるものはみられなかった。

集石下は、未調査のため下部施設等については不明である。

集石内から遺物は出土しなかったが、確認面及び周辺出土遺物から縄文時代後期と考えられる。

### 2. 土 壕

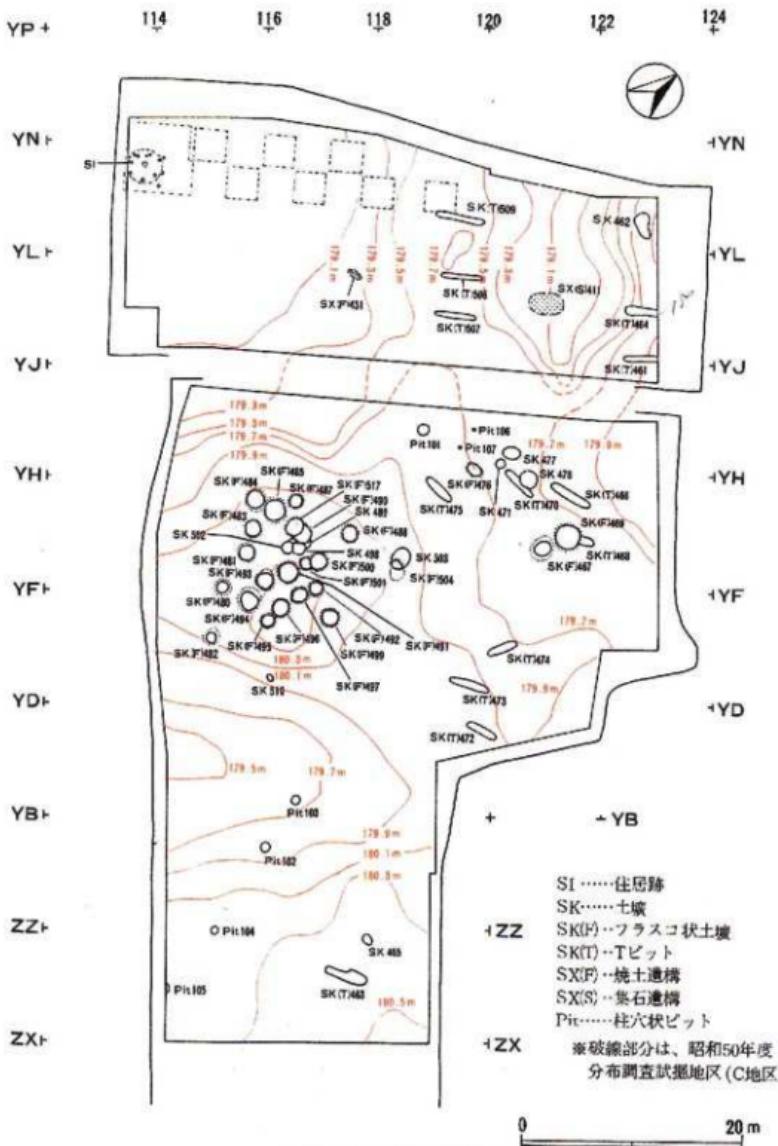
#### (1) Tピット

##### 第461号Tピット（第7図）

調査区北東部のY K-122グリッド、Ⅲd層上面において黄褐色土を少量含む黒色土の落ち込みを確認した。本ピット北西側4mの地点に第464号Tピットが平行して近接する。

規模は長軸302cm×短軸73cm、深さ103cmを測り、長軸方向はN-41°-Eである。

堆積土は8層に分層され、自然堆積と考えられる。2・4・6層は壁崩壊土と判断された。壁はⅢd、Ⅳ層を掘り込み、V層上位までを壁面とする。ピット横断面は「V」字状、縱断



第5図 F<sub>2</sub>区遺構配置図



第6図 第411号集石遺構実測図

面は、底面西端が奥に向かって掘り込まれた下膨れ状を呈する。底面はこまかな起伏をもちながら、西側に向け緩やかに傾斜している。

ピット内より遺物は出土しなかった。

構築時期は、造構確認面から縄文時代後期と考えられる。

#### 第463号Tピット（第7図）

調査区南側のZY-117グリッド、V層上面において黄褐色土を少量含む黒色土の落ち込みを確認した。本ピット北側3mの地点に第465号土壙が近接する。なお、本ピットの位置する地点は、調査区内でも比較的標高の高い地域のため、基本層序第V層上位面まで深耕を受け、ピット上半を消失している。

規模は長軸382cm×短軸84cm、確認面からの深さ117cmを測り、長軸方向はN-59°-Eである。本来の深さは20cm程深いものであったと考えられる。

堆積土は6層に分層され、自然堆積と判断された。3・5層は壁崩壊土である。

壁はV層を掘り込み、VI層上位までを壁面とし、ピット東側壁の一部が崩壊していた。ピット横断面は幅の狭い逆台形、縦断面は底面両端が奥に向かって掘り込まれた下膨れ状を呈するが、西側はその度合いが小さい。底面はこまかな起伏をもち、堅くしまっていた。

ピット内より遺物は出土しなかった。

#### 第464号Tピット（第7図）

調査区北端のYK-122グリッド、IIId層上面において黒色土の落ち込みを確認した。本ピット南側に第461号Tピットが近接する。

規模は長軸338cm×短軸80cm、深さ137cmを測り、長軸方向はN-46°-Eである。

堆積土は10層に分層され、自然堆積と判断された。3・5・6・8層は壁崩壊土である。

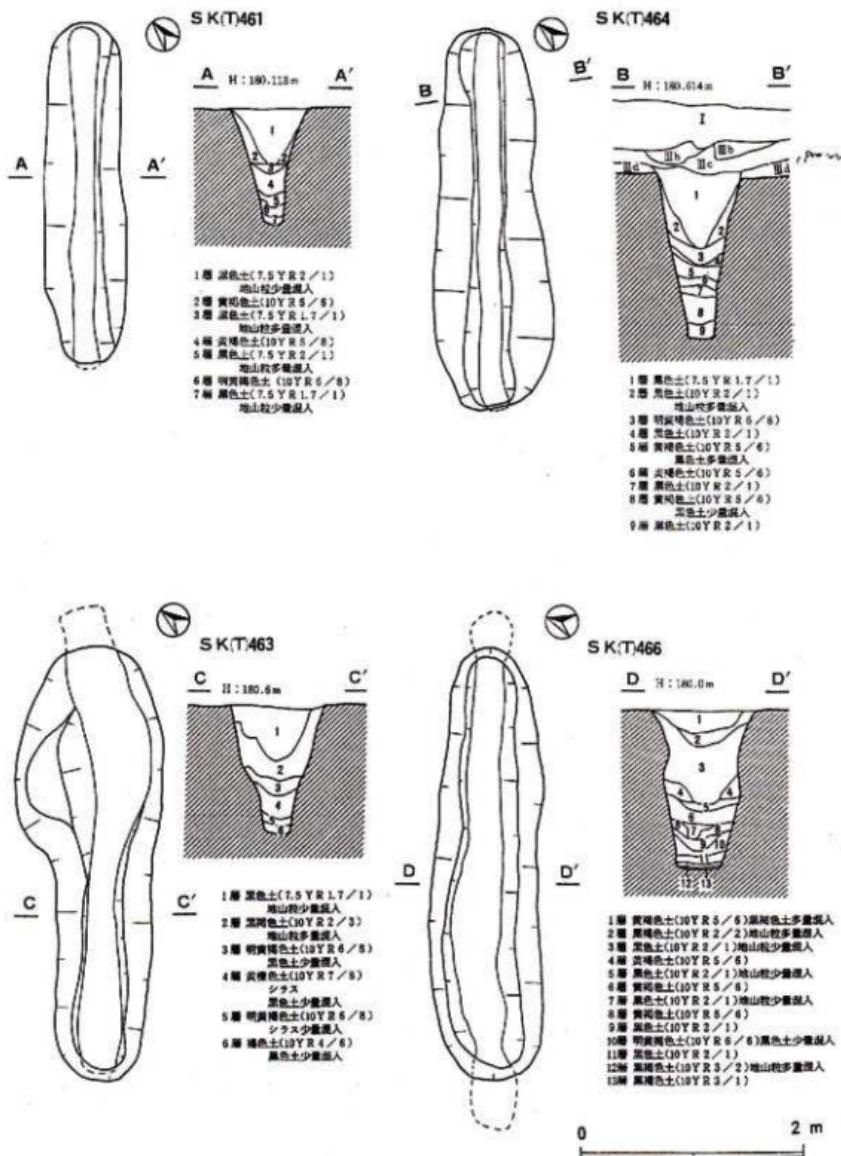
壁はIIId～V層を掘り込み、VI層上位までを壁面とする。ピット横断面は幅の狭い逆台形、縦断面は方形を呈する。底面はこまかな起伏をもち、西側に向け緩やかに傾斜している。

ピット内より遺物は出土しなかった。

構築時期は、造構確認面及び周辺の出土遺物から縄文時代後期と考えられる。

#### 第466号Tピット（第7図）

調査区北東部のYH-121グリッド、IIId層上面において黒褐色土を多量に含んだ黄褐色土の落ち込みを確認した。本ピット南側に第468号Tピット、469号ラスコ状土壙、西側に第470号Tピットが縦列、近接する。



第7図 Tピット実測図(1)

規模は長軸382cm×短軸78cm、深さ141cmを測り、長軸方向はN-74°-Eである。

堆積土は15層に分層され、上位2層が人為、他層は自然堆積と判断された。

壁はⅢd～V層を掘り込み、VI層上位までを壁面とする。ピット横断面は逆台形を呈するものと考えられるが、壁の崩壊が著しい。縦断面は長軸両端とも大きく掘り込まれて下膨れ状を呈する。底面はこまかに起伏がみられるが、大概平坦で堅くしまっていた。

ピット内より遺物は出土しなかった。

構築時期は、造構確認面及び周辺の出土遺物から縄文時代後期と考えられる。

#### 第468号Tピット（第8図）

調査区北東部のY G・Y H-121グリッド、Ⅲd層上面において黒色土の落ち込みを確認した。本ピットは第469号フ拉斯コ状土壤と重複しており、本ピットが古い。また、本ピット南側に第466号Tピット、西側に第470号Tピットが平行、継列して存在する。

平面形の規模は確認されているだけで、長軸230（残存長）cm×短軸90cm、深さ150cmを測り、長軸方向はN-48°-Eである。

堆積土は黒色土と黄褐色土が交互に堆積しており、第469号フ拉斯コ状土壤底面と重複する箇所は堅くしまっていた。

壁はⅢd～V層を掘り込み、VI層上位までを壁面とする。ピット横断面は幅の狭い逆台形、縦断面は底面両端が大きく掘り込まれた下膨れ状を呈する。底面はこまかい起伏がみられるが平坦な感じを受け、堅くしまっていた。

ピット内より遺物は出土しなかった。

構築時期は、造構確認面及び周辺出土遺物から縄文時代後期と考えられる。

#### 第470号Tピット（第8図）

調査区北東部のY H・Y I-120グリッド、Ⅲd層上面において第478号土壤と重複する黒褐色土の落ち込みを確認した。本ピットが古い。また、本ピット東側に第466号、468号Tピットが継列、近接する。

規模は長軸326cm×短軸73cm、深さ150cmを測り、長軸方向はN-89°-Eである。

堆積土は7層に分層され、自然堆積と判断された。3・6層は壁崩壊土である。

壁はⅢd～V層を掘り込み、VI層上位までを壁面とする。ピット横断面は狭い逆台形、縦断面は底面両端が大きく掘り込まれた下膨れ状を呈する。底面はこまかに起伏がみられるが、平坦で堅くしまっていた。

ピット内より遺物は出土しなかった。

構築時期は、造構確認面及び周辺出土遺物から縄文時代後期と考えられる。

#### 第472号Tピット（第8図）

調査区東部のYE-119・120グリッド、IV層上面において黄褐色土の落ち込みを確認した。本ピット北側に第473号・474号Tピットが隣接する。

規模は長軸282cm×短軸76cm、深さ101cmを測り、長軸方向はN-74°-Eである。

堆積土は7層に分層された。1層のみが人為堆積、他は自然堆積と判断された。

壁はIV層を掘り込み、V層までを壁面とする。ピット横断面は「Y」字状、縦断面は底面両端がわずかに掘り込まれた下彫れ状を呈する。底面は大きく緩やかな起伏がみられ、軟弱である。

ピット内より遺物は出土しなかった。

構築時期は、造構確認面及び周辺出土遺物から縄文時代後期と考えられる。

#### 第473号Tピット（第8図）

調査区東部のYE-119グリッド、III層中位において黄褐色土を少量含む黒色土の落ち込みを確認した。本ピット北・南側に第472号・474号Tピットが隣接する。

規模は長軸390cm×短軸72cm、深さ118cmを測り、長軸方向はN-61°-Eである。

堆積土は7層に分層され、自然堆積と判断された。3・5・7層は壁崩壊土である。

壁はIIId～V層を掘り込み、VI層上位までを壁面とする。ピット横断面は幅の狭い逆台形状、縦断面は底面両端が大きく掘り込まれた下彫れ状を呈する。底面はやや大きな起伏をもち、軟弱である。

ピット内より遺物は出土しなかった。

構築時期は、造構確認面及び周辺出土遺物から縄文時代後期と考えられる。

#### 第474号Tピット（第9図）

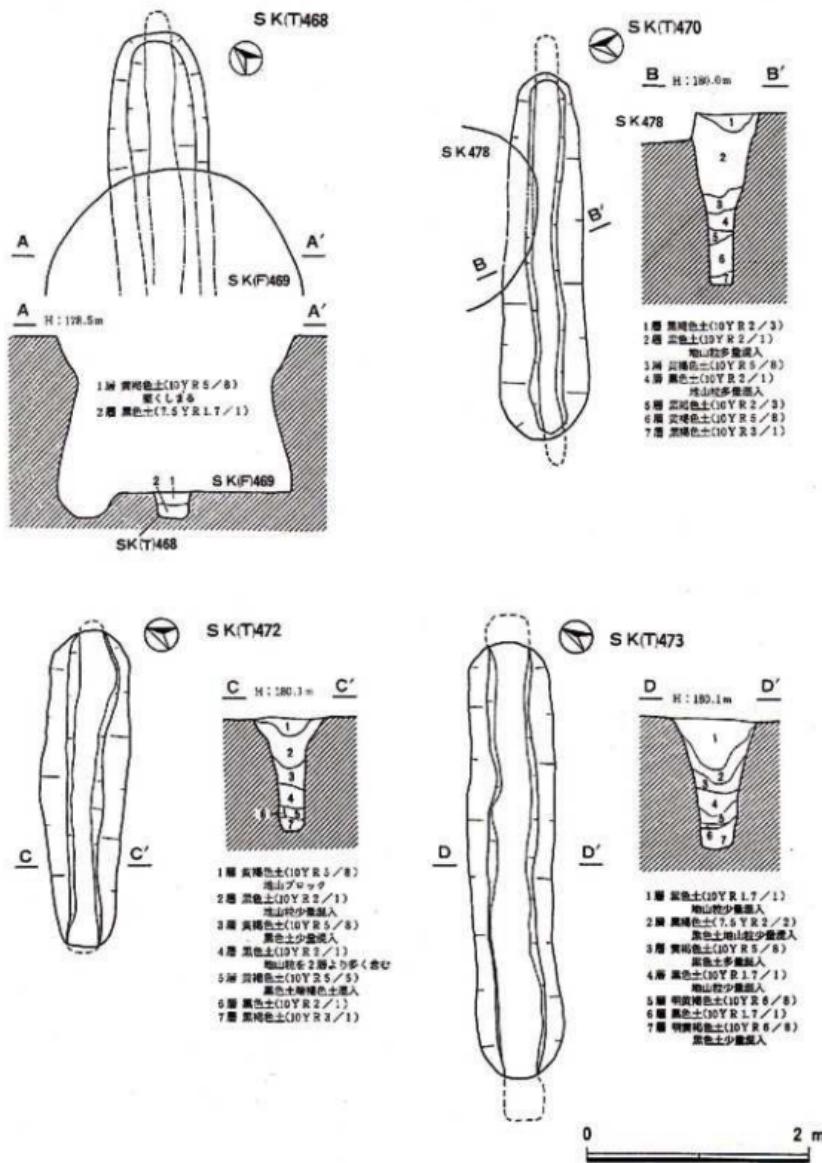
調査区東部のYE-119・120、YF-120グリッド、IIId層中位において黒色土の落ち込みを確認した。本ピット南側に第472号・473号Tピットが隣接する。

規模は長軸290cm×短軸66cm、深さ126cmを測り、長軸方向はN-24°-Eである。

堆積土は7層に分層され、自然堆積と判断された。4・6層は壁崩壊土である。

壁はIIId層中位～V層を掘り込み、VI層上位までを壁面とする。ピット横断面は「Y」字状、縦断面は底面両端が掘り込まれた下彫れ状を呈する。底面は大きな起伏をもち、軟弱である。

ピット内より遺物は出土しなかった。



第8図 Tピット実測図(2)

構築時期は、遺構確認面及び周辺出土遺物から縄文時代後期と考えられる。

#### 第475号Tピット（第9図）

調査区中央よりやや北側のYH-118・119グリッド、IIId層中位において黒色土の落ち込みを確認した。本ピット北西～北東にかけて第476号土壠・101号柱穴状ピットなど多くの遺構が近接する。

規模は長軸312cm×短軸62cm、深さ146cmを測り、長軸方向はN-89°-Wである。

堆積土は8層に分層され、自然堆積と判断された。3・5・7層は壁崩壊土である。

壁はIIIa層～V層を掘り込み、VI層上位までを壁面とする。ピット横断面は「Y」字状、縦断面は底面両端が大きく掘り込まれた下膨れ状を呈する。底面はこまかに起伏をもち、軟弱である。

ピット内より遺物は出土しなかった。

構築時期は、遺構確認面及び周辺出土遺物から縄文時代後期と考えられる。

#### 第506号Tピット（第9図、20図1・2）

調査区北部のYL-119グリッド、IIId層下位において黒褐色土の落ち込みを確認した。本ピット北側・南側に第507号・509号Tピットが平行して存在する。

規模は長軸369cm×短軸60cm、深さ126cmを測り、長軸方向はN-50°-Eである。

堆積土は8層に分層され、自然堆積と判断された。2・4・6・7層は壁崩壊土である。

壁はIIIa層～V層を掘り込み、VI層上位までを壁面とする。ピット横断面は「Y」字状、縦断面は底面両端が大きく掘り込まれた下膨れ状を呈する。底面は、両端に向けて緩やかに傾斜し、こまかに起伏をもち、軟弱である。

ピット上位より土器破片2点（第20図1・2）が出土した。1は底部、2は小型深鉢形土器頸部破片で、R縄文による網目状擦糸文が施されている。

構築時期は、出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。

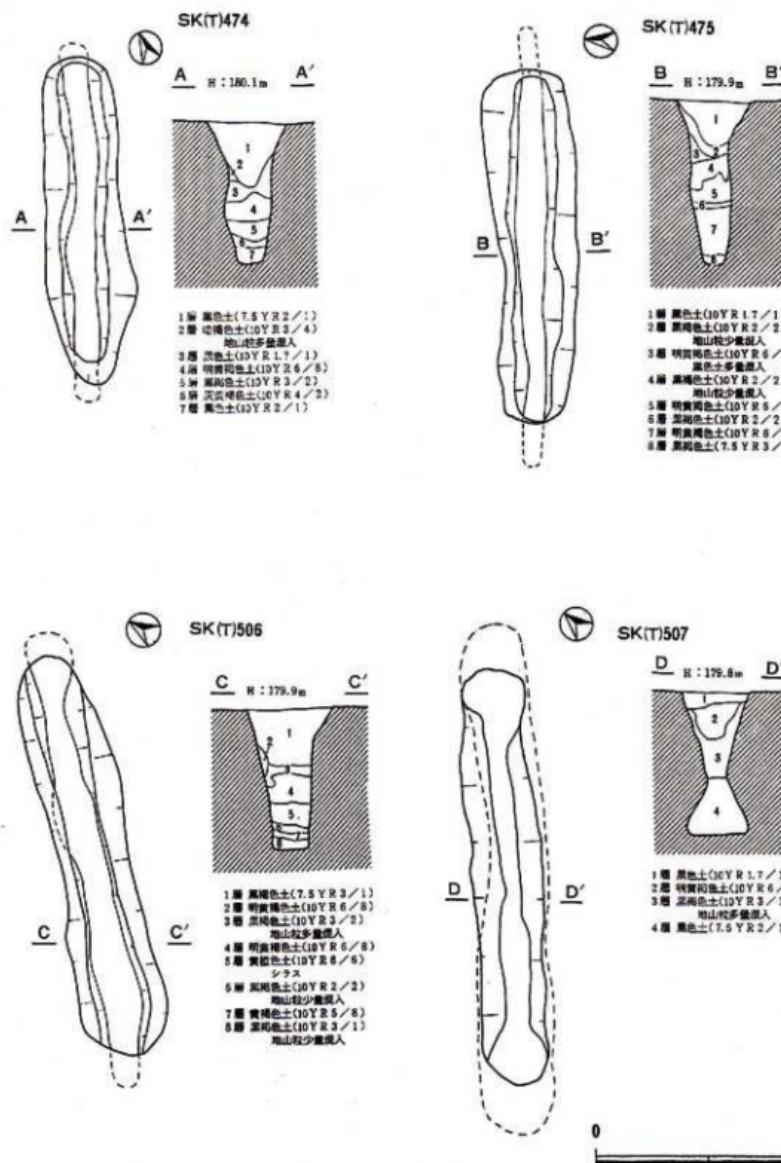
#### 第507号Tピット（第9図）

調査区北部のYK-118・119グリッド、IIId層下位において黒色土の落ち込みを確認した。本ピット北西側に第506号・509号Tピットが平行して近接する。

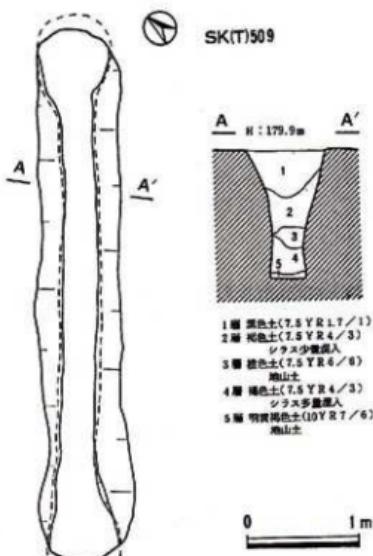
規模は長軸318cm×短軸64cm、深さ128cmを測る。長軸方向はN-46°-Eである。

堆積土は4層に分層され、自然堆積と判断した。2層は壁崩壊土である。

壁はIIIa層～V層を掘り込み、VI層上位までを壁面とする。ピット横断面は「フラスコ」状、縦



第9図 Tピット実測図(3)



第10図 Tピット実測図(4)

縦断面は底部両端が掘り込まれた下彫れ状を呈する。底面は、ほぼ平坦で堅くしまっていた。

ピット内より遺物は出土しなかった。

構築時期は、遺構確認面及び周辺出土遺物から縄文時代後期と考えられる。

断面は底面両端が大きく掘り込まれた下彫れ状を呈する。底面は、ほぼ平坦で堅くしまっていた。

ピット内より遺物は出土しなかった。

構築時期は、遺構確認面及び周辺出土遺物から縄文時代後期と考えられる。

#### 第509号Tピット(第10図)

調査区北部のYM-118・119グリッド、IIId層下位において黒色土の落ち込みを確認した。本ピット北西側に第506号・509号Tピットが平行して近接する。

規模は長軸478cm×短軸68cm、深さ114cmを測り、長軸方向はN-52°-Eである。

堆積土は5ブロックに区分され、人為堆積と判断された。なお1層のみ自然堆積である。

壁はIIId層～V層を掘り込み、VI層上位までを壁面とする。ピット横断面は幅の狭い逆台形、

#### (2) フラスコ状土壤

##### 第467号フラスコ状土壤(第11図)

調査区東部のYG-120・121グリッド、IIId層上面において黄褐色土を含む暗褐色土の落ち込みを確認した。本土塚北側に、第468号Tピット、469号フラスコ状土壤が近接する。なお、調査区中央部に存在するフラスコ状土壤群とは約10mの間隔をもっている。

規模は口径164cm×126cm、底径228cm×185cm、深さ160cm、底面積3.18m<sup>2</sup>を測る。

堆積土は17ブロックに区分され、黄褐色土が多量に充填されていることから、人為堆積と判断した。

壁はIIId層～V層を掘り抜き、VI層上位までを壁面とする。壁は底面より内傾して立ち上がり頸部に達する。底面は平坦で、軟弱である。

土壇内より遺物は出土しなかった。

本土壇の構築時期は、遺構確認面及び周辺出土遺物より縄文時代後期と考えられる。

#### 第469号フ拉斯コ状土壇（第11図、21図2）

調査区北東部のY G-121・Y H-121グリッド、IIId層上位において第468号Tピットと重複する黒色土の落ち込みを確認した。新旧関係は本土壇が新しい。

規模は口径231cm×233cm、底径200cm×240cm、底面積3.74m<sup>2</sup>を測る。底面は二段構造をとることから、上段・下段までのそれぞれの深さは、133cm、202cmを測る。

堆積土は21ブロックに区分された。堆積状況を観察するとレンズ状を呈するが、多量の黄褐色土が小塊として含まれていることから、人為堆積と判断した。

壁はIIId層～V層を掘り抜き、VI層上位までを壁面とする。壁は底面より内湾して立ち上がり、頸部へと達する。底面には、東側に180cm×90cm程のテラス状の平場と、これを取り囲むように径40cm～100cm、テラス状の平場からの深さ24cm～69cmの4基の小土壇が確認された。テラス状の平場は、平坦で堅くしまり、第469号ピットとの重複部には貼床が施されていた。小土壇は円形又は方形プランを呈する。断面形は方形、鍋底状を呈し、底面は軟弱である。

上壇内より、搔器1点（第21図2）が出土した。押圧剝離によって作り出された刃部を下側縁にもつ。石質は硬質頁岩である。

本土壇の構築時期は、遺構確認面及び周辺出土遺物から縄文時代後期と考えられる。

#### 第476号フ拉斯コ状土壇（第11図）

調査区北東部のY I-120グリッド、IIId層中位において黄褐色土を少量含む黒褐色土の落ち込みを確認した。本土壇北側に第477号土壇など多くの遺構が近接している。

規模は口径131cm×106cm、底径132cm×104cm、深さ48cm、底面積1.33m<sup>2</sup>を測る。

堆積土は5層に分層され、自然堆積と判断された。

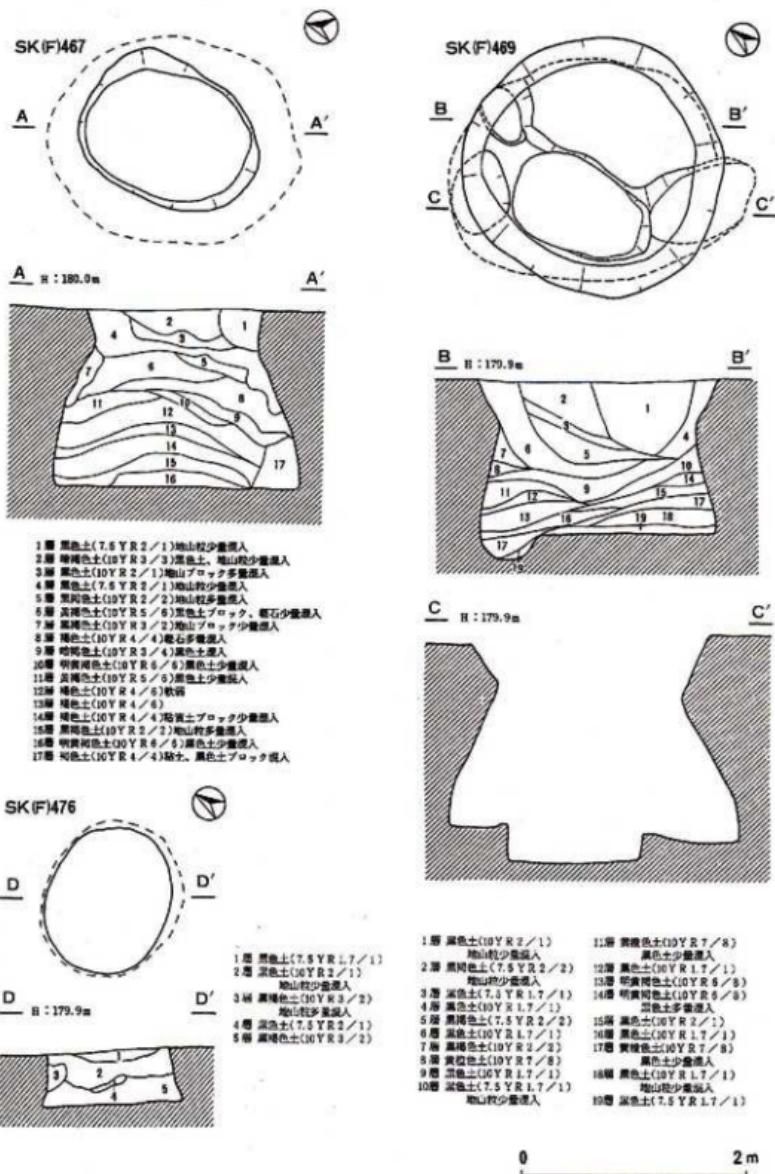
壁はIIId層中位～V層中位を壁面とし、底面よりわずかに内傾して立ち上がる。底面はこまかな起伏をもち、堅くしまっていた。

土壇内より遺物は出土しなかった。

本土壇の構築時期は、遺構確認面及び周辺出土遺物から縄文時代後期と考えられる。

#### 第480号フ拉斯コ状土壇（第12図）

調査区中央部の遺構密集地域南縁、Y F-115・Y G-115グリッドに位置する。V層上面において明褐色土が土壇中央に堆積する落ち込みを確認した。本土壇東側には第494号フ拉斯コ状



第11図 フラスコ状土壤実測図(1)

土壌など多くの遺構が近接している。なお、本土壌は深耕による搅乱をうけ、その上半部を消失している。

規模は底径142cm×141cm、確認面からの深さ114cm、底面積1.53m<sup>2</sup>を測る。

堆積土は6ブロックに区分され、いずれにも黄褐色土、明黄褐色土（シラス）が多量に含まれることから、人為堆積と判断した。

壁はV・VI層を壁面とし、わずかに内湾しながら底面より立ち上がる。底面は平坦で、堅くしまっていた。底面中央には、径26cm、深さ6cmの柱穴状ピットが確認された。

土壌内より遺物は出土しなかった。

#### 第481号 フラスコ状土壌（第12図）

調査区中央部の遺構密集地域南西縁、Y G-115グリッド、VI層において明黄褐色土が充填された落ち込みを確認した。本土壌北側には第483号フラスコ状土壌をはじめとする多くの遺構が存在する。本土壌も深耕により土壌下半を残すのみである。

規模は底径173cm×165cm、確認面からの深さ44cm、底面積2.15m<sup>2</sup>を測る。

堆積土は6ブロックに区分された。黄褐色土の小塊が集合しブロック状となり、土壌内に堆積することから、人為堆積と判断した。

壁はVI層を壁面とし、底面より内傾して立ち上がる。底面は平坦で、堅くしまっていた。底面中央には、径24cm、深さ10cmの柱穴状ピットが確認された。

土壌内より遺物は出土しなかった。

#### 第482号 フラスコ状土壌（第12図）

調査区中央部の遺構密集地域南端、Y E-114・115グリッド、IIId層下位において黄褐色土を少量含む黒色土の落ち込みを確認した。本土壌も深耕による搅乱を受け、口縁部上端を消失している。

規模は頭部径102cm×92cm、底径158cm×156cm、確認面からの深さ135cm、底面積1.80m<sup>2</sup>を測る。

堆積土は5層に分層された。2～3層には黄褐色土の小塊が多く含まれていることから、2～3層のみ人為堆積と判断した。

壁はIIId～V層を掘り抜き、VI層上位までを壁面とし、底面より内傾気味に立ち上がり、頭部へと達する。底面は平坦で、堅くしまっていた。底面中央には、径24cm、深さ10cmの柱穴状ピットが確認された。

土壌内より遺物は出土しなかった。

#### 第483号 フラスコ状土壙（第12図）

調査区中央部の遺構密集地域南西側、Y G-115・Y H-115グリッド、V層下位において明黄褐色土粒を含む黒色土の落ち込みを確認した。本土壙北側に第485号 フラスコ状土壙のほか多くの遺構が近接する。本土壙も深耕による擾乱を受け、その上半が削平されている。

規模は底径170cm×151cm、確認面からの深さ57cm、底面積1.96m<sup>2</sup>を測る。

堆積土は5ブロックに区分され、人為堆積と判断された。

壁はVI層上位までを壁面とし、底面より内傾して立ち上がる。底面は平坦で、堅くしまっていた。底面中央には、径36cm、深さ15cmの柱穴状ピットと、これを取り巻むように西壁際に径18cm~26cm、深さ4cm~11cmのピットが5個確認された。

土壙西壁床面より復元土器1点（第19図）が出土した。深鉢形土器で頸部上半を欠く。文様帶は3条の平行沈線により胴部上半に区画され、円文と椿円文が等間隔に施文されている。沈線内にはR L 繩文が充填されている。底径7.4cm、色調はにぼい黄橙色を呈し、器外面にはスヌ状炭化物が付着している。

本土壙の構築時期は、出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。

#### 第484号 フラスコ状土壙（第12図）

調査区中央部の遺構密集地域西端、Y H-115グリッド、V層下位において黄橙色土が充填された落ち込みを確認した。本土壙も深耕によりその上半が削平されている。第485号 フラスコ状土壙と重複関係にあり、本土壙が古い。

規模は底径(213)cm×210cm、確認面からの深さ80cm、底面積2.89m<sup>2</sup>を測る。

堆積土は7ブロックに区分された。1~4層は黄橙色土が小塊状に堆積し、又、他層にもシラス土が多量に含まれることから、人為堆積と判断した。

壁はVI層上位までを壁面とし、底面よりわずかに内湾気味に立ち上がる。底面は大きな起伏をもち、堅くしまっていた。

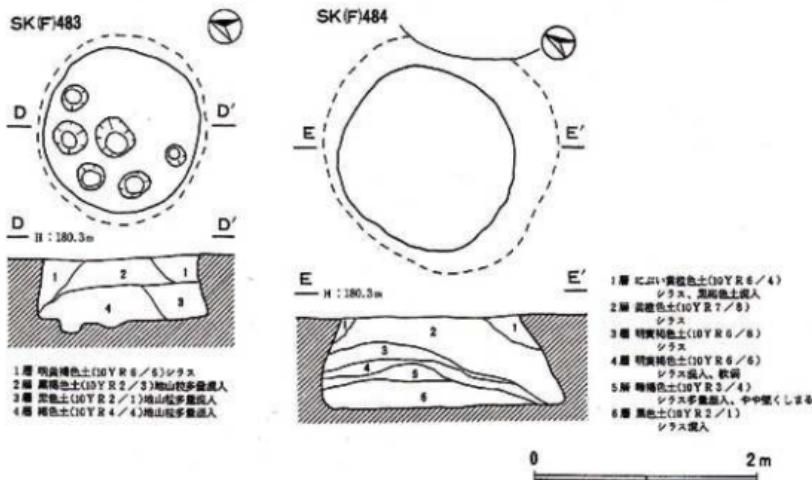
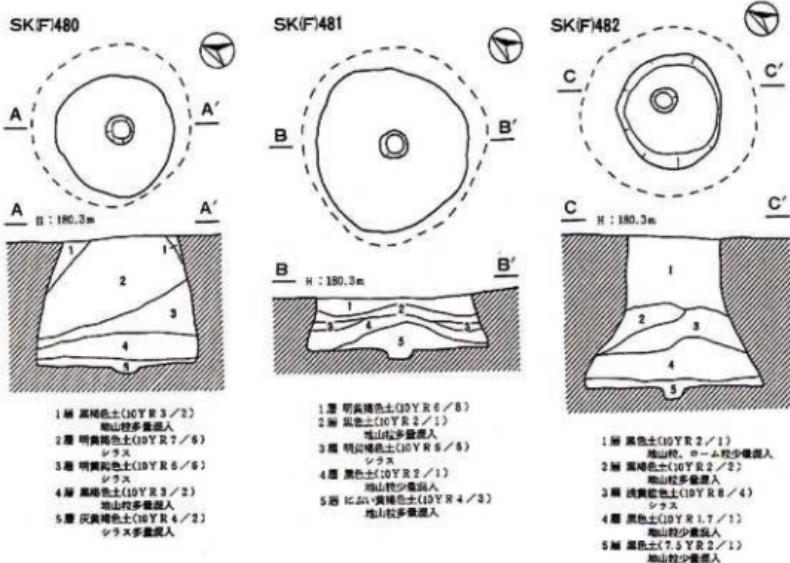
土壙内より遺物は出土しなかった。

#### 第485号 フラスコ状土壙（第13図）

調査区中央部の遺構密集地域西側、Y H-115・116グリッド、V層下位において黒褐色土、明黄褐色土が充填された落ち込みを確認した。本土壙も深耕によりその上半が削平されている。第484号 フラスコ状土壙とは、底面において重複関係にあり、本土壙が新しい。

規模は底径194cm×192cm、確認面からの深さ72cm、底面積2.89m<sup>2</sup>を測る。

堆積土は7ブロックに区分され、人為堆積と判断された。



第12図 フラスコ状土壤実測図(2)

壁はVI層上位を壁面とし、底面より内湾気味に立ち上がる。底面は大きな起伏をもち、北側に向けて緩やかに傾斜し、堅くしまっていた。

土壌内より遺物は出土しなかった。

#### 第487号フラスコ状土壙（第13図、20図3・4）

調査区中央部の遺構密集地域北西端、YH-116グリッド、V層下位において黄褐色土を含む黒褐色土の落ち込みを確認した。本土壙は深耕による擾乱を受け、その上半を消失している。本土壙南側に第485号・517号フラスコ状土壙が近接する。

規模は底径132cm×125cm、確認面からの深さ40cm、底面積1.39m<sup>2</sup>を測る。

堆積土は5ブロックに区分され、黄褐色土を多量に含むことから人為堆積と判断された。

壁はVI層上位までを壁面とし、底面より内傾して立ち上がる。底面は大きな起伏をもち、堅くしまっていた。

土壙内より土器片8点（第20図3・4）が出土した。3、4は同一個体で、地文（RL繩文）上に沈線が施文され、沈線の両側は磨り消しが行われている。焼成は良好、色調は褐色を呈する。

本土壙の構築時期は、出土遺物から縄文時代後期初頭と考えられる。

#### 第488号フラスコ状土壙（第14図、20図5）

調査区中央部の遺構密集地域北端、YG-117・YH-117グリッド、V層下位において黄褐色土を多量に含む黒色土の落ち込みを確認した。本土壙も擾乱を受け、その上半を消失する。

規模は底径160cm×159cm、確認面からの深さ69cm、底面積1.97m<sup>2</sup>を測る。

堆積土は9ブロックに区分された。各ブロックには黄褐色土、シラス土が多量に含まれることから人為堆積と判断した。

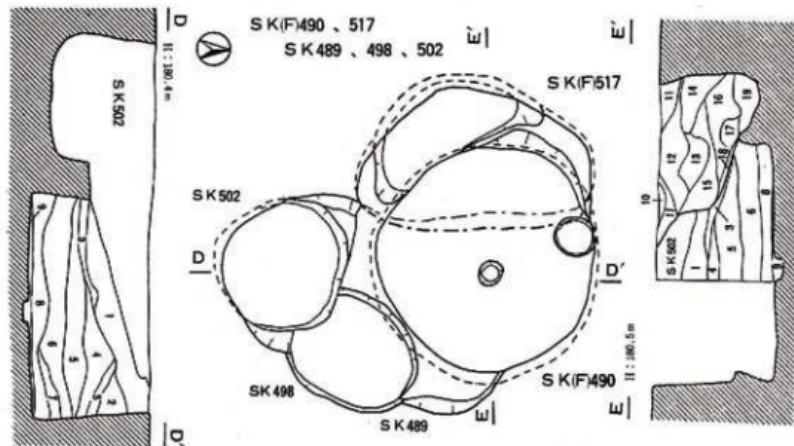
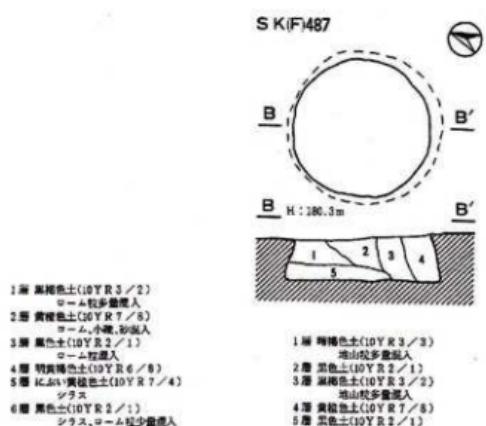
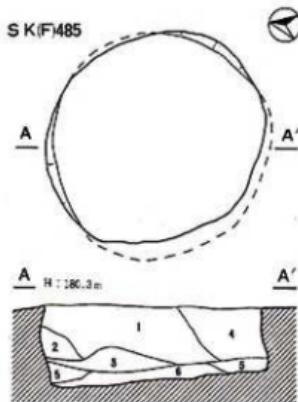
壁はVI層上位までを壁面とし、底面より内湾気味に立ち上がる。底面は平坦で、堅くなり、南側に緩やかに傾斜している。

土壙内より土器1点（第20図5）が出土した。RL繩文が施文されている。

本土壙の構築時期は、出土遺物から縄文時代後期と考えられる。

#### 第490号フラスコ状土壙（第13図、20図6～17）

調査区中央部の遺構密集地域北縁、YG-116・YH-116グリッド、VI層において黒褐色土、黄褐色土から成る不整形の落ち込みを確認した。本土壙は第517号フラスコ状土壙、第489号土壙と重複しており、その新旧関係は489号土壙より新しく、517号フラスコ状土壙より古い。な



- S K(F)490
- 1層 黄褐色土(10YR 2 / 2)地山少量混入
  - 2層 黄褐色土(10YR 5 / 8)黑色土混入
  - 3層 内向褐色土(10YR 7 / 8)
  - 4層 黄褐色土(10YR 6 / 8)黑色土混入
  - 5層 黑褐色土(10YR 2 / 2)地山少量混入
  - 6層 黑褐色土(10YR 4 / 4)地山性、シラス混入
  - 7層 地山性(10YR 4 / 3)シラス多量混入
  - 8層 黑褐色土(10YR 3 / 2)地山性混入
  - 9層 黑褐色土(10YR 2 / 1)しまり有

- S K(F)517
- 10層 明黄褐色土(10YR 6 / 8)砂礫混入
  - 11層 黑褐色土(10YR 5 / 2)地山少量混入
  - 12層 黑褐色土(10YR 5 / 8)黒褐色土混入
  - 13層 明黄褐色土(10YR 6 / 8)地山ブロック
  - 14層 黄褐色土(10YR 5 / 8)砂礫混入
  - 15層 明黄褐色土(10YR 6 / 8)砂礫、粘紫土混入
  - 16層 黄褐色土(10YR 5 / 8)砂礫、シラス混入
  - 17層 黄褐色土(10YR 5 / 6)粘紫土混入
  - 18層 黑褐色土(10YR 2 / 2)地山性混入、堅くしまる
  - 19層 黑褐色土(10YR 6 / 8)シラス混入



第13図 フラスコ状土壤実測図(3)

お、本土壙においても深耕による擾乱を受け、その上半を消失している。

規模は底径210cm×202cm、確認面からの深さ106cm、底面積3.35m<sup>2</sup>を測る。

堆積土は10ブロックに区分された。最下層は自然によるものと考えられるが、その他については、黄褐色土塊、シラス土を多量に含むことから、人為堆積と判断された。

壁はVI層までを壁面とし、底面より内傾して立ち上がる。底面は平坦で、堅くしまっていた。底面中央には、径22cm、深さ10cm、北壁際底面に径36cm、深さ26cmの柱穴状ピットが確認された。

土壤下位より、土器破片19点（第20図6～17）が出土した。6～11は深鉢・鉢の口縁部、胴部破片で、沈線により平行文、幾何学文が施文されている。12はR L 繩文、16は網目状捺糸文（原体R）が施文されている。焼成は良好、色調はにぶい黄褐色、黒褐色を呈する。

本土壙の構築時期は、出土遺物から繩文時代後期前葉と考えられる。

#### 第491号フラスコ状土壤（第14図）

調査区中央部の遺構密集地域ほぼ中央、Y G-116グリッド、VI層において黒褐色土を取り囲む明黄褐色土の落ち込みを確認した。本土壙周辺には第492号フラスコ状土壤など多くの遺構が近接する。本土壙も深耕により上半が削平されている。

規模は底径200cm×184cm、確認面からの深さ69cm、底面積は2.79m<sup>2</sup>を測る。

堆積土は4ブロックに区分され、人為堆積と判断された。

壁はVI層までを壁面とし、底面より内傾して立ち上がる。底面はこまかに起伏をもち、堅くしまっていた。

土壤内より遺物は出土しなかった。

#### 第492号フラスコ状土壤（第14図）

調査区中央部の遺構密集地域東縁、Y F-117・Y G-117グリッド、V層において黄褐色土の落ち込みを確認した。本土壙西側には第491号フラスコ状土壤のほか多くの遺構が近接する。本土壙も深耕による擾乱を受け、その上端を消失する。

規模は底径155cm×153cm、確認面からの深さ114cm、底面積1.81m<sup>2</sup>を測る。

堆積土は16ブロックに区分され、小塊状に黄褐色土などが多量に入り込むことから、人為堆積と判断した。

壁はVI層上位を壁面とし、底面より外湾して立ち上がる。底面はこまかに起伏がみられ、堅くしまっていた。底面中央には、径38cm、深さ13cmの柱穴状ピットが確認された。

土壤内より遺物は出土しなかった。

#### 第493号 フラスコ状土壌（第14図）

調査区中央部の遺構密集地域ほぼ中央、Y G-115・116グリッド、VI層において明黄褐色土、黒褐色土からなる落ち込みを確認した。本土壌周辺には第494号 フラスコ状土壌のほか多くの遺構が近接する。本土壌も深耕による擾乱を受け、その上半を消失する。

規模は底径162cm×159cm、確認面からの深さ69cm、底面積1.98m<sup>2</sup>を測る。

堆積土は6ブロックに区分され、シラス土が多量に混入することから、人為堆積と判断した。

壁はVI層までを壁面とし、底面より内傾して立ち上がる。底面はこまかに起伏をもち、堅くしまっていた。底面中央には、径40cm、深さ6cmの柱穴状ピットが確認された。

土壤内より遺物は出土しなかった。

#### 第494号 フラスコ状土壌（第14図）

調査区中央部の遺構密集地域南縁、Y F-115・Y G-115グリッド、V層においてにぶい黄橙色土を取り囲む黒褐色土の落ち込みを確認した。本土壌北側には第493号 フラスコ状土壌のほか多くの遺構が近接する。本土壌も深耕による擾乱を受け、その上半を消失する。

規模は底径184cm×180cm、確認面からの深さ135cm、底面積2.54m<sup>2</sup>を測る。

堆積土は13ブロックに区分された。土層図は自然堆積的な状況を示すが、多量の砂礫、小塊状のシラス土を含むことから、人為堆積と判断した。

壁はVI層上位までを壁面とし、底面より外湾気味に立ち上がる。底面は平坦で、堅くしまっていた。土壤西側には、底面より5cm程高い所に「三ヶ月」状を呈する、最大幅35cmのテラス状施設が確認された。

土壤内より遺物は出土しなかった。

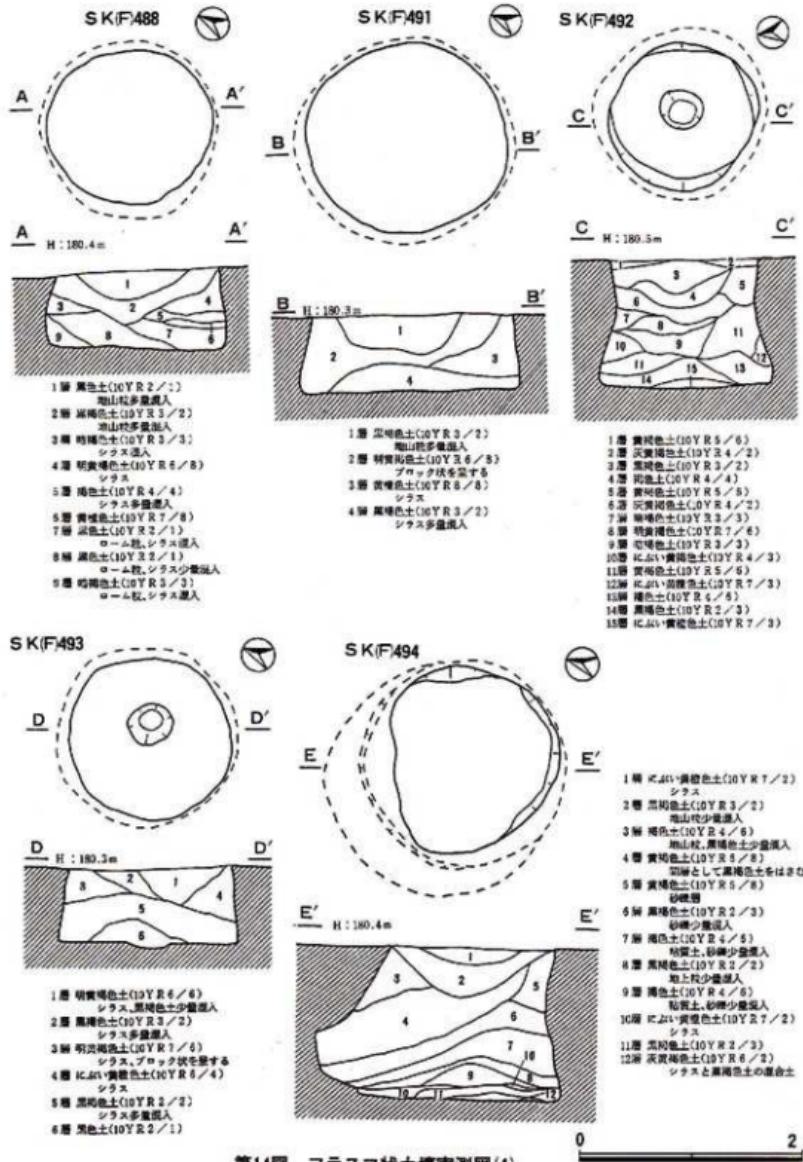
#### 第495号 フラスコ状土壌（第15図）

調査区中央部の遺構密集地域南東縁、Y F-115・116グリッド、V層において明黄褐色土を多量に含む黒褐色土の落ち込みを確認した。本土壌北西側には第496号 フラスコ状土壌など多くの遺構が近接する。本土壌も深耕による擾乱を受け、その上半を消失する。なお、本土壌においても崩壊を防ぐことから半截したのみである。

規模は底径154cm、確認面からの深さ130cm、推定底面積1.90m<sup>2</sup>を測る。

堆積土は9ブロックに区分され、人為堆積と判断された。

壁はVI層上位までを壁面とし、外湾して立ち上がる。底面はこまかに起伏をもち、堅くしまっていた。



第14図 フラスコ状土壤実測図(4)

土壌内より遺物は出土しなかった。

#### 第496号 フラスコ状土壙（第15図）

調査区中央部の造構密集地域東側、YF-116グリッド、VI層上面において黄褐色土の落ち込みを確認した。本土壙周辺には第495号 フラスコ状土壙など多くの造構が隣接している。本土壙も深耕による搅乱を受け、その上半を消失する。なお、本土壙においても崩壊を防ぐことから半截したのみである。

規模は底径161cm、確認面からの深さ70cm、堆定底面積1.90m<sup>2</sup>を測る。

堆積土は5ブロックに区分された。多量の黄褐色土、シラス土が充填されていることから、人為堆積と判断した。

壁はVI層上位までを壁面とし、底面より内傾して立ち上がる。底面はこまかに起伏がみられ、堅くしまっていた。

土壙内より遺物は出土しなかった。

#### 第497号 フラスコ状土壙（第15図）

調査区中央部の造構密集地域東側、YF-116・YG-116グリッド、VI層において黒褐色土、黄褐色土からなる落ち込みを確認した。本土壙周辺には第491号 フラスコ状土壙をはじめとする多くの造構が近接する。本土壙も深耕により頸部上半を消失する。なお、完掘することにより崩壊する危険性があることから半截したのみである。

規模は底径161cm、確認面からの深さ132cm、堆定底面積1.85m<sup>2</sup>を測る。

堆積土は9ブロックに区分された。各ブロックには黄褐色土の小塊や褐色粘質土が混入することから、人為堆積と判断した。

壁はVI層までを壁面とし、底面より内湾気味に立ち上がる。底面は平坦で、堅くしまっていた。

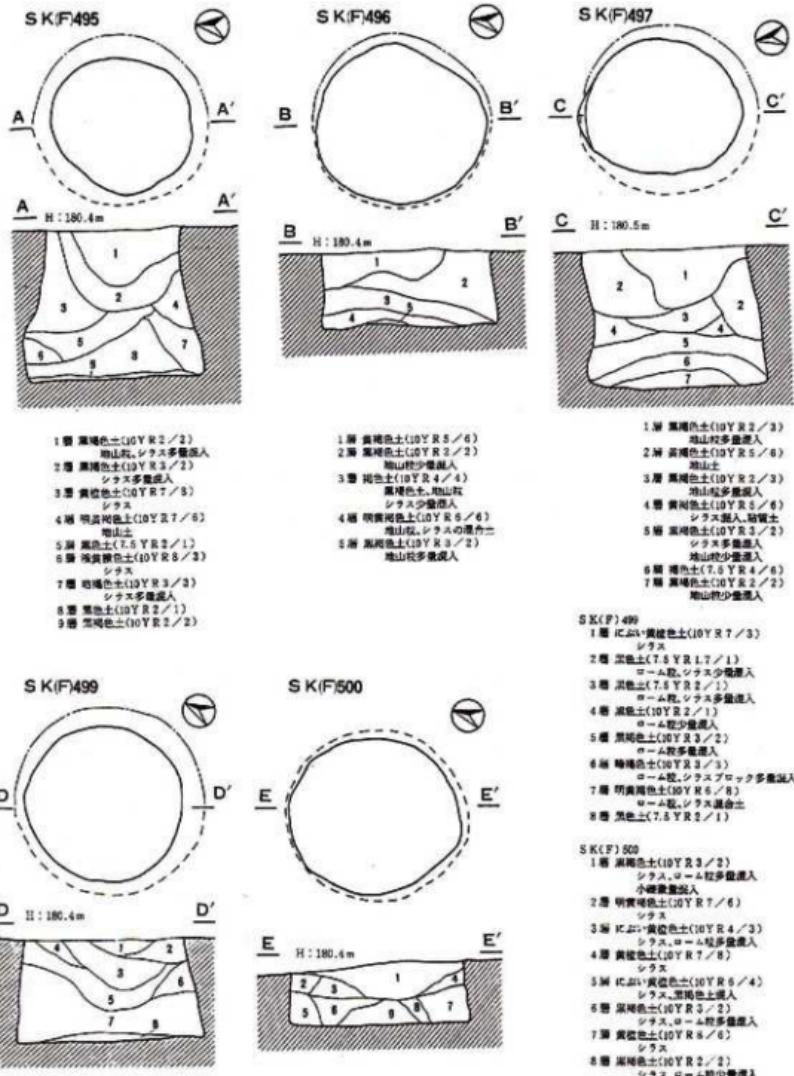
土壙内より遺物は出土しなかった。

#### 第499号 フラスコ状土壙（第15図）

調査区中央部の造構密集地域東端、YF-116・117グリッド、IIIa層下面においてに於いて黄褐色土を取り囲む黒色土の落ち込みを確認した。本土壙も深耕により頸部上半を消失している。なお、本土壙の崩壊を防ぐことから半截したのみである。

規模は底径170cm、確認面からの深さ95cm、堆定底面積2.20m<sup>2</sup>を測る。

堆積土は8ブロックに区分された。各ブロックには黄褐色土、シラス土が多量に混入して



第15図 フラスコ状土壤実測図(5)

いることから、人為堆積と判断した。

壁はVI層上位までを壁面とし、底面より内傾して立ち上がる。底面は平坦で、堅くしまっていた。

土壌内より遺物は出土しなかった。

#### 第500号フラスコ状土壙（第15図）

調査区中央部の造構密集地域北東側、YG-116グリッド、VI層においてに於い黄橙色土を多量に含む黒褐色土の落ち込みを確認した。本土壙は第501号フラスコ状土壙と重複関係にあり、本土壙が新しい。なお、本土壙も深耕による擾乱を受け、その上半を消失する。

規模は底径165cm×152cm、確認面からの深さ51cm、底面積1.96m<sup>2</sup>を測る。

堆積土は9ブロックに区分され、各ブロックに黄褐色土、シラス土が多量に含まれることから、人為堆積と判断した。

壁はVI層までを壁面とし、底面より内傾して立ち上がる。底面は、こまかに起伏をもち、堅くしまっていた。

土壙内より遺物は出土しなかった。

#### 第501号フラスコ状土壙（第16図）

調査区中央部の造構密集地域北東側、YG-116グリッド、VI層において第500号フラスコ状土壙と重複する褐色土の落ち込みを確認した。新旧関係は本土壙が古い。なお、本土壙も深耕による擾乱を受け、その上半を消失する。

規模は底径115cm×(108)cm、確認面からの深さ66cm、底面積(0.92)m<sup>2</sup>を測る。

堆積土は6ブロックに区分された。に於い黄褐色土などが多量に充填されていることから、人為堆積と判断した。

壁はVI層までを壁面とし、底面より内傾して立ち上がる。底面は平坦で、堅くしまっていた。底面中央には、径30cm、深さ7cmの柱穴状ピットが確認された。

土壙内より遺物は出土しなかった。

#### 第504号フラスコ状土壙（第16図）

調査区のほぼ中央部、造構密集地域より北東側3mの地点、YG-118グリッド、IIId層下位において第503号土壙と重複して確認した。本土壙が古い。

規模は口径(174)cm、頸部径125cm×108cm、底径198cm×121cm、底面積1.71m<sup>2</sup>を測る。底面は二段構造となることから、上段、下段までそれぞれ189cm、201cmを測る。

堆積土は13ブロックに区分された。土壤下部は自然堆積的な感じを受けるが、地山土の混入等から人為堆積と判断した。

壁はIII層～V層を掘り込み、VI層上位までを壁面とし、底面より内溝気味に立ち上がり、その後外反し口縁部へと達する。底面は、二段構造となり、上段は平坦で堅くしまり、下段は軟弱で東側へ緩やかに傾斜している。

土壤内より遺物は出土しなかった。

本土壤の構築時期は、第503号土壤との重複から、縄文時代後期前葉と考えられる。

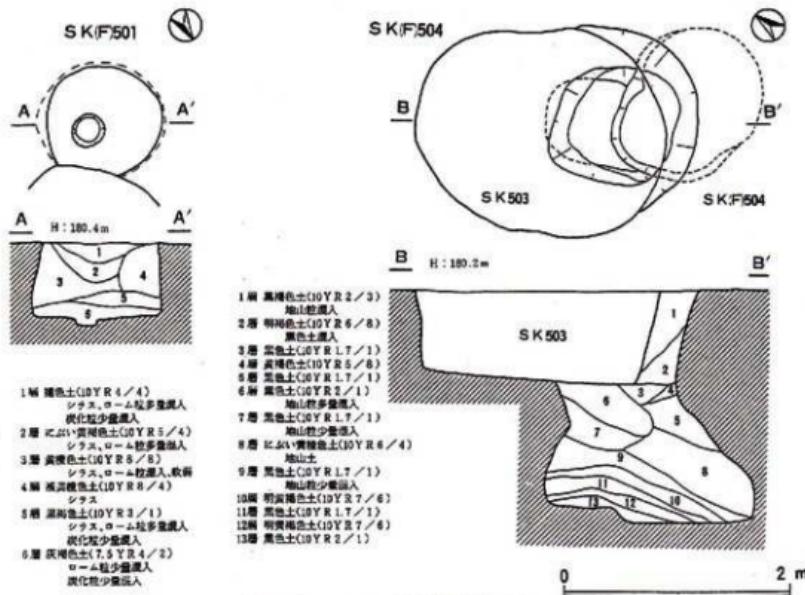
#### 第517号 フラスコ状土壤 (第13図)

調査区中央部の造構密集地域北側、Y G - 116・Y H - 116グリッド、VI層において第490号フラスコ状土壤と重複して確認した。新旧関係は本土壤が新しい。

平面形は、橢円形を呈し、底径 (196) cm × (115) cm、深さ (38～89) cmを測る。

堆積土は11ブロックに区分され、人為堆積と判断された。

壁はVI層及び第490号フラスコ状土壤堆積土を壁面とする。壁の立ち上がりは、西壁が底



第16図 フラスコ状土壤実測図(6)

面より内湾して立ち上がるのに対し、他は外反して立ち上がる。VI層及び、第490号フ拉斯コ状土壌堆積土を底面とし、西側に大きく傾斜し、壁際に径140cm×60cmの浅い凹地が確認された。土壌内より遺物は出土しなかった。  
(藤井 安正)

### (3) 土 壤

#### 第465号土壌 (第17図)

調査区南東端のZZ-117グリッドに位置する。V層上面において、地山粒を含む黒褐色土の落ち込みが確認されたが、深耕により本来の構築面は確認できなかった。本土壌南側には、第463号Tピットが近接する。

平面形は長軸108cm、短軸82cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは70cm、底面積0.36m<sup>2</sup>を測り、長軸方向はN-88°-Eである。

堆積土は10ブロックに区分され、人為堆積と判断した。

壁はVI層上位面までを壁面とし、底面から垂直に立ち上がる。底面は鍋底状を呈し、軟弱であった。

土壌内より遺物は出土しなかった。

#### 第471号土壌 (第17図)

調査区北東部のYI-120グリッドに位置する。IIId層上位面において、地山粒を含む黒褐色土の落ち込みが確認された。本土壌北西側に第476号フ拉斯コ状土壌、北側に第477号土壌、東側に第478号土壌及び第470号Tピットが近接する。

平面形は長軸86cm、短軸82cmの円形を呈し、深さ34cm、底面積0.38m<sup>2</sup>を測る。

堆積土は地山粒を含む黒褐色土の單一層で、人為堆積と判断された。

壁はIIId層上面より掘り込み、V層上位面までを壁面とし、底面から垂直に立ち上がる。底面はゆるやかな起伏をもち、堅くしまっていた。

土壌内より遺物は出土しなかったが、遺構確認面及び底辺の出土遺物から、構築時期は、繩文時代後期前葉と考えられる。

#### 第477号土壌 (第17図、21図3)

調査区北東部のYI-120グリッドに位置し、IIId層中位面において黒色土の落ち込みが確認された。本土壌の南西側に第476号フ拉斯コ状土壌、第471号土壌及び南東側には第478号土壌、第470号Tピットが近接している。

平面形は長軸160cm、短軸119cmの楕円形を呈し、深さ44.9cm、底面積1.15m<sup>2</sup>を測り、長軸方

向はN-53°-Eである。

堆積土は5ブロックに区分され、人為堆積と判断した。

壁はⅢd層中位面より掘り込み、V層上位面までを壁面とし、底面からやや外反して立ち上がる。底面はゆるやかな起伏があり、堅くしまっていた。

土壌内底面中央部より、三角柱状の凹石1点（第21図3）が出土した。凹石は三面に4つの凹みをもち、長さ17cm、幅7cm、厚さ6cm、重さ625gを測り、石質は凝灰質泥岩である。

本土壌の構築時期は、造構確認面及び周辺の出土遺物により、縄文時代後期前葉と考えられる。

#### 第478号土壌（第17図）

調査区北東部のYH-120グリッドに位置する。Ⅲd層上面において、第470号Tピットと重複する黒色土の落ち込みが確認され、本土壌が第470号Tピットより新しいと判断した。本土壌北西側には第477号、第471号土壌、西側には第476号ラスコ状土壌、東側に第466号Tピットが近接する。

平面形は長軸179cm、短軸160cmの円形を呈し、深さ31.2cm、底面積1.85m<sup>2</sup>を測る。

堆積土は2層に分層され、自然堆積と判断した。

壁はⅢd層上位面より掘り込み、V層上位面までを壁面とし、底面から緩やかに外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦で、堅くしまっていた。

土壌内より遺物は出土しなかったが、造構確認面及び周辺の出土遺物より構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

#### 第489号土壌（第17図）

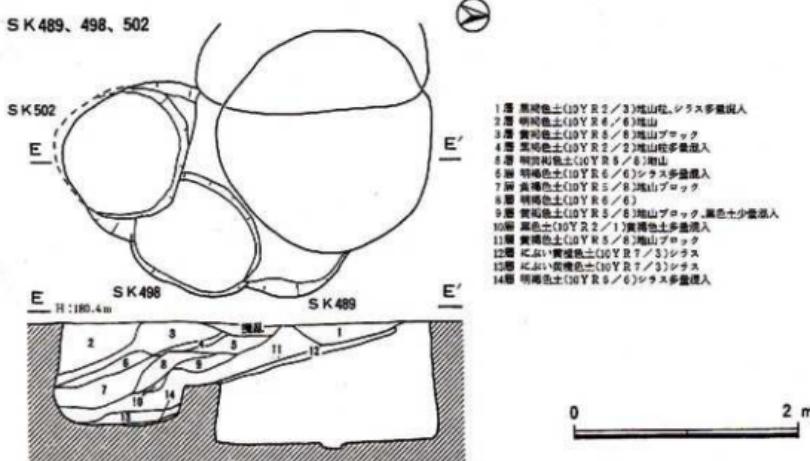
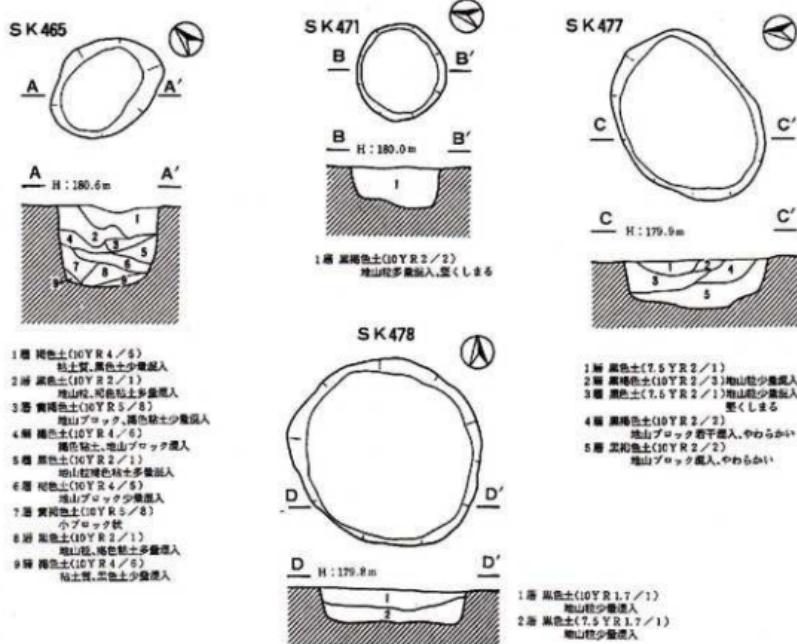
調査区中央部のYG-116グリッドに位置し、周辺には土壌、ラスコ状土壌が数多く近接している。V層上位面において第490号ラスコ状土壌、第498号、第502号土壌と重複する黒色土の落ち込みが確認された。本土壌はいずれの土壌よりも古いと判断した。

本土壌の平面形は、第490号ラスコ状土壌と第498号土壌の構築により壁面の大部分が消失されているため不明で、深さは54.5cmを測る。

堆積土には地山粒が充填され、人為堆積と判断した。

残存する壁面はV層まで掘り込まれ、底面から垂直に立ち上がっていた。底面は鍋底状を呈し、ほぼ平坦で堅くしまっていた。

土壌内より遺物は出土しなかったが、造構確認面及び周辺の出土遺物より構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。



第17図 土壌実測図(1)

#### 第498号土壌（第17図）

調査区中央部のYG-116グリッドに位置する。VI層上位面において第489号、第502号土壌と重複する黒褐色土の落ち込みが確認された。本土壠は第489号土壠より新しく、第502号土壠との関係は不明である。

平面形は長軸120cm、短軸100cmの橢円形を呈し、深さ89cm、底面積0.78m<sup>2</sup>を測り、長軸方向はN-40°-Eである。

堆積土は地山ブロックを多量に含み、人為堆積と判断した。

残存する壁面はVI層まで掘り込まれ、底面からほぼ垂直に立ち上がっていた。底面は鍋底状を呈し、軟弱であった。

土壠内より遺物は出土しなかったが、造構確認面及び周辺の出土遺物より構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

#### 第502号土壠（第17図）

調査区中央部のYG-116グリッドに位置し、周辺には第481号、第500号フラスコ状土壠などが数多く近接している。VI層上面において第489号、第498号土壠と重複する黒褐色土の落ち込みが確認された。本土壠は第489号土壠より新しく、第498号土壠との関係は不明である。

平面形は底面長軸120cm、短軸117cmの円形を呈すると考えられ、深さ92cm、底面積96m<sup>2</sup>を測る。

堆積土は地山ブロックを多量に含み、人為堆積と判断した。

残存する壁面はVI層まで掘り込まれ、底面から内湾気味に立ち上がるを考えられる。底面は鍋底状を呈し、ほぼ平坦で軟弱であった。

土壠内より遺物は出土しなかったが、造構確認面及び周辺の出土遺物より構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

#### 第503号土壠（第18図、20図18、21図1）

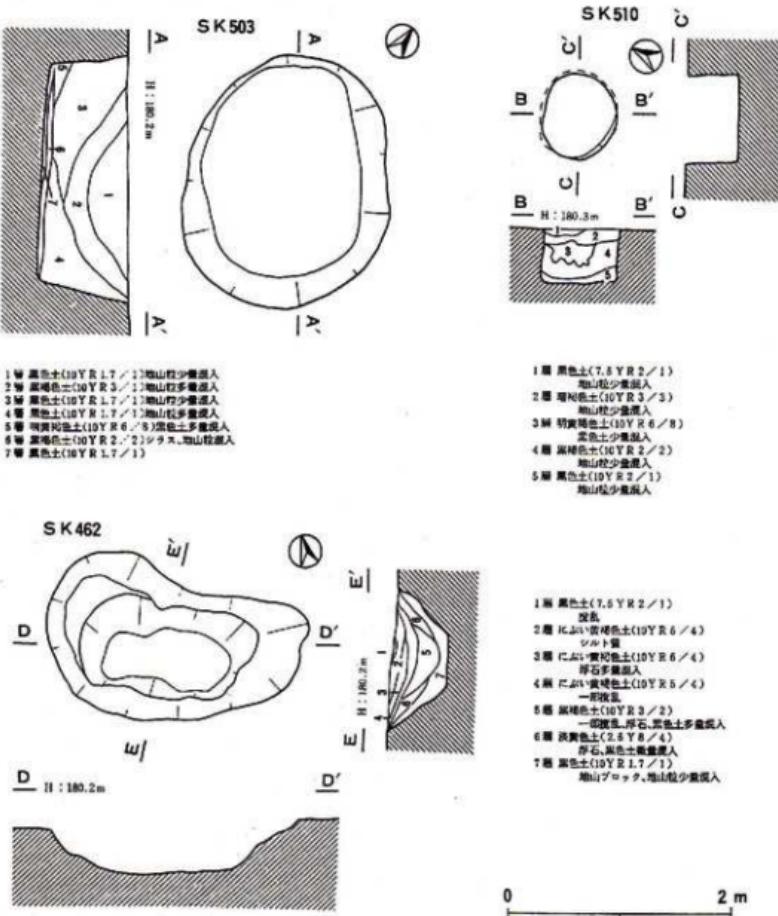
調査区中央部東端のYG-118グリッドに位置し、IV層上面において、黒色土の落ち込みが確認された。本土壠底面には第504号フラスコ状土壠が構築され、本土壠の方が新しいと判断した。本土壠北側には第475号Tビット、西側にはフラスコ状土壠及び土壠の密集地域が近接している。

平面形は長軸224cm、短軸186cmの橢円形を呈し、深さ80cm、底面積2.09m<sup>2</sup>を測り、長軸方向はN-28°-Wである。

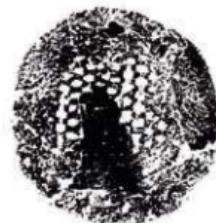
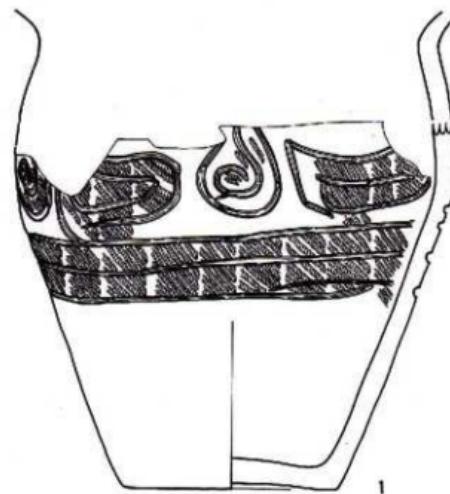
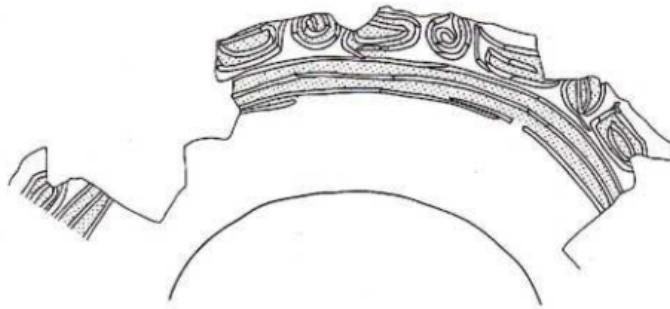
堆積土は7層に分層され、自然堆積と判断した。

壁はⅢd層下位面より掘り込み、V層下位面までを壁面とし、底面から外傾して立ち上がり、東壁部は垂直に立ち上がる。底面には厚さ5cm程の貼床が施され、平坦で堅くしまっていた。

土壇内より土器片1点（第20図18）、石斧1点（第21図1）が出土した。土器片は磨消繩文により文様が描き出されるもので、沈線間にL.R繩文、文様帶を区画する沈線間に刺突文が加えられている。石斧は定角式磨製石斧で、長さ11.2cm、幅4.7cm、厚さ2.4cm、重さは177.5gを測り、石質は緑色片岩である。



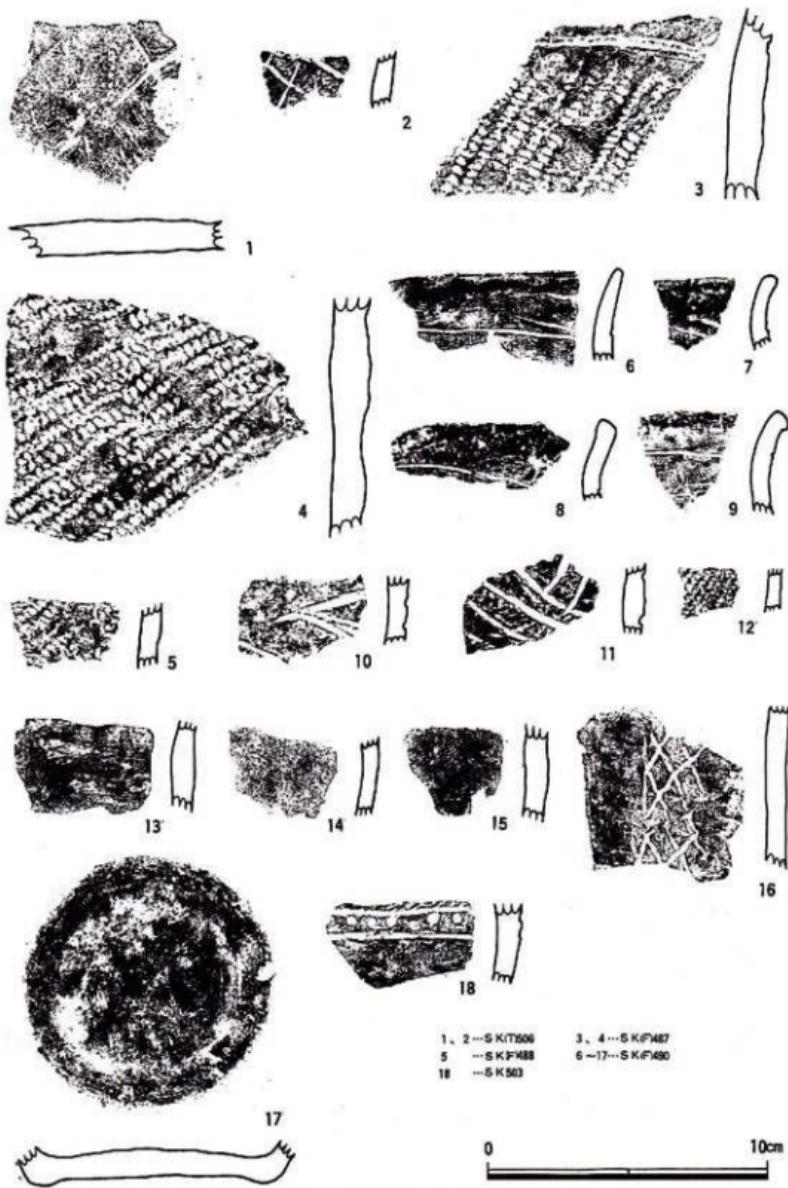
第18図 土壇実測図(2)



1-SK-F483  
半土器底面模様  
縮尺1/4



第19図 造構内出土土器実測図



第20図 遺構内出土土器拓影図(1)

構築時期は出土遺物より、縄文時代後期前葉と考えられる。

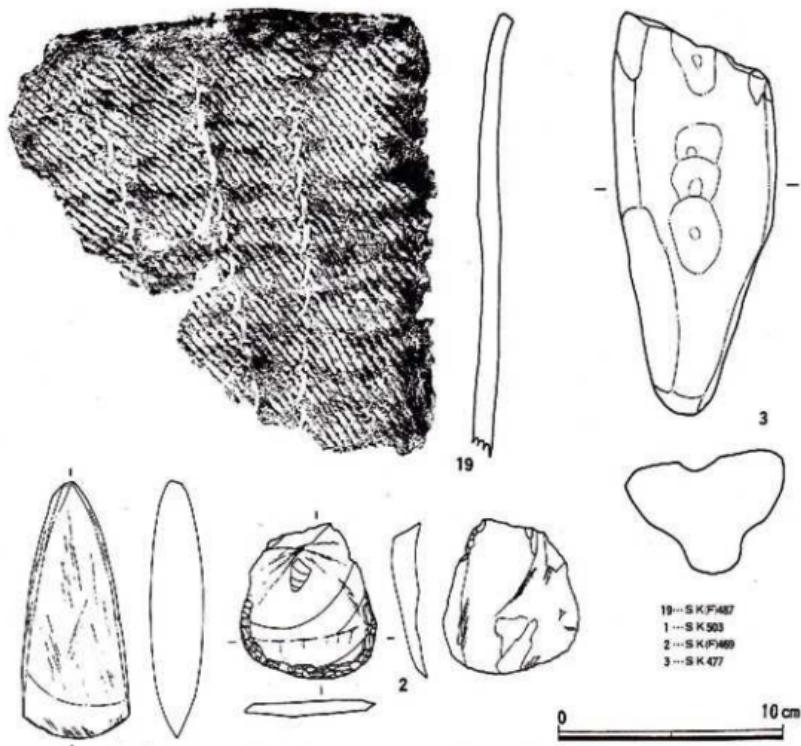
#### 第510号土壌（第18回）

調査区中央東側のY E-115、116グリッドに位置し、IIIa層上面において黒色土の落ち込みが確認された。本土城北西側には、フラスコ状土壌及び土壙の密集地域が近接している。

平面形は長軸77cm、短軸67cmの椭円形を呈し、深さ49.8cm、底面積0.40m<sup>2</sup>を測り、長軸方向はN-61°-Eである。

堆積土は5ブロックに区分され、人為堆積と判断した。

壁はIIIa層上位面より掘り込み、VI層上位面までを壁面とし、底面から垂直に立ち上がり、南西側の壁はやや入りこんでいた。底面はやや起伏がみられたが、ほぼ平坦で軟弱であった。



第21図 遺構内出土土器拓影図(2)・石器実測図

#### 第462号土壤（第18図）

調査区北部のYM-122グリッドに位置し、Ⅰ層下位面において、大湯浮石が堆積した落ち込みが確認された。本土壌南東側には第464号、第461号Tピットが近接している。

平面形は長軸243cm、短軸146cmの不整橢円形を呈し、深さは上段30.6cm、下段50cm、底面積0.46m<sup>2</sup>を測り、長軸方向はN-76°-Eである。

堆積土は8層に分層され、自然堆積と判断した。

壁はⅣ層より掘り込み、V層上位面までを壁面とし、底面からやや内湾気味に立ち上がる。底面は二段構造を呈し、上段部分はほぼ平坦で、下段部分は大きな起伏がみられ、全体的に堅くしまっていた。

土壤内より遺物は出土しなかったが、本土壌の構築時期は大湯浮石降下直前、平安時代前半と考えられる。

#### 3. 焼土遺構

##### 第431号焼土遺構（第22図）

調査区北西部のYL-117グリッドに位置する。Ⅲd層上面で、66cm×44cmの焼土及び焼土粒を含む褐色土範囲が確認された。焼土は規模60cm×32cm、厚さ5cmを測る。

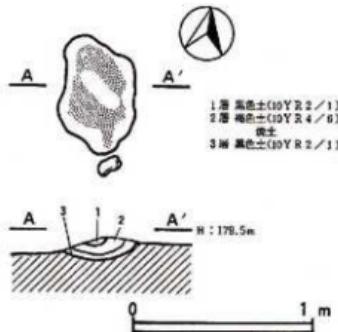
遺物は出土しなかったが、造構確認面及び周辺出土遺物より構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。  
(花海 義人)

#### 4. 柱穴状ピット（第23図）

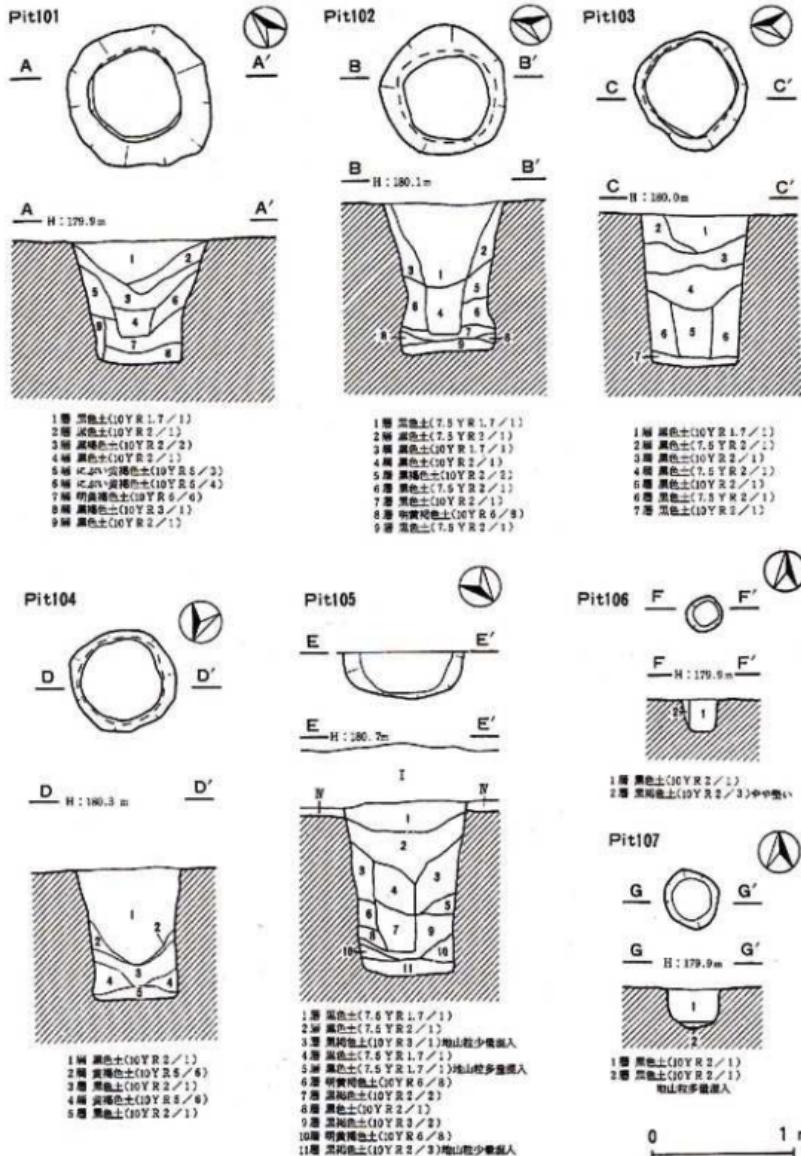
調査区南半に4基、中央部北寄りに3基の計7基を確認した。これらの柱穴状ピットは、規模により2分類される。

A類…規模が大きいもので、ピット101～105がこれにあたる。ピット102～105は調査区南半に位置し、南北方向に直線的に並ぶ。それぞれのピット間は5.00m～8.65mを測る。ピット101は、中央部北寄りに位置し、ピット102～105の延長線上にある。

ピット102～104はⅢd層上面から掘り込まれている。ピット101、105は深耕による擾乱を受け本来の構築面を失っているが、恐らくⅢd層上面から掘り込まれたものと考えられる。



第22図 第431号焼土遺構実測図



第23図 柱穴状ピット実測図

平面形は、円形を呈し掘り方径82cm～107cm、確認面からの深さ88cm～122cmを測る。ピット101～103、105では、ピット中程において径25cm程の柱の抜き取り痕が観察される。

堆積土は、ブロック状となり人為堆積と判断されたが、堆積土上半は柱の抜き取り後、再度埋め戻しがなされている。ピットは、Ⅲd層～Ⅳ層を掘り抜き、Ⅴ層又はシラス層（Ⅵ層）まで達している。ピット断面形は、円筒状を呈するが、下部がわずかに膨らむものもみられる。

B類…A類と比べ、規模的には極めて小さい。YI-119グリッド、Ⅲd層上面において2mの間隔をもって2基が存在する。平面形は、円形を呈し、径26cm～40cm、確認面からの深さ21cm～26cmを測る。

## 5. 遺構外出土遺物

### (1) 土器

本年度調査区遺構外からは、5点の復元土器、ダンボール箱2箱の土器破片が出土した。これらの土器は、縄文時代早期、前期、後期、晚期に位置づけられるものであるが、その大半は後期前葉のものである。各時期の出土地域をみると、後期前葉の土器は、調査区西側、E1区近接地城、Ⅲb層～Ⅲc層からの出土が多い。早期の土器は、YG-122、YK-115グリッド、Ⅲd層からまとまって出土している。なお、前期、晚期の土器は点数も少なく、調査区内から点々と出土しているに過ぎない。

土器の分類に際しては、時期ごとに群別し、文様、施文技法等により細分した。

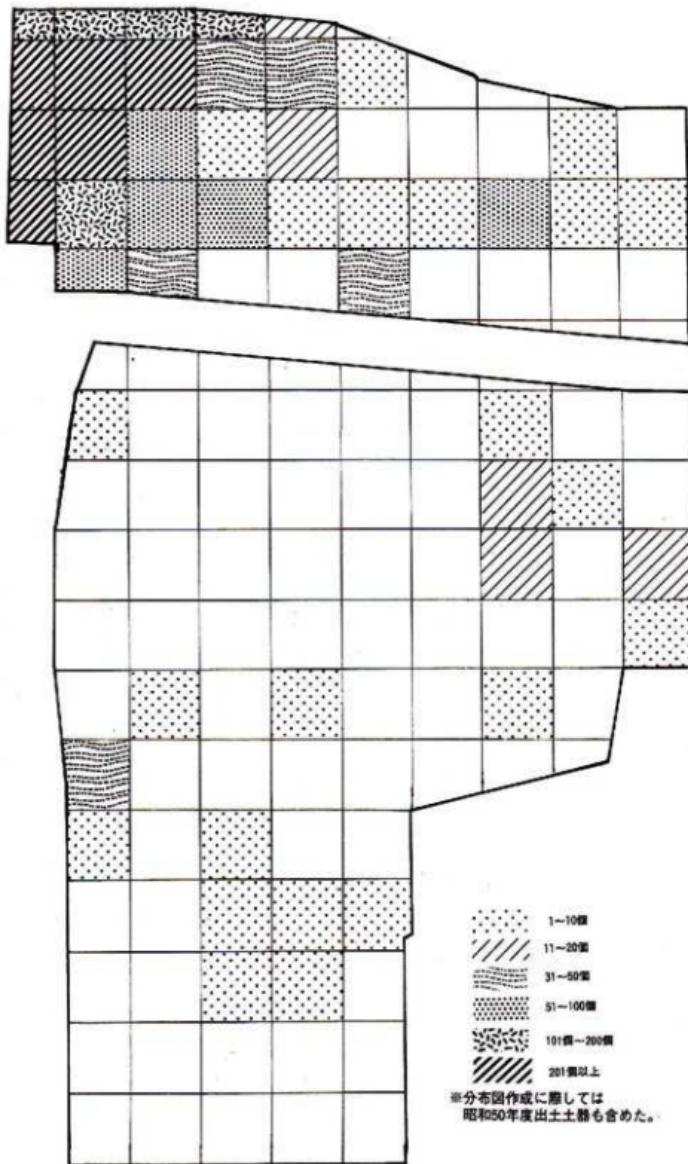
### 第I群 早期の土器（第26図1～23、27図24～28）

#### 1類 貝殻沈線文の土器（1～10）

沈線文と貝殻腹縁文を組み合せ、幾何学的な文様が横位方向に展開、施文されるもので、口唇部には貝殻腹縁文が施文されている。口唇部から垂下する隆沈文上に貝殻腹縁文が施文されるもの(2)や、沈線間に刺突文が加えられるもの（7、10）もある。口縁部は波状を呈し、内湾気味となり、口唇部が先細りとなるものと、方形に近い断面をもつものがある。内面には貝殻による条痕が薄く認められるものと、ナデが加えられその痕跡が明瞭でないものもある。胎土は若干の砂粒を含むほかは、植物纖維の混入はみられない。焼成は良好、堅敏で、色調はにぶい橙色～褐灰色を呈する。

#### 2類 沈線文の土器（11～28）

a. 彫りの浅い沈線が横位、斜位方向に等間隔に施文されているもの（11～16）を一括した。土器内・外面には、貝殻による条痕が認められるが、その後ナデが加えられ痕跡が明瞭でないものもある。胎土には、砂粒をわずかに含むほかは、植物纖維の混入はみられない。焼成は良好、色調はにぶい橙色を呈する。



第24図 土器分布密度図

b. 沈線と単刻線の組み合せによる矢羽根状文や沈線と刺突文の組み合せによる文様が施文されるもの（17～28）を一括した。17～28は同一個体で、土器破片から底径の小さい深鉢を呈する器形と考えられる。文様帶を、胴部上半にもち、胴部下半にはLR繩文が施文されている。文様帶内と器内面には、貝殻による条痕がみられる。胎土は、2a類と比べ砂粒をやや多く含む。焼成は良好、色調はにぶい黄橙色、灰黄褐色を呈する。

本群土器は、早期中葉～後葉に位置づけられるものであり、1類は物見台式、2類はムシリI式土器に比定される。2b類については、岩手県矢巾町大渡野遺跡・2b3類土器に類似例を見ることができる。

#### 第Ⅱ群 前期の土器（第27図29）

調査区内より円筒下層式土器の胴部破片1点が出土した。R原体の単軸絆条体回転文が縱位に施文されている。胎土には砂粒を含み、植物纖維の混入はみられない。焼成は良好、色調はにぶい黄橙色を呈する。

本群土器は、繩文時代前期末葉に位置づけられると考えられる。

#### 第Ⅲ群 後期初頭～前葉の土器（第27図30～45、28図、29図、30図98～109）

##### 1類 隆沈文の土器（第27図30～39）

隆沈文により円文、長方形文、入組文的な文様等が施文されているものを一括した。本類には深鉢、壺がみられるが、深鉢が主体を占める。文様帶は、深鉢においては胴部下半、壺では胴部上半に区画されている。焼成は良好、色調はにぶい黄橙色、浅黄橙色を呈する。

##### 2類 沈線文の土器（第27図40～45、28図46～69、29図70～88）

無文研磨された器面上に数条の平行沈線により文様が描かれるものを一括した。区画文として隆帶、隆沈文が施されるものも本類とした。

a. 主文様が縱位方向に展開する土器（40～45、49～51、70～72）を一括した。文様帶には渦巻文、縦位連結S字文、曲線文が主文様として配置されている。主文様は弧線文により連結されるものや、刺突文が付加されるものもある。本類には深鉢、鉢、浅鉢、壺がみられるが、波状口縁を呈する深鉢が主体を占める。文様帶は深鉢においては胴部下半まで、浅鉢では底部付近まで及ぶ。焼成は良好、色調は浅黄橙色、橙色を呈する。

b. 主文様が横位方向に展開する土器（65～69、73～80）を一括した。文様帶には曲線文、幾何学文、弧線文のほか入組文的な文様が施文され、弧線文等の連続文が付加されている。本類には深鉢、鉢、浅鉢、壺がみられる。深鉢では波状口縁を呈するものが多い。文様帶は深鉢では胴部上半、浅鉢、壺では胴部下半まで及んでいる。焼成は良好、色調はにぶい黄橙色、褐

灰色を呈する。

c. 格子目状、斜行平行沈線文が施文される土器（52～61）を一括した。文様帶は胴部下半まで及び、陸沈文により区画されるもの（54）もある。本類は波状口縁又は山形口縁を呈する深鉢が主体となり、口縁頂部に粘土縫の貼り付けがみられるもの（54、55）もある。焼成は良好なものが多く、色調はにぶい褐色、にぶい黄橙色、黒褐色を呈する。

### 3類 地文上に沈線文が施文される土器（第29図89～97）

地文上に1～数条の沈線で、格子目状文、幾何学文が施文されるものを一括した。地文としてLR、L繩文が多用、施文されている。本類は深鉢が主体を占め、胴部上半に文様帶をもつ。焼成は良好なものが多く、色調は灰白色、にぶい黄橙色を呈する。

### 4類 磨消繩文の土器（第25図1、30図98～109）

帶繩文により幾何学文、階段状文、花弁状文等が施文されるものを一括した。沈線間にはR、LR繩文が多用、施文されている。本類は波状口縁を呈する深鉢が主体を占めるが、壺もみられる。深鉢では波状口縁の頂部に刻目を施すものもある。深鉢、壺ともに胴部上半に文様帶をもつ。焼成は良好、色調は淡黄橙色、にぶい黄橙色を呈する。

1は、平口縁の壺で、胴部は球体を呈する。文様帶は3条の平行沈線により胴部上半に区画され、主文様として交互に上下する花弁状文が施文されている。沈線間にはRL繩文が施文されている。器高は（8.4）cmを測る。焼成は良好、色調はにぶい黄橙色を呈する。

本群土器は、東北地方北部の前十腰内式、十腰内I式土器、あるいは大湯式土器に比定されるものである。

### 第V群 後期中葉の土器（第30図110）

110は、幅の広い帶繩文により幾何学文が施文されており、沈線間にはLR繩文が充填されている。焼成は良好で、色調は淡黄色を呈する。第III群4類土器とは帶繩文の幅で識別できる。本群土器は、東北地方北部の十腰内II、III式土器に比定される。

### 第V群 晩期の土器（第30図111、112）

深鉢又は鉢形土器の破片で、波状口縁を呈する。無文化された口縁部には、三叉文や連結弧状文と列点文を組み合せた文様が施文されている。胴部にはLR、RL繩文の回転施文による羽状繩文、RL繩文が施文されている。焼成は良好なものが多い。色調はにぶい橙色を呈する。本群土器は、晩期初頭の大溝B式土器に比定される。

### 第VI群 早期～後期の土器（第30図113～122、31図123～146、32図147～161）

本群には、条痕文、撚糸文、縄文、無文土器を一括した。数量的には多く出土している。

1類 無文の土器（第25図2、30図113～116）

平、波状、山形口縁を呈する深鉢、鉢形土器が主体となる。頂部に刻目(114)、口唇部に圧痕文(113)が施されるものがある。焼成は良好なものが多く、色調はにぶい黄橙色～淡黄色を呈する。2は、ゆるやかな波状を呈する鉢形土器で、器高8.8cm、口径(13.6)cm、底径6.7cmを測り、焼成は良好、色調は淡黄色を呈する。

2類 条痕文の土器（第30図117～122）

平、波状口縁を呈する深鉢形土器が主体となる。条痕は口縁部に幅の狭い無文帯を残し、器面に對し縦位に施文されている。焼成は良好なものが多く、色調はにぶい黄橙色、灰黄褐色を呈する。

3類 撥糸文の土器（第25図3、4、31図123～142、32図147）

單軸絡条体回転文、網目状撚糸文が施文されるものを一括した。平口縁を呈する深鉢形土器が主体となる。原体R縄文が多用されている。口縁部に幅の狭い無文帯を残すもの、上端から施文されるものもある。焼成は良好、色調はにぶい黄橙色、浅黄橙色を呈する。

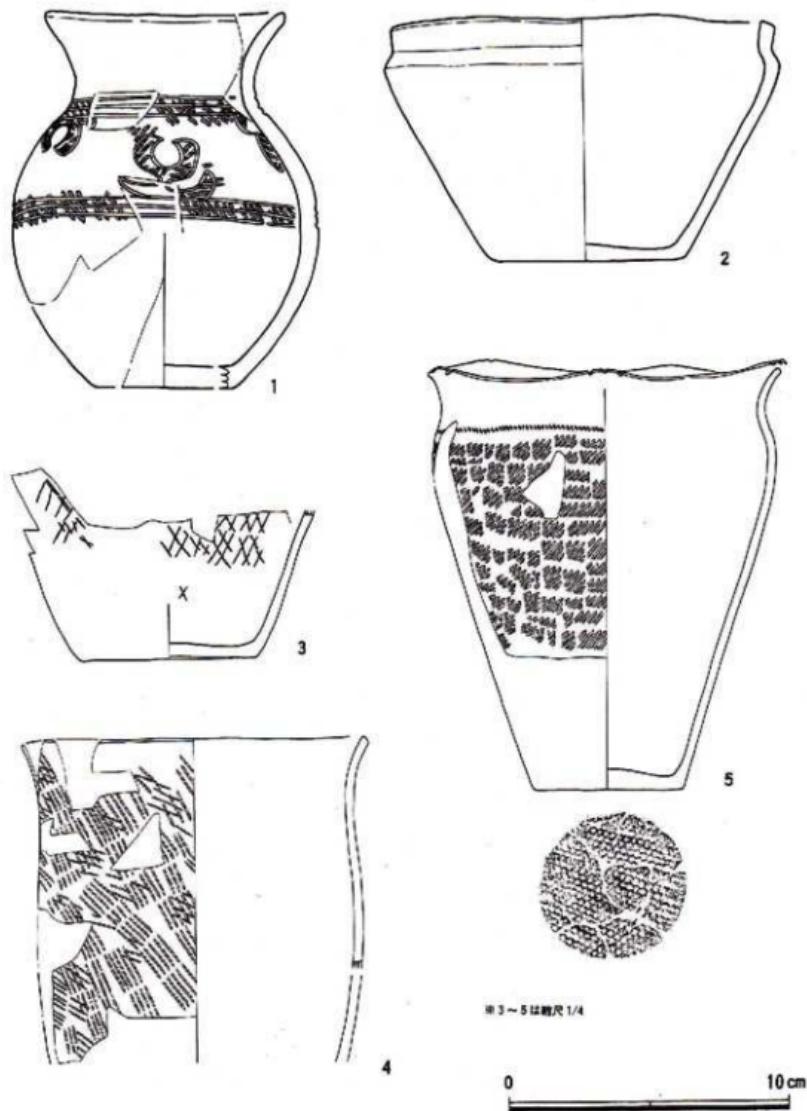
3は、深鉢形土器下半部で、原体R縄文の網目状撚糸文が施文されている。底径12.5cm、焼成は良好、色調はにぶい黄橙色を呈する。4は、平口縁を呈する深鉢形土器上半部で、口径(24.6)cmを測る。口縁部上端に幅の狭い無文帯を残し、原体L縄文の單軸絡条体回転文が施文され、一部では回転方向を変え、網目状的な効果をもたらしている。焼成は良く、色調はにぶい黄橙色を呈する。140～142は撚りの太い原体を使用している。

4類 縄文の土器（第25図5、31図143～146、32図148～161）

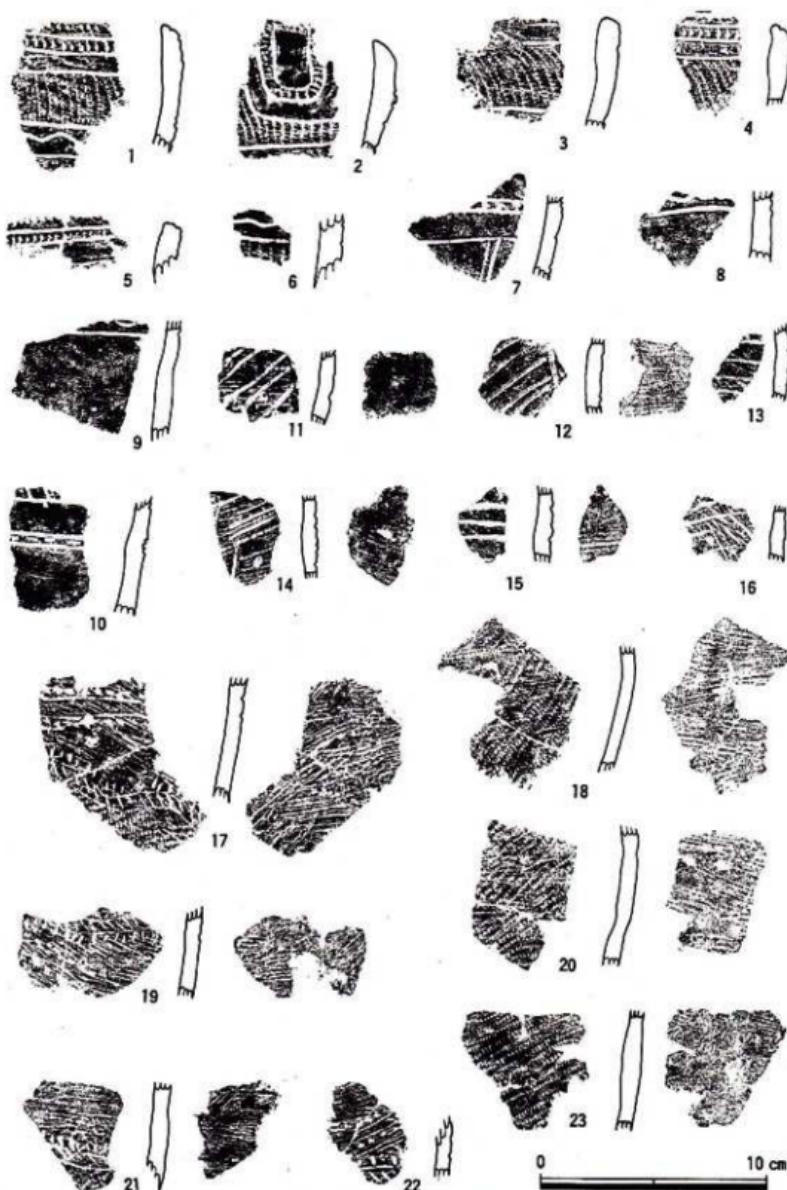
本類には、無節、單節、複節縄文の施文された土器を一括した。

a. 無節の土器 深鉢形土器が主体となる。L縄文が多用される。焼成は良好、色調はにぶい橙色を呈する。

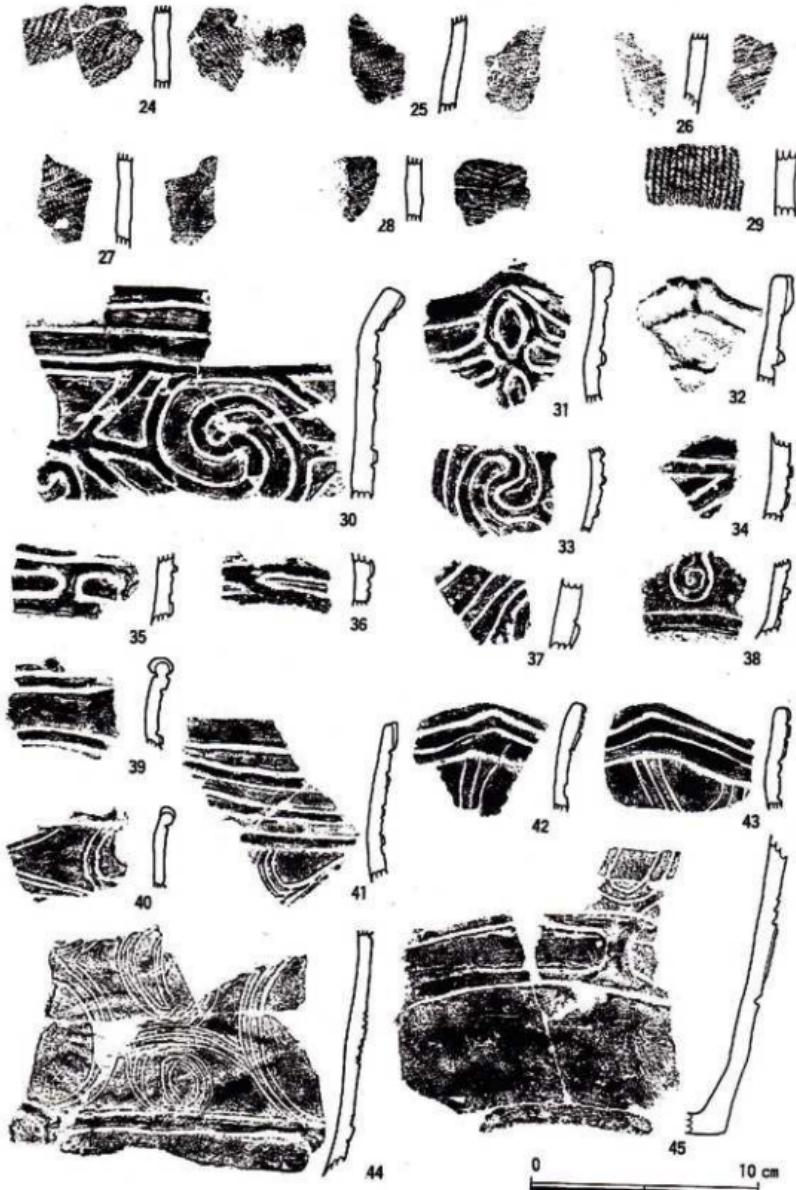
b. 単節の土器 平、波状口縁を呈する深鉢形土器が主体となり、頸部から外反するもの、内湾気味に立ち上がるものがみられる。R L縄文が多用される。縄文は口縁部上端から施文されるものが多いが、口縁部上端に幅の狭い無文帯を残すもの(148)や、1～2条の縄文圧痕文(157、158)を施し境界文とするものもある。焼成は良～良好、色調は浅黄橙色～灰褐色を呈する。5は、波状口縁を呈する深鉢で、波頂部に刻目が施されている。圧痕文を境界として、口縁部を無文化し、胴部にはL R縄文が施文されている。器高31.0cm、口径26.3cm、底径10.6cmを測り、焼成は良好、色調はにぶい黄橙色を呈する。142～145は、波状口縁を呈する深鉢形土器で0段多条のL R縄文が施文されている。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好、色調はにぶい黄橙色を呈する。



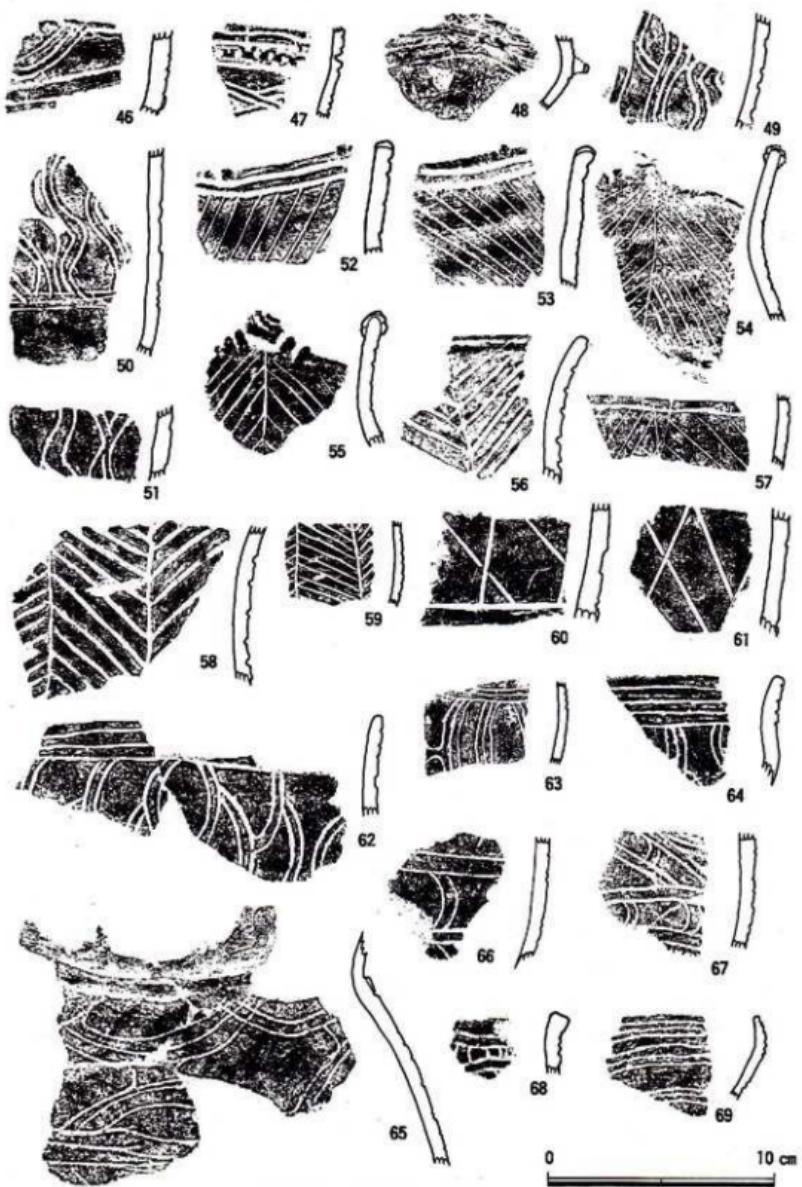
第25図 遺構外出土土器実測図



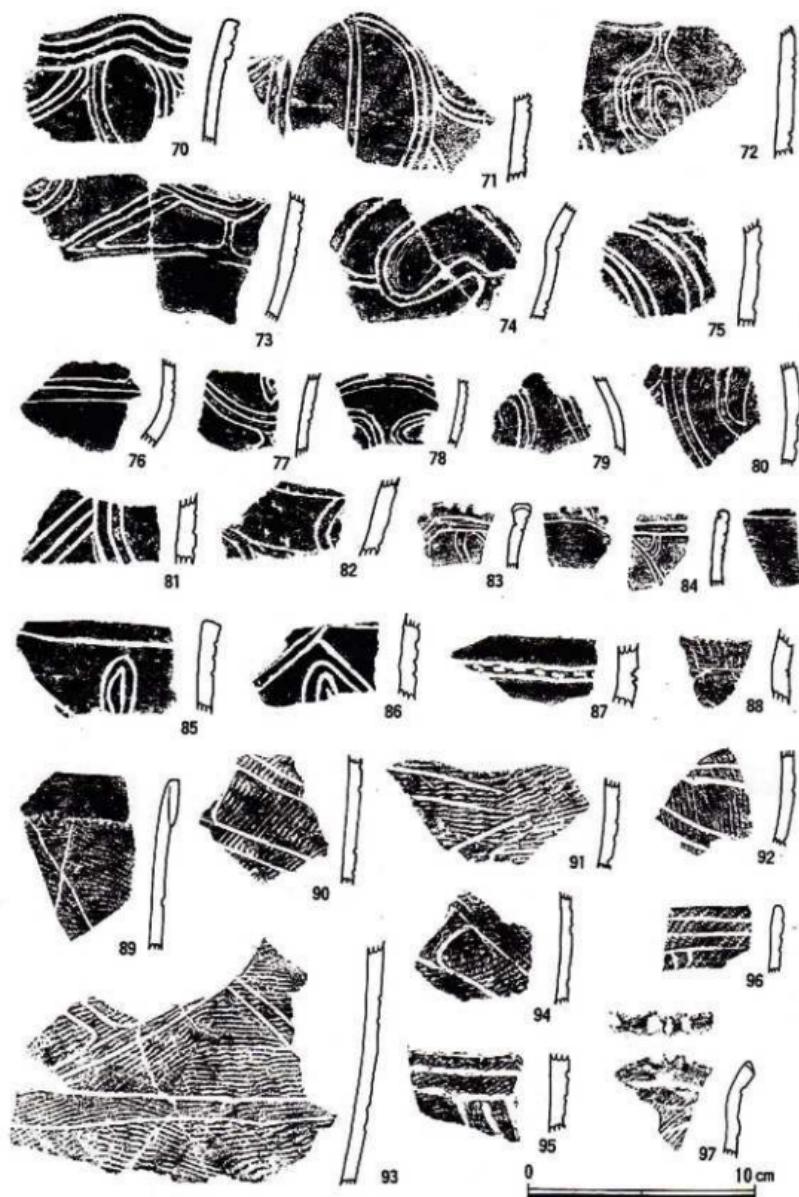
第26図 造構外出土土器拓影図(1)



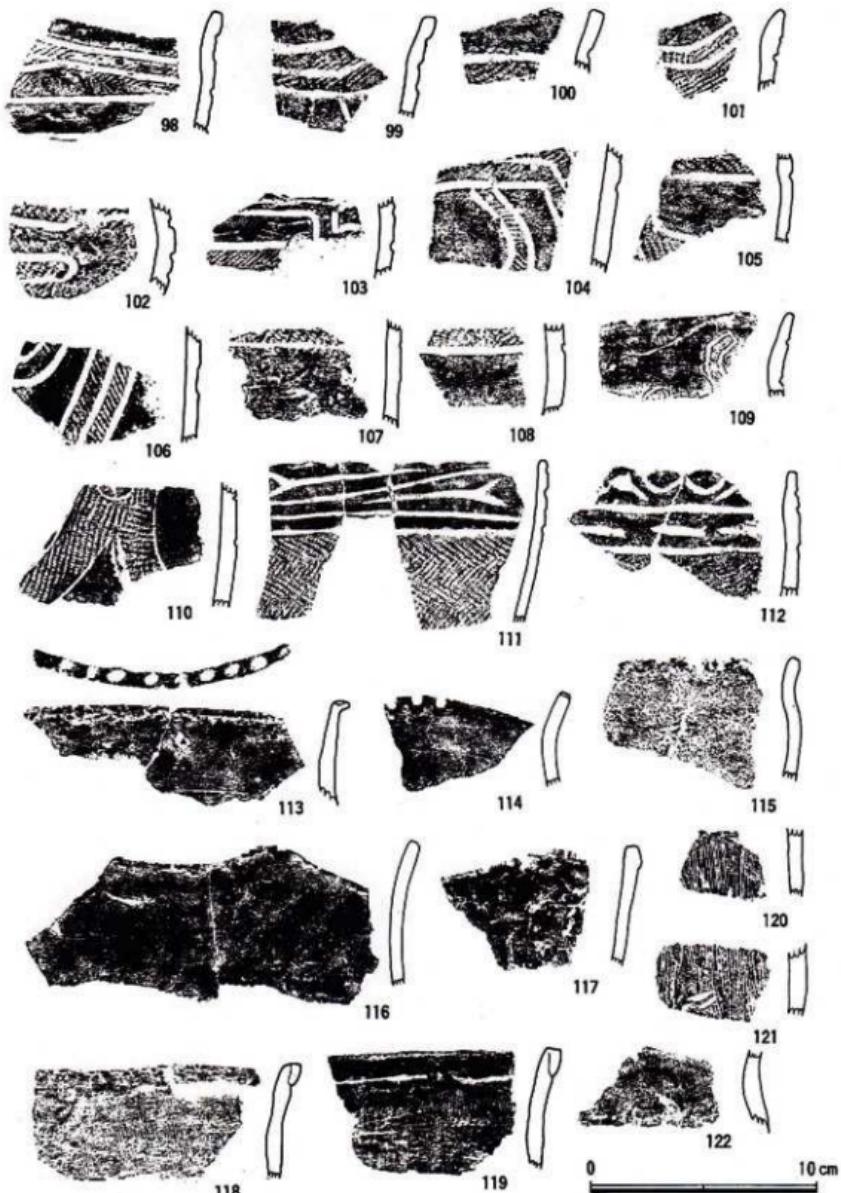
第27圖 遼構外出土土器拓影圖(2)



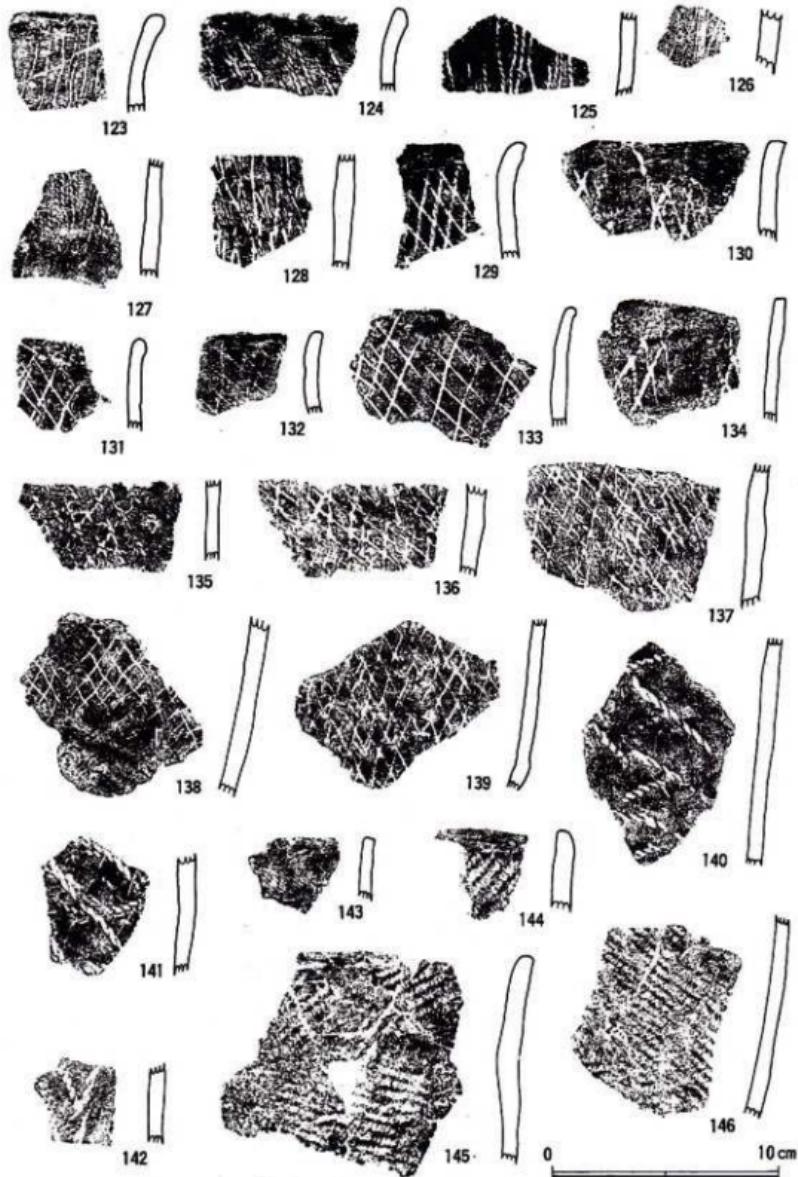
第28図 遺構外出土土器拓影図(3)



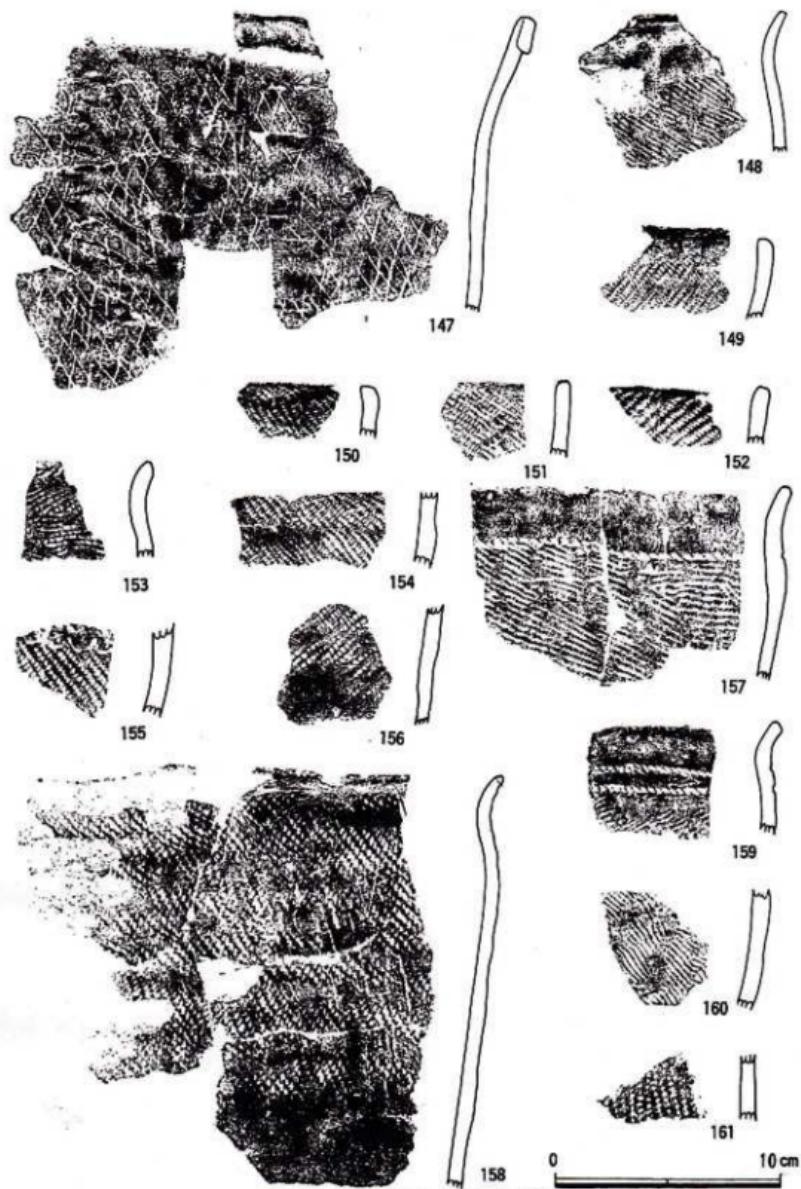
第29図 遺構外出土土器拓影図(4)



第30図 造橋外出土土器拓影図(5)



第31図 遺構外出土土器拓影図(6)



第32図 造構外出土土器拓影図(7)

c. 複節の土器 出土点数は極めて少ない。157はR L R縞文が施文されている。焼成は良好、色調はにぶい黄褐色を呈する。

## (2) 石器

F<sub>2</sub>区遺構外から出土した石器は、石鎌6点、石錐1点、石匙2点、箆状石器1点、搔器20点、敲石6点、凹石5点、磨石2点、石皿2点の計45点である。これらの多くは調査区西端部Ⅲb～Ⅲc層から出土している。

### 石鎌 (第34図1～6)

基部形態、中茎の有無から尖基鎌(1)、凹基無基鎌(2)、平基有基鎌(3～4)、凹基有基鎌(5)、凸基有基鎌(6)に分類される。基部、茎部を欠くものが多い。長さ2.9cm～4.3cm、重さ1.1g～2.9gを測る。全体的にていねいに作り出されているが、一次剥離面を残すものもある。3には黒色樹脂の付着がみられる。石質はすべて硬質(珪質)頁岩である。

### 石錐 (第34図7)

YO-115グリッド、Ⅲc層より1点出土した。棒状を呈するもので、錐先端は磨滅により、調整の際作り出される棱線が丸味を帯びるとともに、光沢をもつ。長さ3.6cm、重さ2.3gを測る。石質は黑色頁岩である。

### 石匙 (第34図9、10)

縦型石匙に分類されるもので、細身のものと台形状のものがある。主要な刃部は右側縁に作り出されて、刃部角度は鋭い。つまみ部は体部と比較して極めて小さい。長さ6.1cm～7.9cm、重さ8.5g～14gを測る。石質はすべて硬質(珪質)頁岩である。

### 箆状石器 (第34図8)

調査区西側、Ⅲc層より1点出土した。形状は基部の細まる撥状を呈する。一次剥離面を大きく残し、調整は大まかに施されている。横断面形は凸レンズ状を呈する。長さ7.5cm、重さ46gを測る。石質は硬質(珪質)頁岩である。

### 搔器 (第34図11～15、35図16～23、36図24～30)

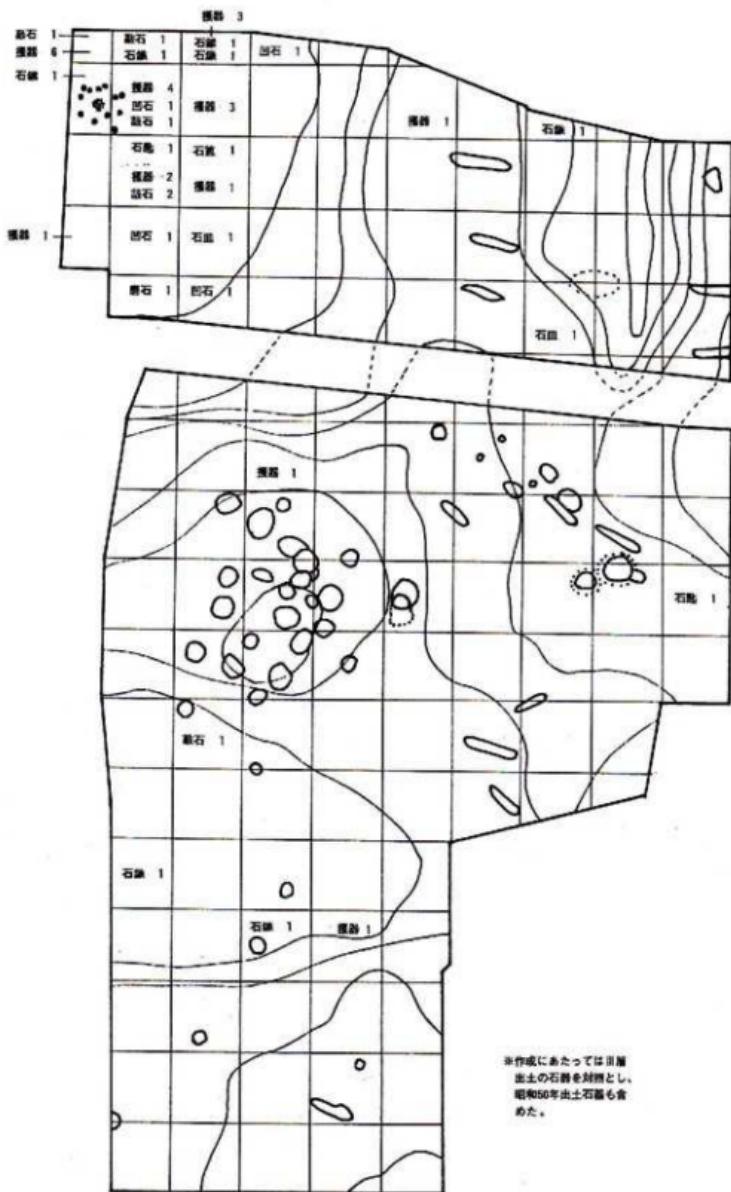
これまで不定形石器と呼ばれているものを一括し、搔器とした。F<sub>1</sub>区に近い調査区西側、Ⅲ層からの出土が多い。刃部の作り出される部位から分類した。

a類…刃部が1側縁に限定されるもの。下・右側縁に刃部をもつものが多い。(19、22～26)

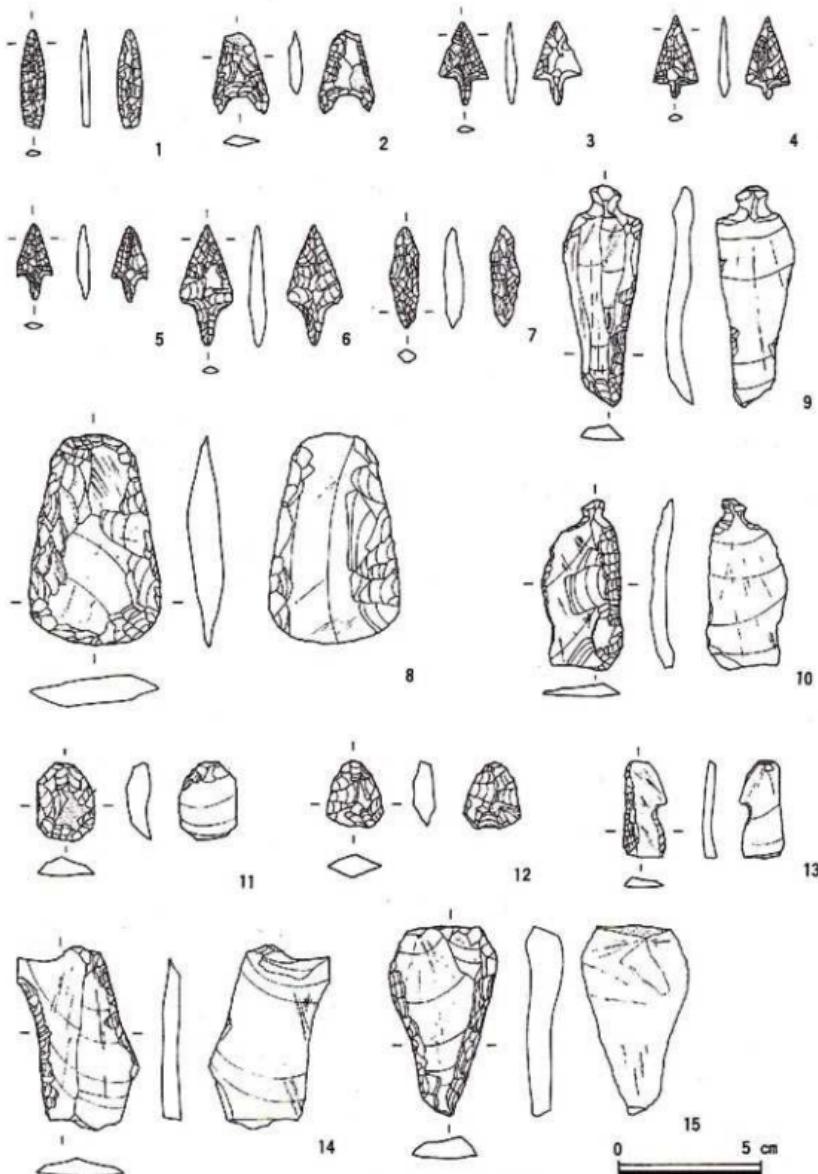
b類…刃部が2側縁に及ぶもの。両側縁・下十右側縁に刃部をもつものが多い。(13～18、20)

c類…刃部が側縁全体に及ぶもの。(11、12)

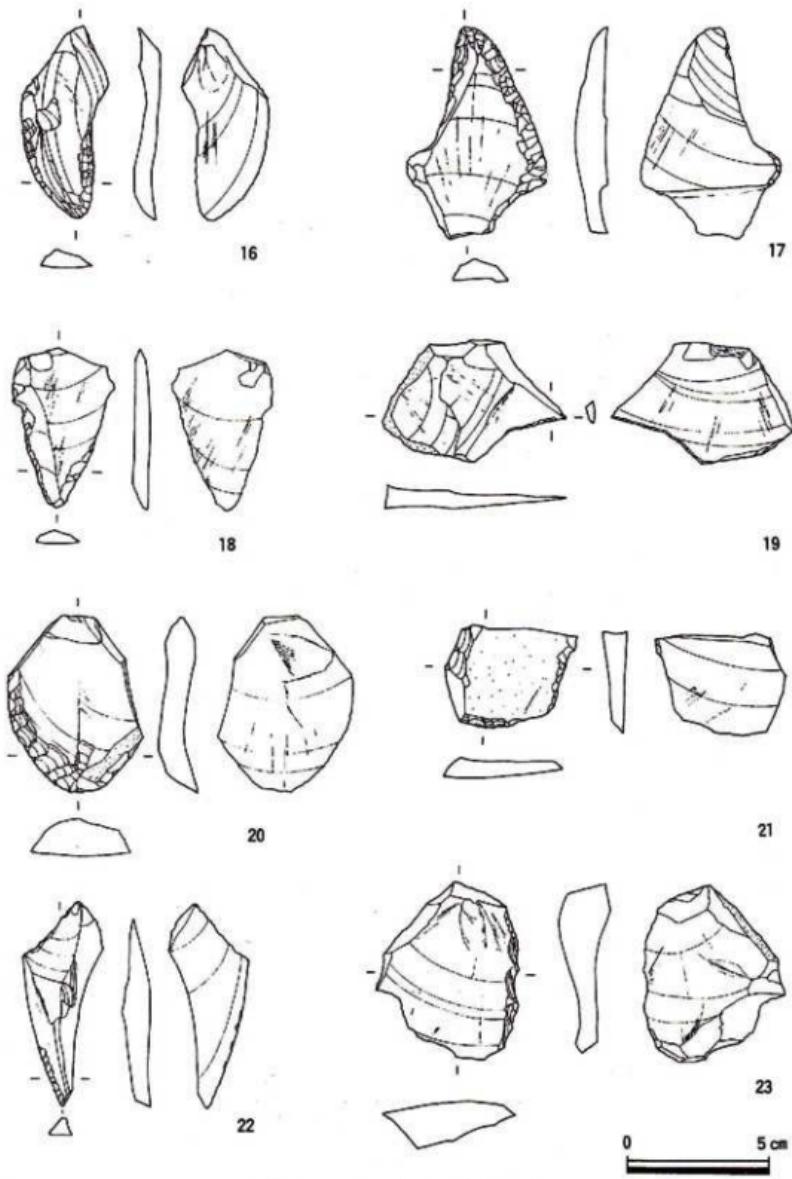
以前、この種のものが不定形石器と呼ばれていたようにa類ではその形状はバラエティーに富むが、b類では方形、三角形、c類では楕円形のものが多くみられる。長さ及び重さは、a、b類では3.6cm～7.5cm、3g～51g、c類では2.3cm～2.8cm、3.4g～4.5gを測る。



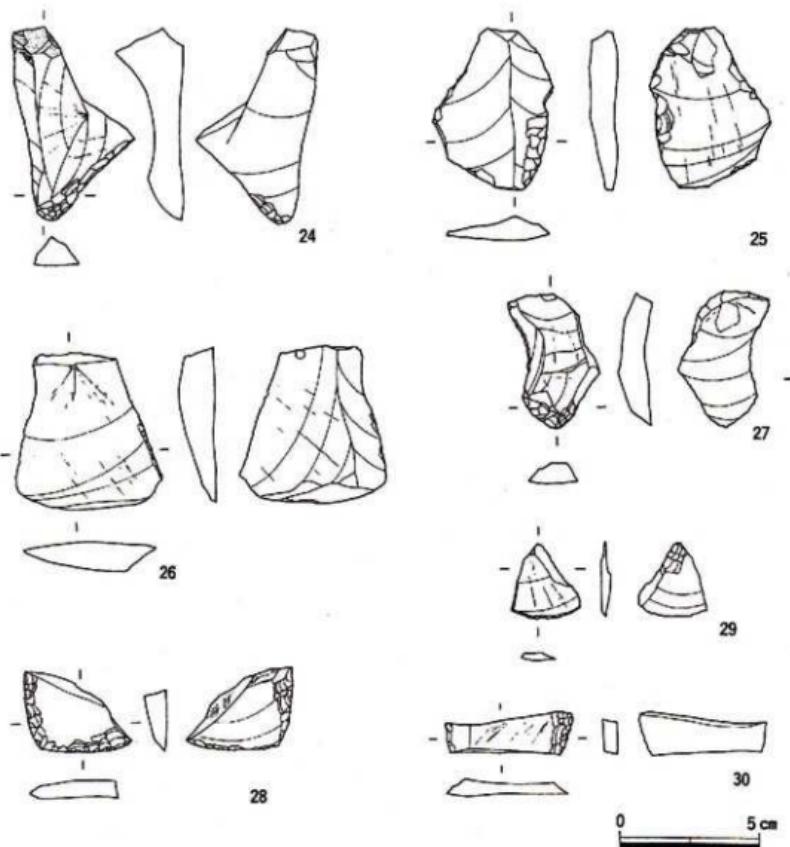
第33図 各グリッド石器出土数



第34図 遺構外出土石器実測図(1)



第35図 造構外出土石器実測図(2)



第36図 遺構外出土石器実測図(3)

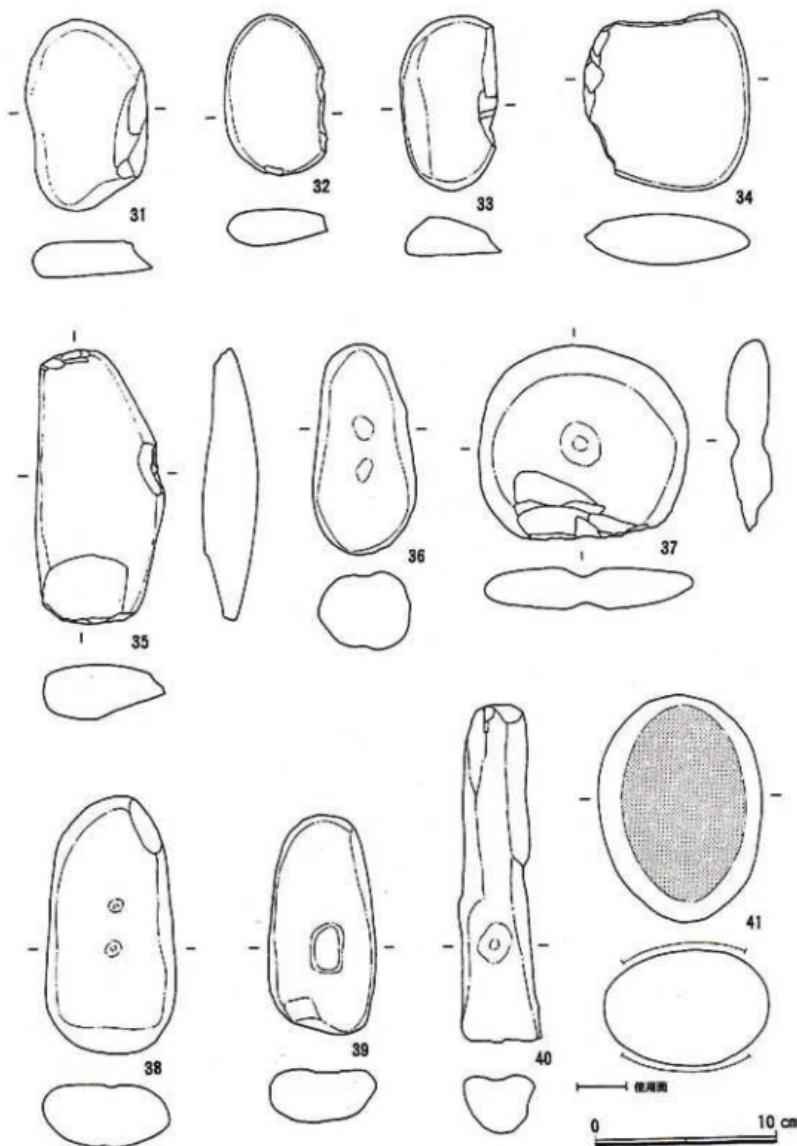
石質は硬質（珪質）頁岩が多く、黑色頁岩と続く。

**敲石**（第37図31～35、38図43）

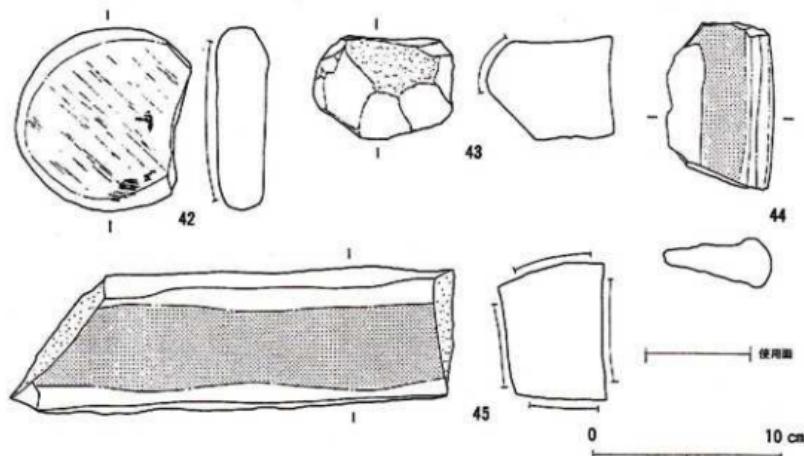
調査区西側、Ⅲ層からの出土が多い。拳大の扁平な川原石の側縁を打ち欠いているもので、長さ9.0cm～15.1cm、重さ125g～335gを測る。43は、五面体を呈するもので、頂部には打ち欠きによるこまかな剥離が幾重もみられる。石質は変朽安山岩、粗粒玄武岩、泥質凝灰岩、石英閃綠玢岩、頁岩である。

**凹石**（第37図36～40）

F<sub>1</sub>区に近い調査区西側、Ⅲ層からの出土が多い。円形または橢円形を呈する拳大の扁平な川



第37図 造構外出土石器実測図(4)



第38図 造構外出土石器実測図(5)

原石が使用される。両面の平坦な面に1~2個の凹みをもち、凹みは皿状、浅いV字状を呈する。長さ10.8cm~14cm、重さ310g~625gを測る。37は敲石との併用が考えられる。石質は敲石と同様変化に富み、緑色片岩、泥質凝灰岩、安山岩、石英閃綠玢岩、変成安山岩である。

#### 磨石 (第37図41、38図42)

拳大ほどの扁平な川原石の平坦な部分を使用面とする。42には擦痕のほか、黒色樹脂の付着がみられる。長さ8.6cm~12.5cm、重さ380g~1,100gを測る。石質は凝灰質泥岩、石英安山岩である。

#### 石皿 (第38図44、45)

44は、使用面と縁辺部が明瞭に区画されている。石質は火山礫凝灰岩である。45は、柱状節理を呈する自然石の平坦な面を使用面とするもので、長さ23.1cm、重さ1,850gを測る。石質は流紋岩である。

### (3) 土製品・石製品

F<sub>2</sub>区造構外より出土した土製品・石製品は、円盤状土製品13点、錐形土製品1点、円盤状石製品1点の計15点である。調査区西側のⅢ層からの出土が多い。

#### 円盤状土製品 (第40図1~13)

土器片を二次的に使用し、打ち欠き、研磨により円形、三角形、方形に整形しているもので、深鉢形土器断部破片が多く用いられる。文様は、当時使用されていた土器文様類度が、そのま

ま反映しているものと考えられ、沈線文が圧倒的に多く、隆沈文、網文十沈線文、撲糸文、無文がみられる。大きさは3.6cm~4.9cmを測る。

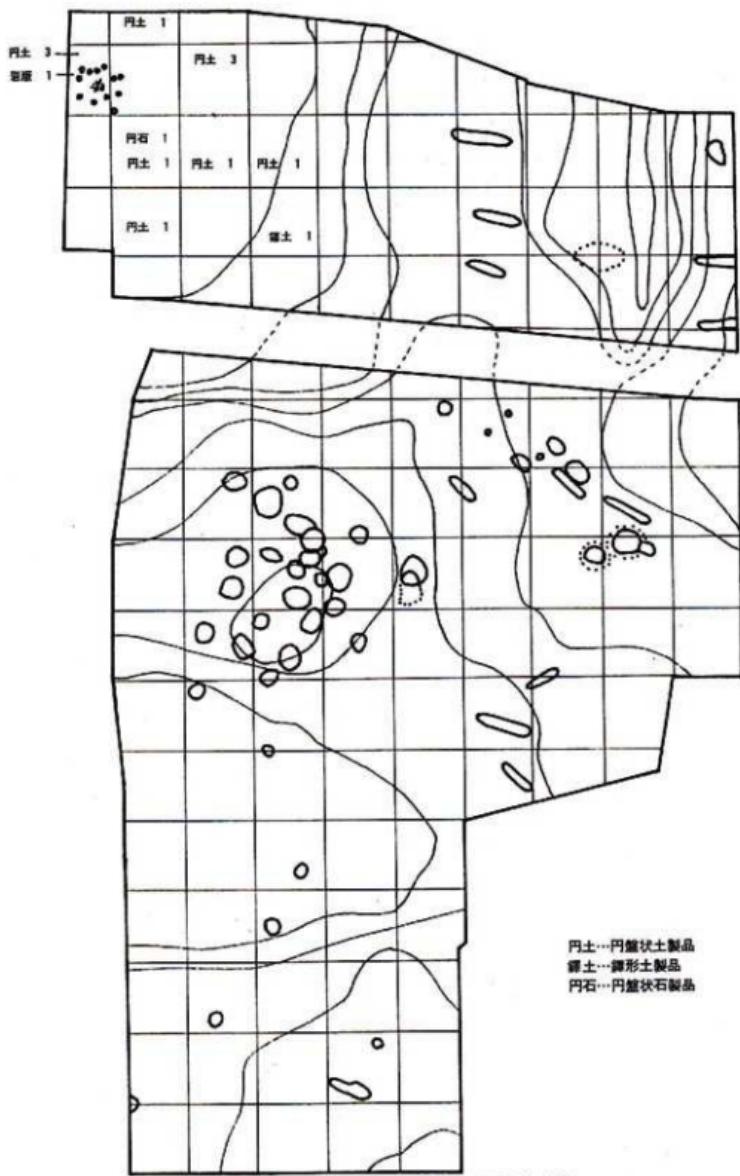
**鐸形土製品** (第40図14)

YL-116グリッド、Ⅲc層より出土した。欠損品で頂端部が残存している。頂端部は尾錐状を呈し、孔が穿たれている。胎土には小礫を含む。焼成は不良で、色調はによい黄橙色を呈する。

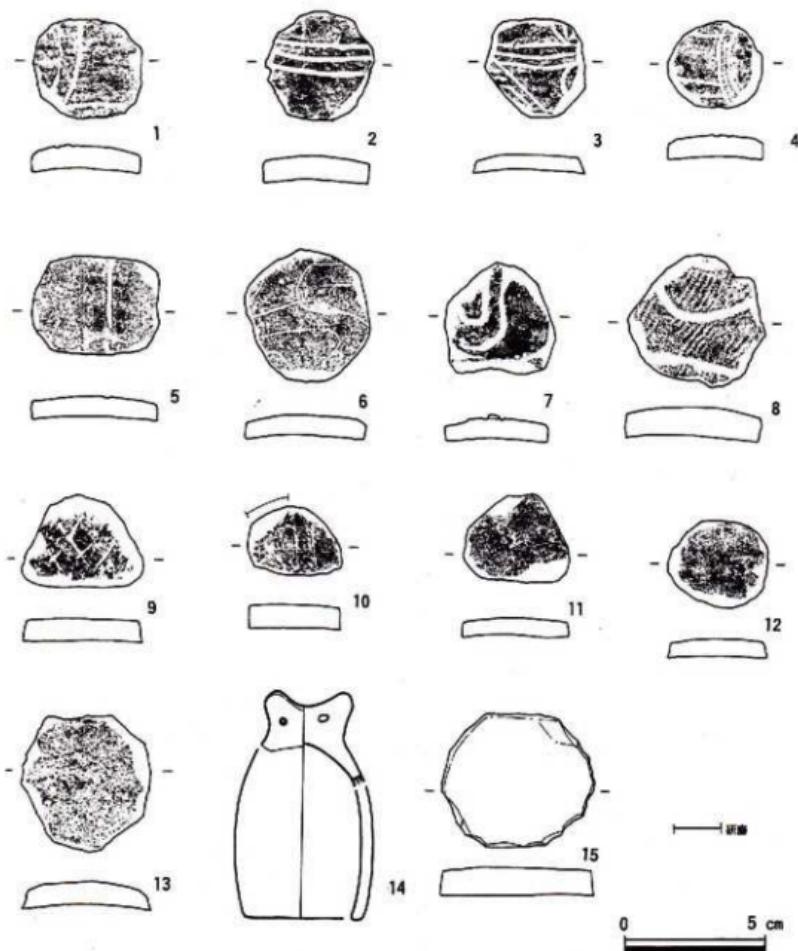
**円盤状石製品** (第40図15)

YM-114グリッド、Ⅲd層より出土した。扁平な川原石の側縁を打ち欠きにより整形している。長さ5.5cm、厚さ1.0cm、重さ43.0gを測る。石質は石英安山岩である。

(藤井 安正)



第39図 各グリッド土製品・石製品出土数



第40図 遺構外出土土製品・石製品実測図

## 第IV章 昭和50年度分布調査の概要

大湯環状列石周辺遺跡の分布調査は、昭和48年から51年まで継続されている。このうち、昭和50年度の調査対象地は野中堂、万座環状列石の北東側のC、D、E区域であり、本年度調査区と一部重複している。特に、面的な発掘がされたC地区は、本年度調査地に内包される位置関係にあり、同地区より住居跡等が検出されているため、その概要を再掲し、若干の考察を加えることとする。なお、50年の調査は次のような体制、日程で行なわれている。

調査主体者	鹿角市教育委員会
調査担当者	奥山 潤、大里勝哉
調査員	田村 栄、田中修造、早坂敏和、熊谷太郎
補助員	大館鳳鳴高校社会部、大館桂高校社会部、十和田高校社会科同好会
調査期間	分布調査 昭和50年6月15日～11月9日 発掘調査 昭和50年7月25日～8月8日
調査面積	分布調査 約45,000m <sup>2</sup> 発掘調査 約144m <sup>2</sup>

### 1. 接出遺構

#### (1) 組石遺構

C 1～2、C 6、C11、C15の各グリッドより、10～15cm大の石4～5個が、径数mの円を描くよう配置されているを確認、調査者はこれを組石遺構として次のように報告している。

##### C 1～2の組石

「5ヶの扁平石、細長石を60～80cmの間隔で配置されており、その下部には礫と土器片が多く散在的に出土した。径3m程の環状を成すものであったと思われる。」

##### C 6の組石

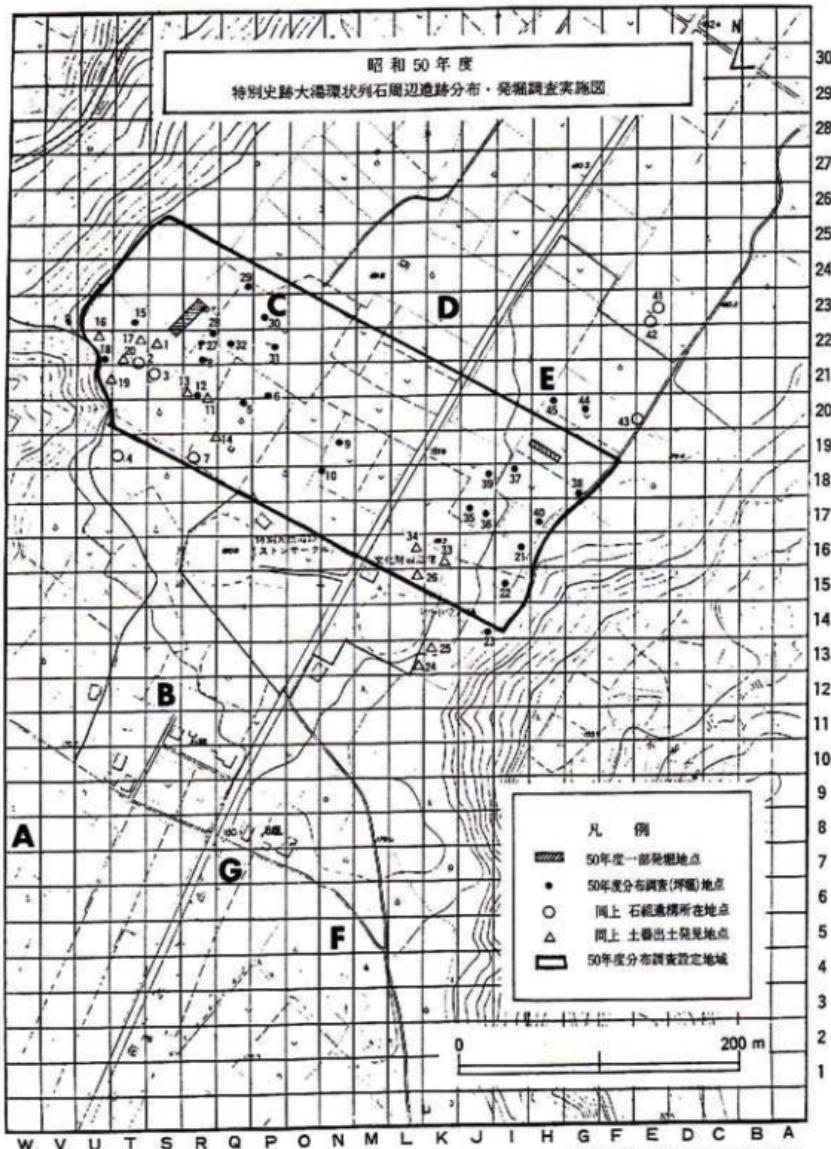
「径10cm前後の比較的丸い石が、5個で半円をえがいていた。もともとは1m位の円をえがいていたものであろうが、後世の擾乱によりこわされたものであろう。」

##### C11の組石

「組石としての主要な構成は、半円に近いプランを持つ4ヶと、散逸したと思われる1ないし2ヶの石をプラスした円をなすものであったかもしれない。なお、4ヶのうちの1ヶは、石皿の半分を利用していった。」

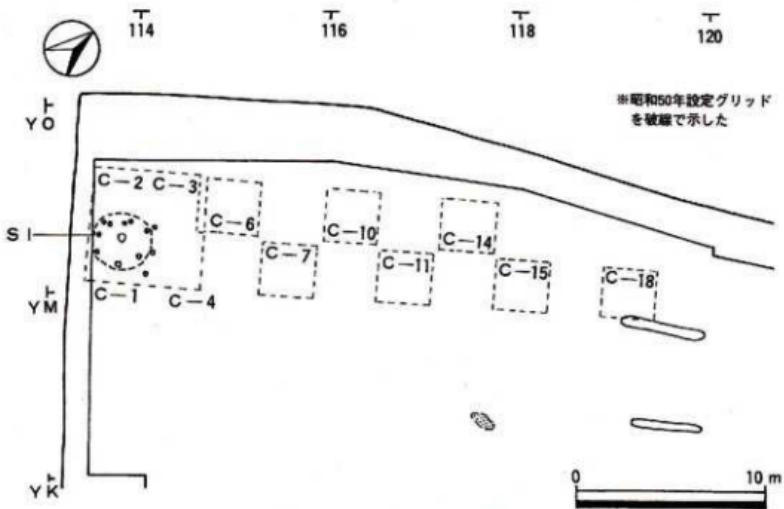
##### C15の組石

「径10～15cmの石5ヶが出上した。そのうちの4ヶは、およそ20cmの間隔で、ゆるい弧をな



第41図 調査実施図

\*昭和50年度分布調査結果より転載



第42図 C地区グリッド配置図

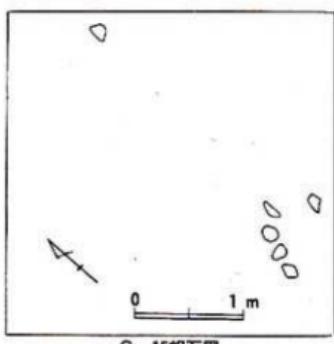
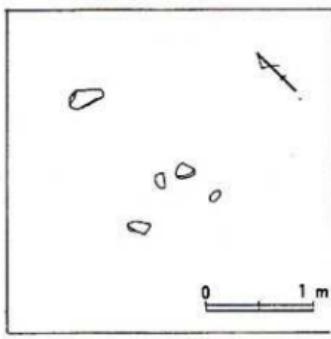
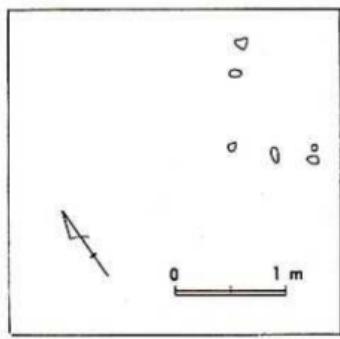
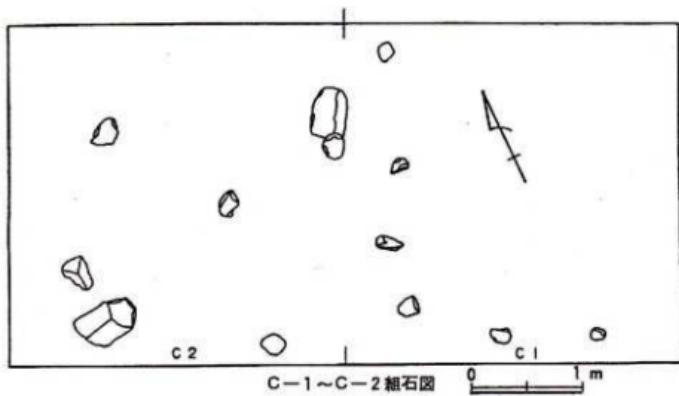
して配されており、畔の壁ぎわの石と関連づけると、横円形に近いプランであったのではないか。C11のものと同様、内部には遺物・ピットはみられなかった。」

このように、C地区で確認された組石4基は、やや小型の石を間隔をあけて、1~3m程の円あるいは横円形状に配したもので、野中堂、万座環状列石、一本木後口配石遺構群を構成する配石（組石）遺構とは、石の大きさ、配置の点で大きく異なっている。また、D<sub>1</sub>区で検出されている環状配石遺構や集石遺構とも趣を異にしている。下部遺構や焼土等も確認されておらず、本遺構の性格については、不明と言わざるを得ない。今後の課題としたい。なお、今年度の調査区域からは、同様の遺構は確認されていない。

## (2) 住居跡

大湯環状列石周辺においては、昭和27年の文化財保護委員会による調査により初めて住居跡と考えられた遺構が検出されている。しかし、この遺構については、壁が確認されてないこと、列石との位置関係等から、D<sub>1</sub>・D<sub>2</sub>区の調査で検出された6本柱の建物跡（長方形柱穴列）となる可能性が高い。そのため、50年の調査で検出された住居跡が初めての例と考えることができる。報文では、本住居を平地式と考え、次のように記載している。

「小ピットは12あり、一応柱穴と思われた。しかし、どれがこの住居跡に主要な柱穴になるのか明確にすることは困難であったが、平面プランは約3mの円形に近いものと考える。炉跡は中央部に位置し、南側に6個の石を置き、焼土は約35cm×35cmの大きさに堆積していた。遺



※昭和50年度分布調査  
概報より転載

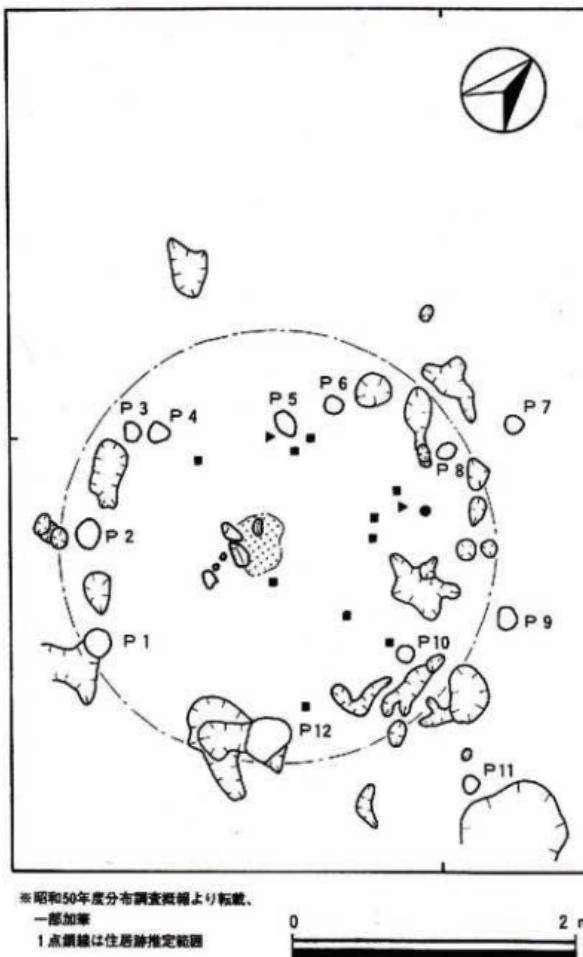
第43図 C地区組石造構実測図

■ 完形、復元土器  
 ▲ 石器  
 ● 石製品

Pitの種: 深さ (cm)

P 1	22.0	13.0
P 2	18.0	14.0
P 3	15.0	9.0
P 4	6.0	15.5
P 5	12.5	23.5
P 6	13.0	10.0
P 7	12.0	8.0
P 8	12.0	8.5
P 9	11.5	5.0
P 10	10.0	8.0
P 11	12.0	15.0
P 12	30.0	16.0

\*深さは床面より



第44図 C地区確認住居跡

物は、完形及び復元された土器10個と破片多数、岩版・石器・炭化栗・酸化鉄の小塊である。これらは多く炉を中心とした北側に片寄っていたが、炉に付属する石とともに、下位火山灰層よりおよそ10~15cmのレベルに出土した。

住居跡の南側では、柱穴と思われる1m前後の間隔のピットがあり、そこからさらに南にゆるく下位火山灰層と黒褐色土（第IV層）が、10cm程の高まりでのびていた。いいかえるならば、南側からごく緩い傾斜で落ちこんでいたといえる。多分入口ではないかと考える。また炉址の北側、住居の隅には、特に黒褐色土の堅くしまった部分があり、小さな張り出し部分があったのかもしれない。

もし竪穴住居であったとすれば、下位火山灰層に掘り込まれたものではなく、第IV層である黒褐色土層面からの掘り込みだったのであろう。しかし、それを土層面に見い出すことは出来なかつた。また平地式住居であれば、その床面は、第IV層におかれたものであり、柱穴ピットの深さは、もっと深いものであつただろうし、出土遺物のレベル及び北隅の土の堅さからみても、平地式住居であると考えるのがより妥当であろう。」

本住居跡が竪穴式か平地式かは、F<sub>1</sub>区で検出されている竪穴住居跡群との関連及び性格を考える上で重要となる。本遺構周辺の再調査及びH<sub>2</sub>区の調査結果を加味し、再考を試みたい。

径3m前後の円形プランで、ほぼ中央に石圓炉を有している事等、F<sub>1</sub>区で検出されている竪穴住居跡との共通性から、本遺構を住居跡とすることは妥当と考える。また、炉跡や出土遺物のレベルから第IV層を床面とすることも問題はない。ただし、本住居跡の掘り込み面については、F<sub>1</sub>区の竪穴住居跡やF<sub>2</sub>区の縄文時代後期の遺構の構築面がIII<sub>d</sub>層であることや、遺物包含層がIII<sub>a</sub>~III<sub>d</sub>層上位であること等から、III<sub>d</sub>層の黒色土層面と考えたい。すなわち、本住居跡は、III<sub>d</sub>層を掘り込み、IV層を床面とした竪穴住居跡であり、E<sub>1</sub>区で検出されている竪穴住居跡と一連のものと捉えておきたい。

住居跡内より、完形・復元土器10個体（第45図1~5、46図6~10）とともに、多数の土器破片、岩版（第52図6）、石器、炭化栗が出土している。完形・復元土器は住居跡北半部から2~3個まとめて、石圓炉と同一レベル面より出土している。なお、土器破片、石器については出土地点が不明なことから、ここでは出土地点の特定できる完形・復元土器10点と岩版について記述する。これ以外のものは、遺構外出土遺物として取り扱った。

1は、口縁部を欠く壺形土器である。頸部、胴部最張部に隆沈文が施され、胴部隆沈文部には「メガネ」状のアクセントが施されている。底径5.5cm、焼成は良好、色調は灰白色を呈する。器面にはわずかながら赤色顔料の付着がみられる。

2は、平口縁の鉢形土器で、胴部上半に文様帶をもつ。文様帶は1~2条の平行沈線により区画され、弧状沈線とS字文を組み合せた文様が等間隔に施されている。底径7.2cm、器高

8.4cmを測り、焼成はやや良、色調は明黄褐色を呈する。

3は、ゆるやかな波状口縁を呈する小型の鉢形土器で、文様帶は胴部全体に及ぶ。文様帶には1～2条の平行沈線により弧線文、S字文が施文されている。器高5.9cm、口径9.3cm、底径4.5cmを測る。焼成は良好、色調は淡黄色を呈する。

4は、平口縁の鉢形土器で、胴部上半に文様帶をもつ。4条の平行沈線が施文された後、連続文が付加されている。器高7.4cm、口径13.4cm、底径5.1cmを測る。焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈する。

5は、平口縁を呈する大型の鉢形土器で、住居跡中央に位置する石囲炉東側より出土した。2条の平行沈線により胴部上半に文様帶は区画され、相対する弧状沈線文が重層して施文されている。器高10.7cm、口径19.2cm、底径7.8cmを測る。焼成は良好、色調は灰白色を呈する。

6は、一対の山形口縁を有する深鉢形土器で、住居跡西壁際、炉と同一レベル面から出土した。胴部下半まで文様帶が及び、文様帶は口縁頂部を基点として、縦位に6区分され、重層する山形状沈線文と弧状沈線文が交互に施文されている。器高12.9cm、口径12.8cm、底径6.0cmを測る。焼成は良好、色調はにぶい橙色を呈する。

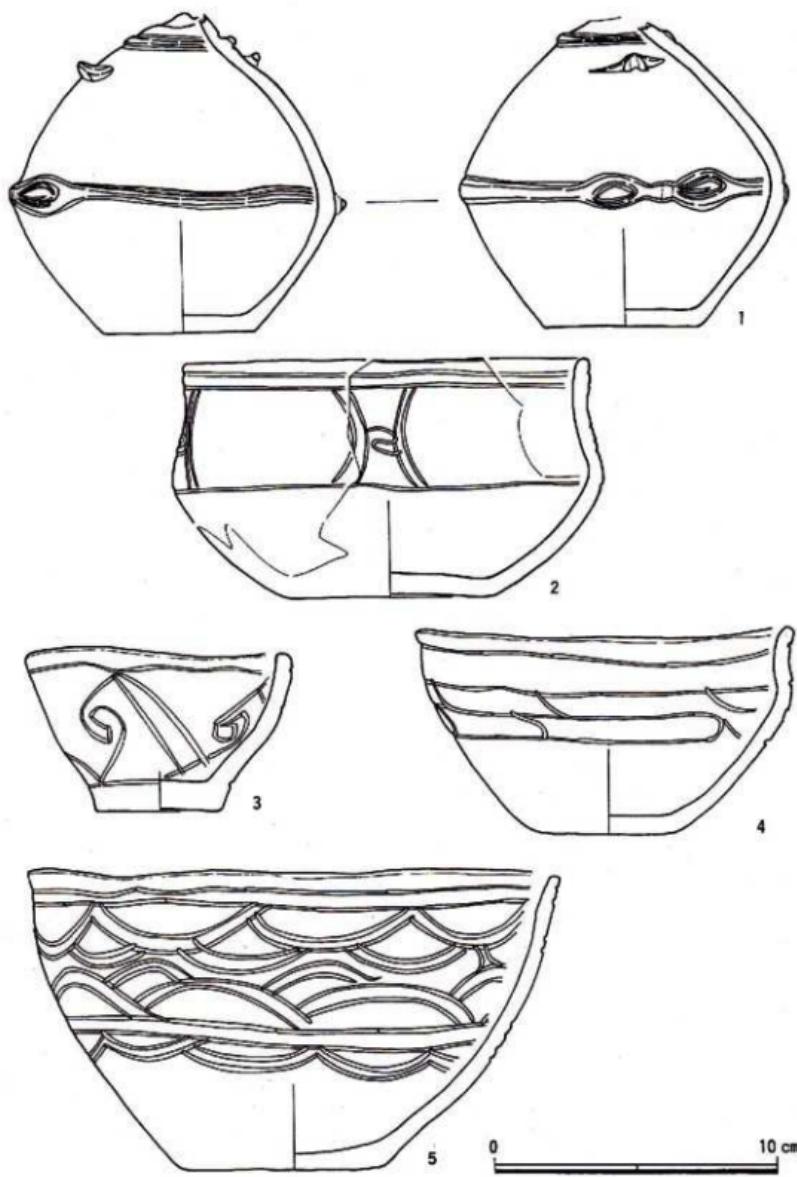
7は、ゆるやかな波状口縁を呈する深鉢形土器で、文様帶は胴部下半まで及ぶ。文様帶は横位に連結するレンズ状沈線文により上下2段に、さらに縦位に9区分され、連線文として弧線文が付加されている。器高14.3cm、口径12.0cm、底径6.0cmを測る。焼成は良好で、色調はにぶい黄褐色を呈する。

8は、ゆるやかな波状口縁を呈する深鉢形土器で、住居跡北側、炉と同一レベル面から出土した。口唇部から胴部下半にかけてR原体の網目状撚糸文が施文されている。器高15.4cm、口径13.5cm、底径7.0cmを測る。焼成は良好である。色調は明褐色を呈し、器面には煤状炭化物の付着がみられる。

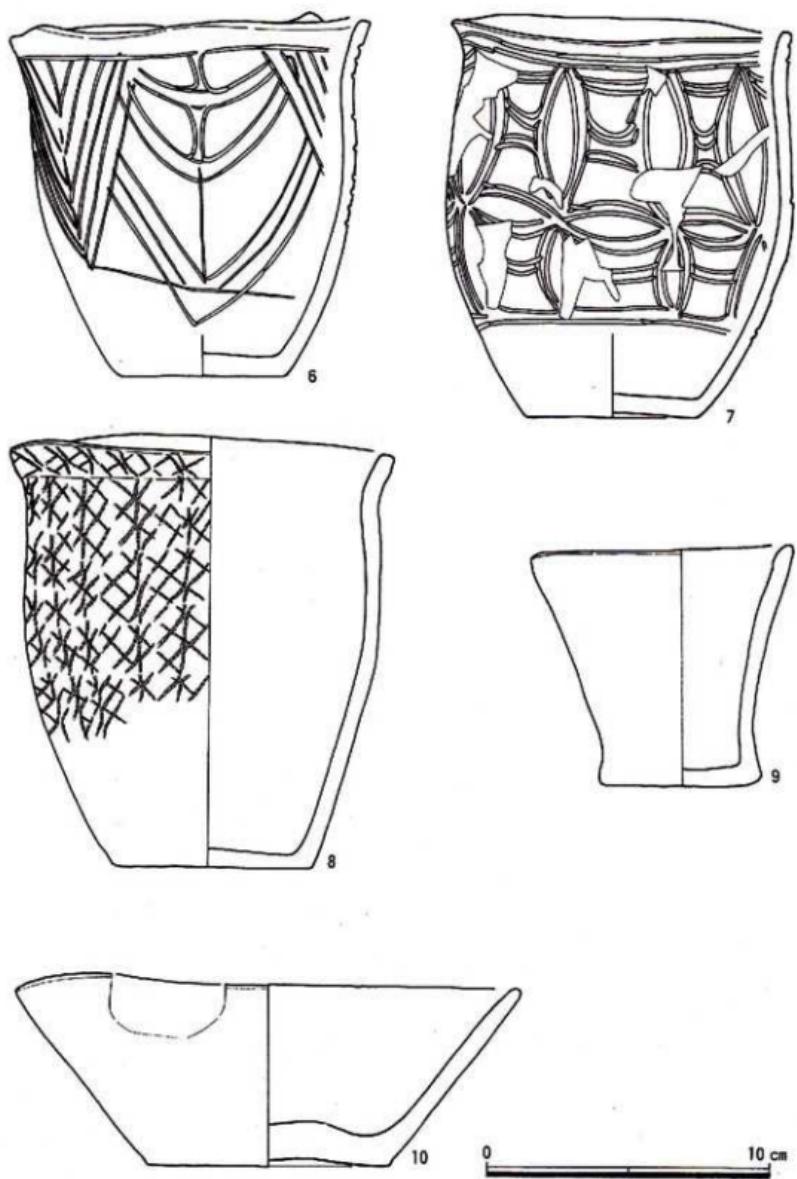
9、10は、無文の鉢、浅鉢形土器である。9は、器高8.7cm、口径9.2cm、底径5.7cmを測り、焼成は良好、色調は暗灰色を呈する。10は、器高6.8cm、口径(17.8)cm、底径8.6cmを測り、焼成は不良で、色調は淡黄色を呈する。

岩版は、一辺が5.5cm程のはく正三角形状で、断面は半円状をなしている。各頂部と各辺に5～6条の沈線により半円文が施文されるほか、2条の沈線とゼンマイ状を呈する沈線が付加されている。裏面は研磨され、平坦となっている。石質は泥質凝灰岩である。住居跡北壁際、炉のレベルよりやや高い地点から出土している。

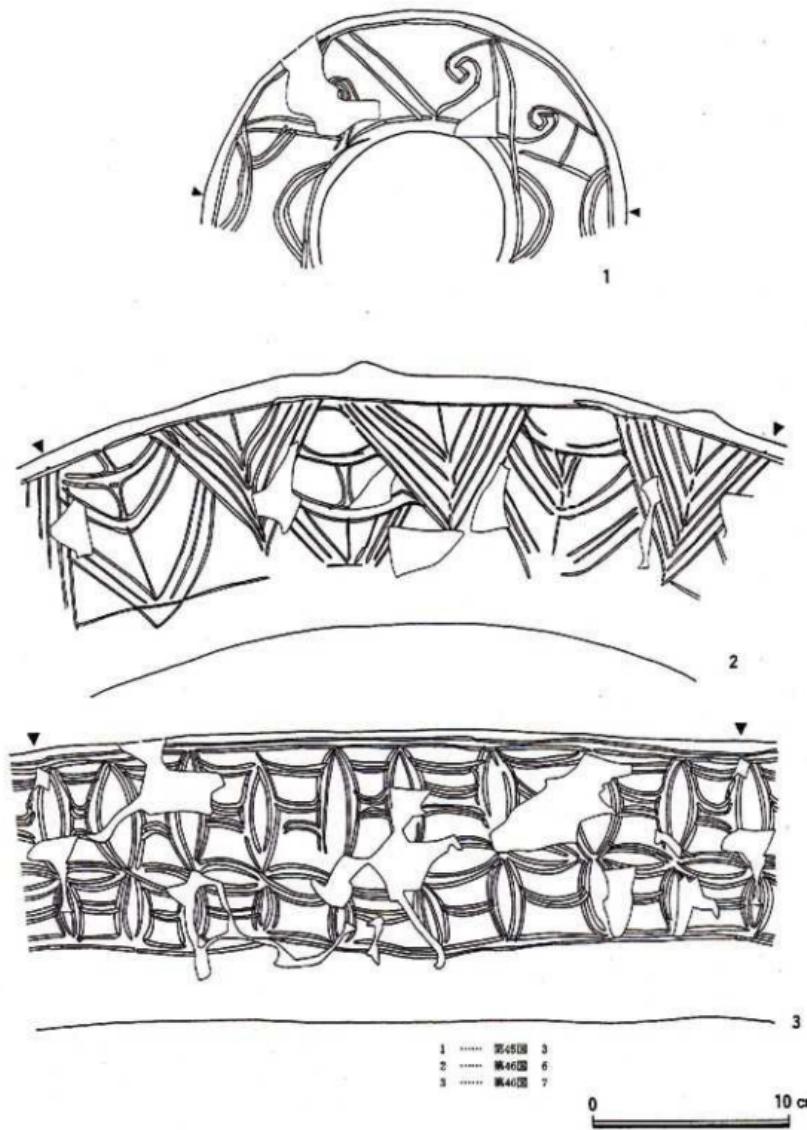
(秋元信夫・藤井安正)



第45図 C地区住居跡出土土器実測図(1)



第46図 C地区住居跡出土土器実測図(2)



第47図 土器展開模式図

## 2. 造構外出土遺物

### (1) 土器 (第48図1・2、49図1~17、50図18~21)

昭和50年度分布調査C地区造構外からは、復元土器2点、土器破片ダンボール箱2箱などが出土している。その大半は縄文時代後期初頭～前葉にかけてのもので、その他に縄文早期（第26図1）、後期中葉の土器破片も数点みられる。ここではその代表的なものを紹介する。

第Ⅰ群 縄文後期初頭～前葉の土器で、前十腰内式、十腰内I式に比定される。

#### 1類 隆沈文の土器 (第49図1)

深鉢、壺形土器が主体となる。円文、長方形文(1)が施文され、区画文として多用される。焼成は良好で、色調は淡黄色を呈する。

#### 2類 磨消縄文の土器 (第49図2~4)

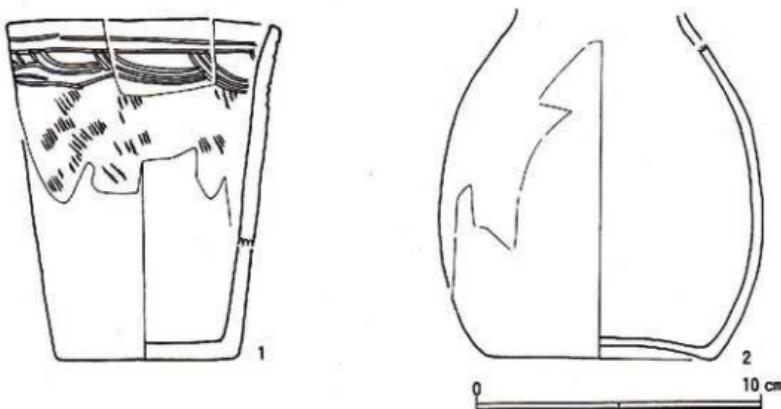
深鉢が主体を占めるほか、壺形土器もみられる。文様帶は胴部上半に区画され、主文様として帯縄文により曲線文、長方形文、幾何学文が施文され、刺突文が付加されるものもある。沈線間にはL R 縄文が施文、多用される。焼成は良く、色調はにぶい黄橙色～灰褐色を呈する。

#### 3類 地文上に沈線文が施文される土器 (第49図5)

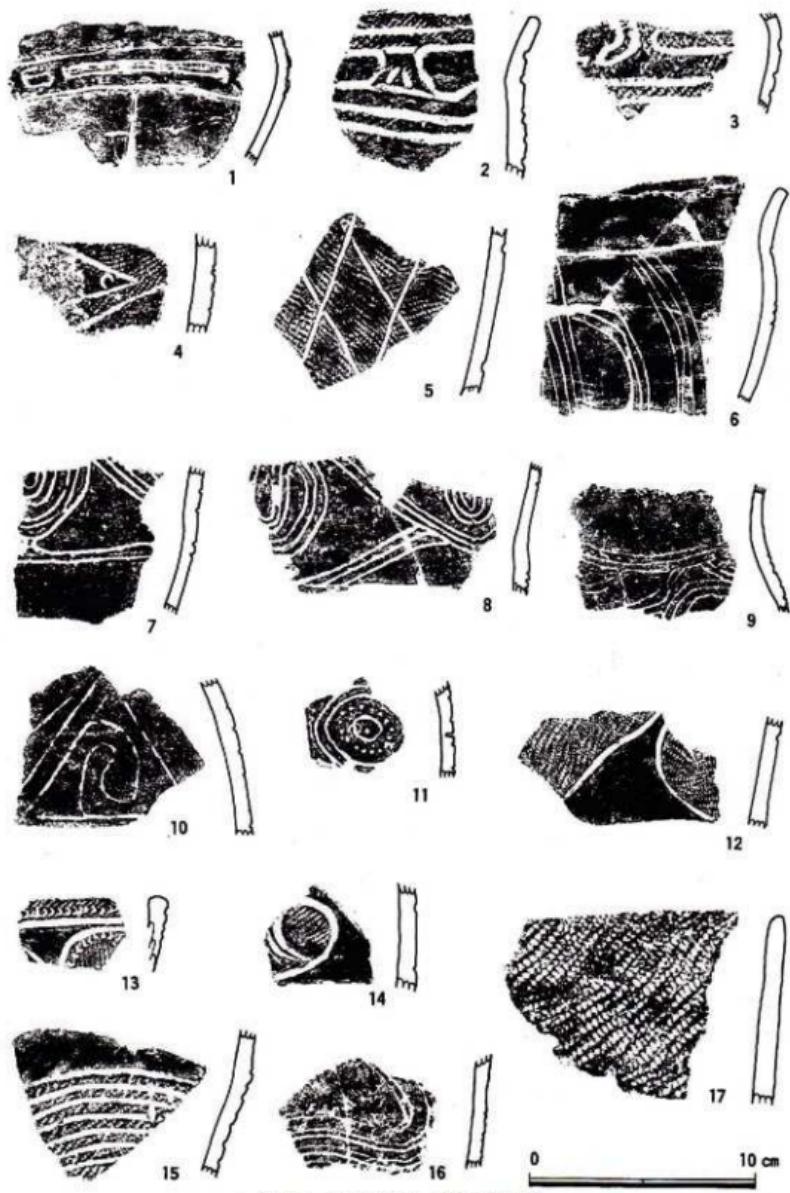
深鉢が主体となる。地文上に格子目状沈線文が施文されている。地文はR L 縄文が多用される。焼成は良好で、色調は灰白色を呈する。

#### 4類 沈線文の土器 (第48図1、49図6~11)

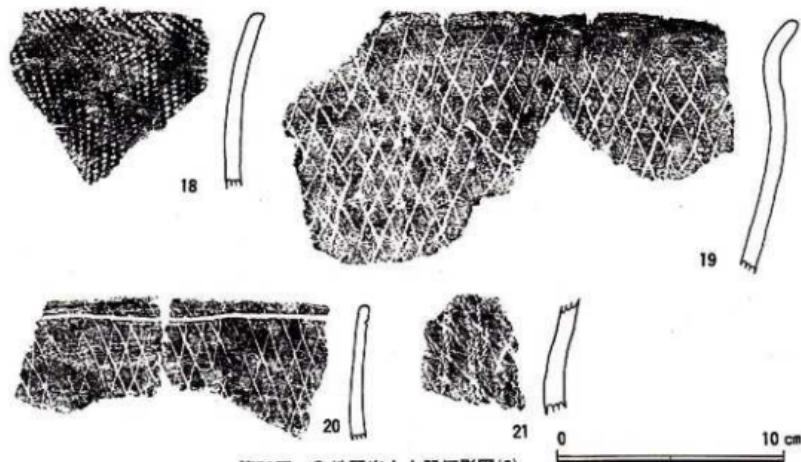
深鉢、鉢、壺形土器がみられ、深鉢が主体を占める。無文研磨された土器器面上に2~数条の平行沈線により、弧線文、円文、幾何学文が施文されており、刺突文が付加されるものもある



第48図 C地区造構外出土土器実測図



第49圖 C 地區出土土器拓影圖(1)



第50図 C地区出土土器拓影(2)

る。文様帶は胴部上半に区画され、区画文として隆沈文が用いられるのも若干ある。1は、小型深鉢形土器で、口径(9.5)cmを測る。口縁部上端には横位に連続する弧線文が施文されている。胴部に施文されたL繩文は擦り消しが行われている。焼成は良く、色調は灰白色を呈する。

#### 第二群 繩文後期中葉の土器で、十腰内II式に比定される。

##### 1類 磨消繩文の土器 (第49図12~14)

器面に曲線的な沈線で描きだされた幾何学的な磨消繩文が施文されている。沈線内には条の細かなLR繩文が施文、多用されるほか、繩文部の沈線に沿って半竹管による刺突文が付加されるものもある。深鉢形土器が主体を占め、口縁部が「朝顔」状に開き、口唇部が肥厚する。焼成は良好なものが多く、色調はぶいい橙色、ぶいい黄橙色を呈する。

##### 2類 平行沈線文を特徴とする土器 (第49図15)

口縁部付近に、幅の狭い平行沈線文が施文されるもので、沈線は短刻線により連結されている。沈線間にはRL繩文が充填される。焼成は良好なものが多く、色調は灰黄色を呈する。

#### 第三群 繩文後期の土器 (第48図2、49図16~17、50図18~21)

本群には、撚糸文、条痕文、繩文、無文土器がある。深鉢、鉢、壺形土器がみられ、深鉢が主体を占める。第48図2は、無文の壺で、底径7.9cmを測る。焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈する。

##### (2) 石器 (第51図1~10)

昭和50年度分布調査C地区より出土した石器は、石鏃1点、搔器9点の計10点である。

1は、石鏃の未完成品と考えられる。長さ3.0cm、重さ3.5gを測る。石質は硬質頁岩である。



第51図 C地区出土石器実測図

2～10は、縦長剥片の側縁に押圧剝離を施し、刃部を作り出した搔器である。刃部の位置から、一側縁に限定されるもの（3～5、7）、二側縁に及ぶもの（2、8～10）に分類される。6は、基部に敲打の際に生じたこまかな剝離がみられる。長さ4.0cm～8.1cm、重さ6g～33gを測る。石質はすべて硬質（珪質）頁岩である。

（3）土製品・石製品（第52図1～5）

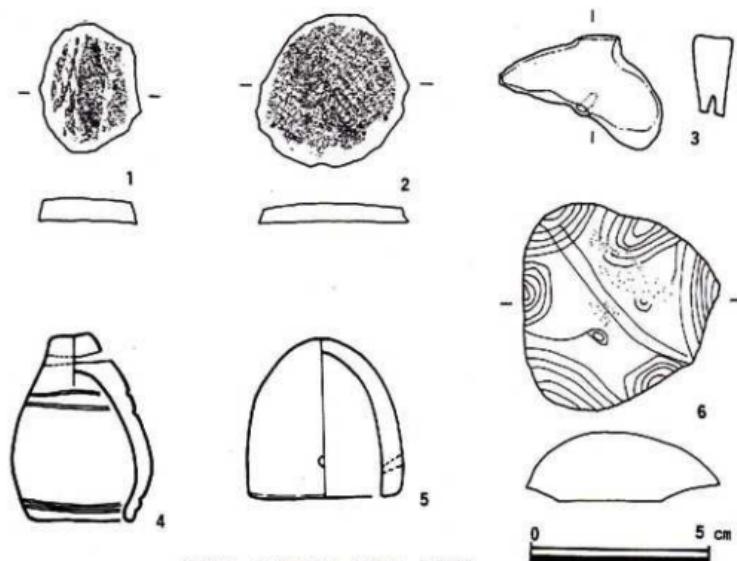
昭和50年度分布調査C地区より出土した土製品・石製品は、円盤状土製品2点、鉢形土製品2点、その他の土製品1点の計5点である。これらの出土地点は、本年度調査区の西端部にある。

1～2は、円盤状土製品である。土器洞部破片を使用し、打ち欠きにより成形している。縄文、撫糸文が施文されている。

4～5は、鉢形土製品である。4は、2条の平行沈線が施文され、頂端部には紐を通す為と考えられる孔が穿たれている。器高5.3cm、焼成は良好で、色調は灰白色を呈する。5は、砲弾状を呈し、開口部分近くに孔が穿たれている。器高4.5cm、焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色である。

3は、雁股状を呈するもので、深さ5mm程の刺突が施されている。色調はにぶい黄橙色である。

（藤井 安正）



第52図 C地区出土土製品・石製品

## 第V章 自然科学的調査

### 1. 大湯環状列石周辺の古環境について

#### (1) はじめに

花粉は、スボロボレニンという化学的に安定で強固な物質からなる外壁を身につけていて化石に残る。そのため、地層中の花粉化石を取り出して調べることにより、その地層の堆積当時の植生を知ることができる。また、定量的に調べ、それらの植物の花粉の散布量や生産量をふまえて考えると、どのような地形、気候であったかなどの古環境も推定できる。

大湯環状列石周辺の花粉分析については、これまでB区(1985年)、F<sub>1</sub>区(1989年)の試料について行なっており、D<sub>1</sub>区(1987年)出土の炭化堅果類の分析結果を加味し、大湯環状列石周辺の古環境の考察を試みている(成田・1990)。

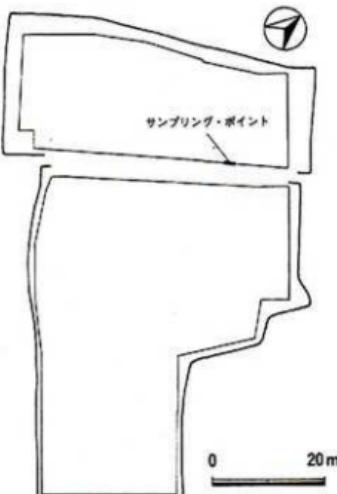
この度の花粉分析は、試料の増加により、これまでの考察の違否を確認することにある。

#### (2) 試料の採取

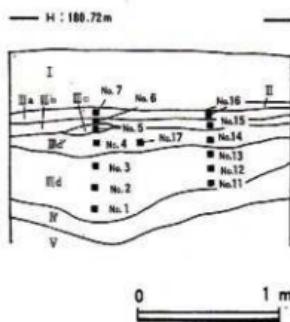
試料の採取地点は、堆積土が厚く、耕作による擾乱の少ない調査区北側の農道部分とした。80cmの距離の2地点から、大湯浮石層以下の堆積土を層ごとに採取、下層より番号を付した。なお、III d層については厚いため、上、中、下の3層より試料を採取している。また、III d'層No.17からは、他の倍近い量の資料を採取した。

#### (3) 処理方法

試料の処理は、土壤300gをビーカーにとり、アルカリ(10%KOH)処理→水洗い→HF処理→水洗い→比重分離→水洗い→アセトトリシス処理→水洗い→封入の順に行ない、各試料のプレ



第53図 試料の採取地点



第54図 採取層序と採取番号

パラートを作成した。

#### (4) 分析結果

検鏡にあたっては400倍で行ない、樹木花粉が250個以上になるまで計数したが、全般的に出現数が少なく、ダイアグラムを作成することはできなかった。

出現したのは、樹木花粉1科12属、草本花粉4科で、その他に胞子、腐植のため同定不可能な花粉があった。B区、F<sub>1</sub>区の処理量よりも多くしたが、花粉の出現数は少なかった。今まで述べてきたように、花粉の乾燥・物理的な作用・バクテリア等の影響で本来の環境を復原することは容易でないと考えられる。

今回の分析結果は、新しく出現した花粉はなく相対的に出現数が少なく、F<sub>1</sub>区での分析を補うような結果になった。その中で安定して見られたのは、ブナ属・コナラ亜属・マツ属で、当時ブナ・ミズナラ・コナラを中心とした落葉広葉樹林の広がりの中に、アカマツを含む二次林が一定の広がりを見せていたと考えられる。

サンプルNo.	層準	花粉の種類	木												本				草本				合計
			トマツ	スズナ	ブナ	コナラ	クセノノキ	ヤクシモ	ニレ	ハグロミ	オノキ	モチノキ	シノキ	ツツジ	イヌササ	カラタツ	ヤクツリ	ユリグサ	ササ	クサ	科		
No.17	III d'		2	4	3	18	8	2	4	2	6	5	1	4	2	4	5	3	2	75			
No.16	III a		2	3	4	11	3	·	2	1	5	2	·	·	·	4	5	1	1	44			
No.15	III b		1	4	2	10	2	1	3	4	4	·	2	1	·	3	2	2	·	41			
No.14	III d'		1	4	1	12	5	·	2	6	2	1	3	2	1	5	3	1	·	49			
No.13	III d		·	1	·	9	2	·	3	2	3	·	·	2	1	1	·	2	·	26			
No.12	III d		·	3	1	6	4	1	4	·	6	2	·	·	·	2	1	4	·	34			
No.11	III d		1	2	·	15	3	·	·	3	1	1	2	·	·	1	3	1	·	33			
No.7	III a		1	7	5	10	3	·	2	1	2	3	2	2	·	7	4	1	2	52			
No.6	III b		1	3	3	11	2	·	2	1	1	4	2	1	·	6	1	3	·	41			
No.5	III c		·	7	4	16	5	·	3	2	3	3	4	1	4	4	·	4	·	60			
No.4	III d'		·	3	1	13	6	1	6	1	1	2	1	·	3	5	·	3	·	46			
No.3	III d		3	2	2	14	2	·	4	·	2	1	·	3	3	2	·	4	·	42			
No.2	III d		·	4	1	12	5	·	1	3	·	3	1	2	2	3	2	2	·	41			
No.1	III d		·	5	·	15	9	·	1	·	3	4	2	1	1	1	2	1	·	45			

第1表 検出された花粉化石の固体数

今回、別に1ヶ所、500gの処理も行なったが、固体数はほとんど変わりがなく、腐植土壌を分析するには限界を感じられた。遺跡の周辺に、鍾層の大湯浮石層を上位にのせる泥炭層の発見がないかぎり、十分な環境の復原はできないように思われる。

(成田 典彦)

## 2. 旧地形の復原

### (1) はじめに

F<sub>a</sub>区中央部で検出されたフ拉斯コ状土壌のほとんどは、口縁部から口頭部を欠いている。これは、本来この周辺が小丘状の微高地であり、そこに構築されたフ拉斯コ状土壌等の上半が後世の耕地整理や耕作による擾乱により消失したことによる。

ここでは、地層学的な方法と統計学的方法により、フ拉斯コ状土壌等が構築された当時の地形の復原を試みたい。

### (2) 統計学的方法による復原

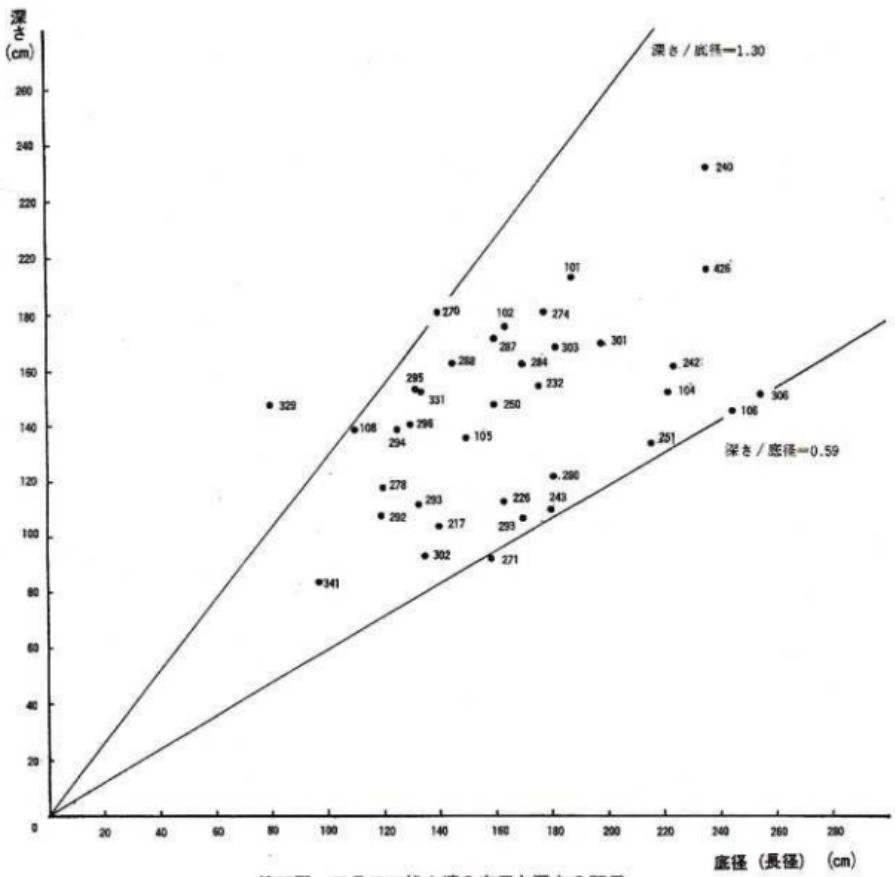
第6次までの調査により、周辺遺跡からは47基のフ拉斯コ状土壌が検出されているが、ほぼ完全な形で検出されたものは37基で、その底径及び深さの計測値は第2表に示すとおりである。これを図示すると第55図のようになり、そのほとんどは、深さ/底径が0.59~1.30に含まれる。

F<sub>a</sub>区のフ拉斯コ状土壌もこの関係にあると仮定すると、各フ拉斯コ状土壌の底径にこの比率を掛けた値が本来の深さの上・下限値となり、その中间値が最も可能性の高い深さとなる。また、底面のレベルにこの数値を加えると、そのフ拉斯コ状土壌の構築面となる。

第3表は、F<sub>a</sub>区中央部のフ拉斯コ状土壌の計測値と本来の深さの推定値をまとめたものである。この表によると、最も破壊を受けているも

調査区	追跡番号	底径(長径×短径)(mm)	深さ(mm)
B <sub>1</sub> 区	1 0 1	1 8 8 × 1 7 8	1 9 3
	1 0 2	1 6 4 × 1 5 9	1 7 6
	1 0 4	2 2 2 × 1 7 6	1 5 3
	1 0 5	1 5 0 × 1 4 4	1 3 6
	1 0 6	2 4 5 × 2 1 0	1 4 6
	1 0 8	1 1 0 × 1 1 0	1 3 9
D <sub>1</sub> 区	2 1 7	1 4 0 × 9 9	1 0 4
	2 2 6	1 6 3 × 1 5 6	1 1 3
	2 3 2	1 7 6 × 1 7 6	1 5 5
	2 4 0	2 3 6 × 1 9 7	2 3 2
	2 4 2	2 2 4 × 2 2 0	1 6 2
	2 4 3	1 8 0 × 1 6 4	1 1 0
	2 5 0	1 6 0 × 1 2 8	1 4 9
	2 5 1	2 1 6 × 2 1 6	1 3 4
	2 7 0	1 4 0 × 1 4 0	1 8 1
D <sub>2</sub> 区	2 7 1	1 5 9 × 1 5 9	9 2
	2 7 3	1 3 3 × 1 3 0	1 1 2
	2 7 4	1 7 8 × 1 7 8	1 8 1
	2 7 8	1 2 0 × 1 1 8	1 1 8
	2 8 0	1 8 1 × 1 6 4	1 2 2
	2 8 4	1 7 0 × 1 6 7	1 6 3
	2 8 7	1 6 0 × 1 5 0	1 7 2
	2 8 8	1 4 5 × 1 4 3	1 6 3
	2 9 2	1 2 0 × 1 0 5	1 0 6
	2 9 3	1 7 0 × 1 7 0	1 0 7
	2 9 4	1 2 5 × 1 1 6	1 3 9
	2 9 5	1 3 2 × 1 3 0	1 5 4
	2 9 6	1 3 0 × 1 3 0	1 4 1
	3 0 1	1 9 8 × 1 9 0	1 7 0
F <sub>1</sub> 区	3 0 2	1 3 5 × 1 2 2	9 3
	3 0 3	1 8 2 × 1 8 0	1 6 9
	3 0 6	2 5 5 × 2 3 0	1 5 2
	3 2 9	8 0 × 8 0	1 4 8
	3 3 1	1 3 4 × 1 3 4	1 5 3
	3 4 1	9 7 × 9 2	8 4
	3 5 1	1 8 0 × 1 8 0	8 0
	4 2 6	2 3 6 × 2 0 5	1 9 6

第2表 大湯環状列石周辺遺跡 フ拉斯コ状土壌計測表



第55図 フラスコ状土壤の底径と深さの関係

のは、構築面から126cmにも及んでいることとなる。

### (3) 地層学的方法による補正

残存する各層のレベルを繋ぎ合せ、そのラインを延長することにより、旧地形を推定し、先の方法による結果を補正することとする。本地域の場合、かなりの範囲が黄褐色火山灰層（V層）まで消失しているため、ここでは遺構確認面やフラスコ状土壤の壁面で観察できる黄褐色火山灰層（V層）と乳白色火山灰層（VI層）の境界の位置、レベルを基に復原を試みた。なお小丘は単純小丘と考え、V層以上の層厚は地点に大きく変わらないものとした。

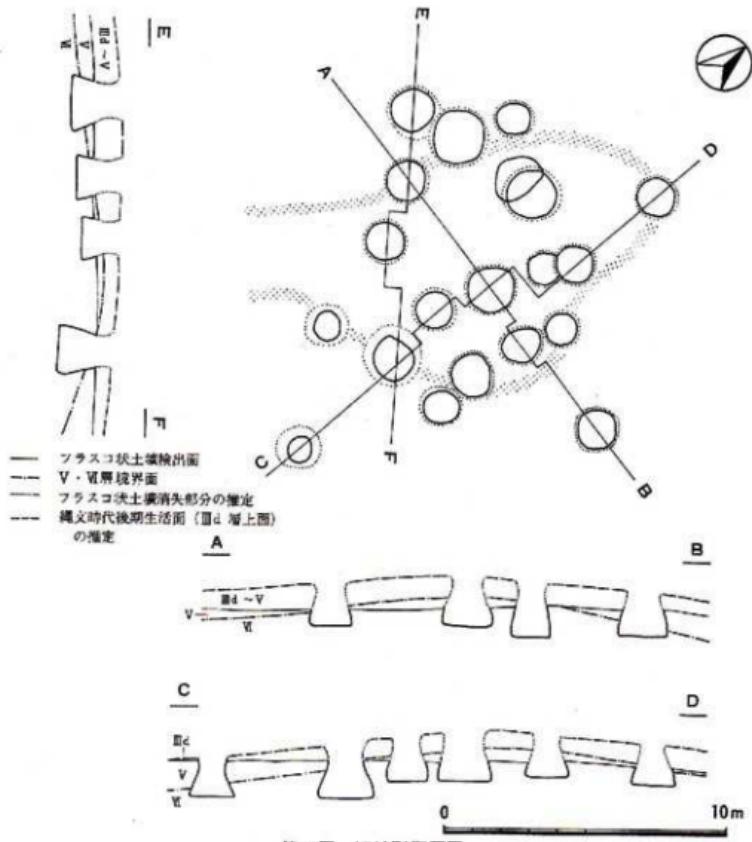
第56図中の遺構確認面下の一点鎖線は、V・VI層の境界面であり、確認面上の一点鎖線は、

遺構番号	底径(長径×短径) (cm)	確認面からの 深さ(cm)	計算値		
			底径(長径)×0.59、1.30 (cm)	中間値 (cm)	消失壁高(cm) (中間値-深さ)
480	112×104	116	66~146	106	10
481	142×140	46	84~185	135	89
482	156×148	132	92~203	148	16
483	170×150	56	100~221	161	105
484	210×204	84	124~273	199	115
485	196×194	60	116~255	186	126
487	136×130	38	80~177	129	91
488	160×160	70	94~208	151	81
490	202×124	106	119~263	191	85
491	200×184	131	118~260	189	58
492	158×144	114	93~205	149	35
493	162×160	62	96~211	154	92
494	220×208	135	130~286	208	73
495	152×144	131	90~198	144	13
496	162×150	48	96~211	154	106
497	160×150	122	94~208	151	29
499	170×168	95	100~221	161	66
500	164×150	51	97~213	155	104
501	114×108	66	67~148	108	42
504	198×131	201	117~257	187	—

第3表 F<sub>2</sub>区中央部フラスコ状土壙の深さ

その推定面である。これに(2)の方法によるフラスコ状土壙構築面を考慮し、Ⅲd~V層の厚さ60~150cmを加えたものが、フラスコ状土壙の構築面すなわち、縄文時代後期の生活面(Ⅲd層上面)となる(図中の破線)。この面から、各フラスコ状土壙の底面までの深さは、第3表の上・下限値の範囲内に入っており、その中間値に近い値となっている。

(鎌田健一・秋元信夫)



第56図 旧地形復原図

## 第VI章 分析と考察

### (1) フラスコ状土壌について

#### 立地

フラスコ状土壌は、24基確認された。これらは調査区中央部の小丘状を呈する地域と、北部から入り込む沢地の沢頭の延長部分に集中している。この2地域の地山面（確認面）での比高差は、約60cmを測る。

中央部の土壌群は13m×13mの範囲に20基あり、分布密度が高い割りには2～3の重複を示す他は、切り合いの状況はみられない。また、土壌群は南一北方向に4～5基が3状の弧を描くように構築されている。

#### 規模・堆積土・底面

調査区中央部のフラスコ状土壌群の規模・堆積土については、第V章2でのべたように耕作等の擾乱を受け、数値、状況については、不明のものが多い。フラスコ状土壌群の密集する小丘状の地域は、第V章2で考察したように現況より13cm～126cm高いレベルであったものと考えられており、この数値を調査区中央部のフラスコ状土壌にプラスすると、深さは推定108cm～208cmを測るものと考えられる。

底面積は、1.4m<sup>2</sup>～2.0m<sup>2</sup>、2.6m<sup>2</sup>～3.4m<sup>2</sup>の2つの範囲に集中しており、最大は第469号フラスコ状土壌の3.74m<sup>2</sup>、最小は第501号フラスコ状土壌の0.92m<sup>2</sup>で、平均値は2.35m<sup>2</sup>である。これまでもに、大湯環状列石周辺（B、B<sub>2</sub>、D<sub>1</sub>、D<sub>2</sub>、F<sub>1</sub>区）において確認されたフラスコ状土壌の底面積を比較すると、B区、F<sub>1</sub>区とではほぼ同値、D<sub>1</sub>、D<sub>2</sub>区とでは0.5m<sup>2</sup>ほど広い。

堆積土は、ブロック状となった地山土や、シラス土の混入がみられた。地山土は、土壌崩壊の際崩れ落ちた土量より量的に多いのではないかと感じられた。また、シラス土が堆積土上位にくるものがあり、これは土壌の埋まり切っていない状態での凹地に、他造構築の際掘りあげられた土が堆積されなければ、このような堆積状況を示さないことから、人為に埋め戻されたものと判断された。なお、第476号フラスコ状土壌については、このような状況が観察されないことから、自然堆積と判断された。

底面を観察すると、二段構造をとるものや、径40cm～100cm、深さ24cm～69cmの小壌擴をもつもの、1～6個の柱穴状ピットをもつものもある。柱穴状ピットは底面中央にもつものが多いが、第483号フラスコ状土壌のように底面中央と西壁間に5個のピットをもつものもある。ピット径は、22cm～40cm、深さ6cm～15cmを測り、ピット内には土壌堆積土下層の土が充填されていた。

#### 時期・その他

構築時期は、土壙内・遺構外出土土器から、縄文時代後期初頭～前葉と考えられる。フ拉斯コ状土壙出土の遺物量を、これまでのものと比較すると、本年度は非常に少ない。この数量の違いが立地的要因なのか、他の要因に由来するものなのか、資料の増加を待ち、今後の課題としたい。

## (2) Tピットについて

Tピットは、東北縦貫自動車道建設に伴う発掘調査により、鹿角市内においても飛躍的にその数を増し、現在まで73基確認されている。

名称については、県内だけでもTピット・階層穴状遺構・溝状ピットとさまざまな呼び方がされており、現在前二者が多く使用されている。

### 形状・規模・堆積土

平面形は、非常に長い橢円形を呈している。横断面は「Y」字状、幅の狭い逆台形状を呈するものが大半を占めるが、第507号Tピットのように頸部の長い一輪ぎしの花瓶状を呈するものもある。底面は平坦に作られ、その縦断面は底面両端が掘り込まれた下懸れ状を呈するものが多い。

規模は、長軸282cm～390cm、深さ101cm～150cmの範囲に集中するが、第509号Tピットのように長軸478cmを測るものもある。

堆積土は、黒褐色土（黒褐色土）と黄褐色土（地山土・壁崩壊土）が交互に堆積し自然堆積と判断されるものが多いが、第472号Tピットのように、埋まり切っていない凹地に他遺構構築の際に掘り上げられた土が、堆積しているものもある。

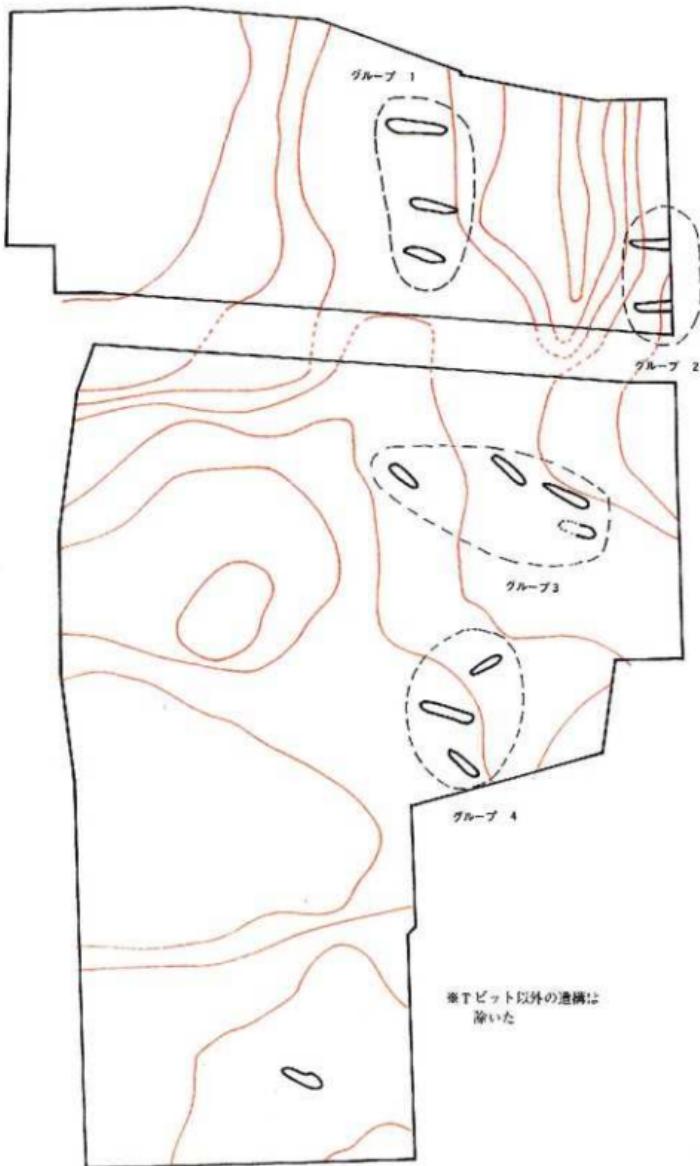
### 長軸方向・配列

第57図は、Tピットの配列とグルーピングを表したものである。約2.0m～4.5mの間隔をもち、1～4基が1単位となるグルーピングが可能で、5単位（グループ1～5）が確認されている。これらは、第463号Tピットを除き調査区北部に入り込む沢地と沢頭の延長を意識した配置を行なっている。

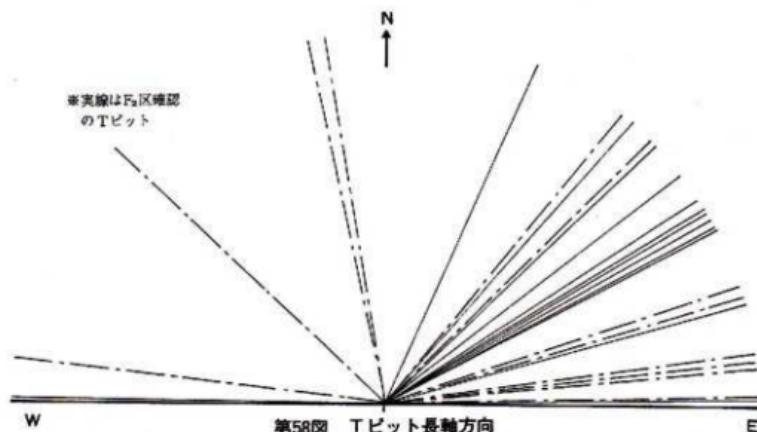
第58図は、本調査及び大湯環状列石周辺の調査において確認されたTピットの長軸方向を図化したもので、ピット長軸は南西～北東を向くものが多い。Tピットと遺跡・遺構のなる台地との関係をみると、ピット長軸は南北方向に延びた台地と同一方向を向くものが多いことが注目された。

Tピットの長軸方向については、台地の延びる方向をもとに、その配列については台地に入り込む沢などのこまかなる地形をもとに設定されたものと考えられる。

### 時期・用途



第57図 Tビットの位置とグルーピング



第58図 Tビット長軸方向

Tビットの構築時期は、確認面及び造構内・外の出土遺物から、縄文時代後期前葉と考えられる。

Tビットの用途については、陥し穴説が広く浸透しているように思えるが、まだ解明されたとはいえない。本調査において確認されたTビットは地形と密接な配列関係を示しており、狩獵の仕掛けとしての配列を示唆させているように思えるが、用途を断定できる資料の出土もなく、不明といわざるをえない。

Tビットの用途については、今後の資料の増加を待つとともに動物学、古環境、民族学などの多方面から解明の糸口を探っていく必要があると考えられる。

(藤井安正)

## 第VII章 調査のまとめ

特別史跡大湯環状列石は、米代川の一主流である大湯川の南東岸の台地上に位置する。大湯環状列石周辺の発掘調査は、昭和59年から継続されており、本年度で7年目となった。なお、平成2年3月に周辺遺跡の大部分が特別史跡に追加指定されたのに伴い、遺跡名については、本調査より大湯環状列石としている。

第1～3次調査では、一本木後ロ配石遺構群の調査に主力が注がれ、これらの配石遺構群が配石墓群であることを確認され、さらに構造の類似する野中堂、万座の両環状列石もまた配石墓の集合体であろうと推察されている。また、4、5次調査では、環状列石周囲には規則的な同心円（環）状に遺構、遺物が分布し、墓域の周囲に祭祀場域、居住域、遺物の廃棄域と続く環状集落の形態を呈するものと考えられた。6次調査F<sub>1</sub>区からは、列石周辺としては初めての縄文時代後期の竪穴住居跡が検出され、これらの住居群はさらに北西及び南方向に延び、昭和50年の分布調査C地区で確認されている住居跡と連なるものと予想された。

このため、本年度の調査はF<sub>1</sub>区で検出された竪穴住居群の東側への広がりを確認するためにF<sub>1</sub>区から東に20m離れた地点に調査区（F<sub>2</sub>区）を設定した。

調査の結果、F<sub>2</sub>区からは縄文時代後期の集石遺構1基、Tピット13基、プラスコ状土壙24基、土壙9基、焼土遺構1基、柱穴状ピット7基、平安時代の土壙1基が検出された。また、遺構内・外から復元可能の縄文土器6個体、縄文土器片ダンボール箱2箱、石器48点、土製品14点、石製品1点の出土があった。なお、同区内に位置する50年の調査地C地区からは、前述の住居跡1軒の他に組石遺構4基が確認されている。

竪穴住居跡は、50年の調査で確認されている1軒以外、本調査区からは検出されていない。この住居跡は、その報文では平地式と記載されているが、第IV章1で述べたように竪穴住居跡と考えられる。径3m前後の規模であり、住居は中央に石圓炉を有する等、F<sub>1</sub>区で検出されている4軒の竪穴住居跡との共通性がある。F<sub>1</sub>区及びその周辺に予想される住居群の一部、その東端と考えられる。

Tピット13基は、調査区の東側に偏在している。長軸方向は北東～東方向を向き、並列、近接する2～4基で1単位となり、これらのTピット群が、10～20mの間隔で、北西～南東方向の帶状に構築されている。さらに、北西側及び南東側に延びるものと考えられる。また、調査区北側に分布するTピット群は、小沢地を挟み、対となるように構築されており、南東側のTピット群についても北東側未発掘部に隣接するTピット群が分布している可能性がある。

プラスコ状土壙24基は、調査区中央の小丘状の地域に集中している。出土遺物が少なく、本遺構の性格を推察できる資料の出土もない。本調査区西端からF<sub>1</sub>区にかけて分布する竪穴住居

群から28m離れた小丘に集中していること、北東側にはTピット群が近接していること等の分布の特殊性に注目しておきたい。

柱穴状ピット7基のうち4基は、調査区南部において、5.0~8.7mの間隔で、直線的に並ぶように検出されている。径82~107cmの円形で、深さは88~122cmを測る。また、径20~30cmの柱痕が確認されている。D<sub>1</sub>、D<sub>2</sub>区等で検出されている建物跡（長方形柱穴列）の柱穴とプラン、規模が類似するが、これらのピットと対となるピットは検出されず、柱列状の遺構と考えられる。さらに南側に延びる可能性があり、調査区ほぼ中央の101号柱穴状ピットも、その規模等から、本ピット群との関連が考えられる。

本調査区からの出土遺物は、遺構内・外とも少ない。これは本地域に分布する遺構や領域の性格を反映しているものと考えられる。西端部の分布密度が比較的高いのは、この周辺まで住居群（居住域）が及ぶことと関係がある。

縄文土器の9割以上は後期前葉に位置づけられるが、他に早期中～後葉、前期末葉、後期中葉、晚期初頭の土器の出土があった。なお、早期の土器は、F<sub>1</sub>区、D<sub>1</sub>区北西側等、万座環状列石北側からの出土例が増加しつつある。

（秋元 信夫）

## 参考文献

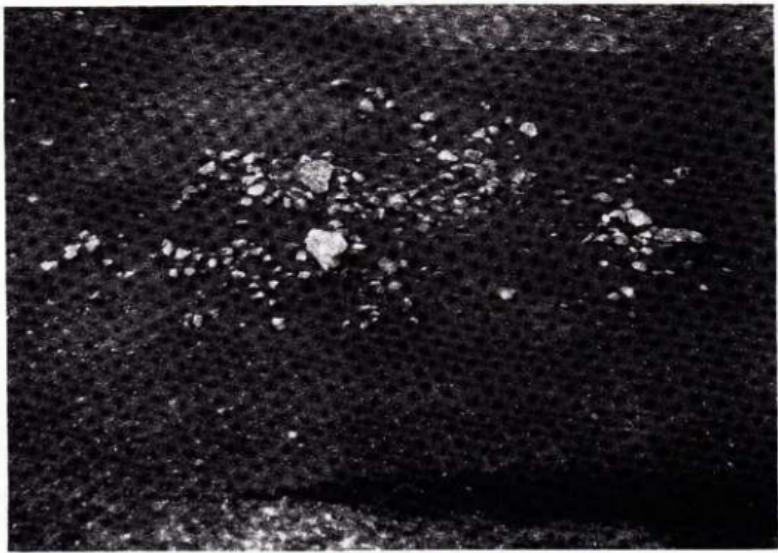
- 阿部義平 「配石」「縄文文化の研究 9」 雄山閣 1983年
- 石井 寛 「縄文集落と掘立柱建物跡」『調査研究集録 第6号』 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団 1989年
- 大里・秋元他 「鹿角市史」 鹿角市 1982年
- 鎌田健一 「有史時代に跨った十和田火山起源の火山灰について」『よねしろ考古 6号』 1990年
- 熊谷常正 「岩手県の早期後半から前期初頭の土器群について」『第4回 縄文文化検討会シンポジウム』収載 1989年
- 鈴木道之助 「石器の基礎知識 Ⅲ」 柏書房 1981年
- 鈴木保彦 「集落の構成」『季刊考古学 第7号』 雄山閣 1984年
- 辻 誠一郎 「秋田県玉川温泉地域の沖積世鹿湯層の花粉分析」『東北地理 29-3』 1977年
- 高橋泰時 「貝紋沈線文系土器様式」『縄文土器大観 第1巻』 小学館 1989年
- 内藤博夫 「秋田県米代川流域の第四紀火山碎屑物と段丘地形」『物理学評論 Vol. 39』 1966年
- 内藤博夫 「秋田県花輪盆地および大館盆地の地形発達史」『地理学評論 Vol. 43』 1970年
- 成田典彦 「大湯環状列石周辺遺跡の古環境」『よねしろ考古 6号』 1990年
- 村越 深 「円筒土器文化」 雄山閣 1974年
- 村越 深 「亀ヶ岡土器」 ニュー・サイエンス社 1983年
- 村田文夫 「縄文集落」 ニュー・サイエンス社 1985年
- 文化財保護委員会 「大湯町環状列石」 1953年
- 青森県教育委員会 「表館(1)遺跡Ⅲ」 1989年
- 青森県教育委員会 「長七谷地貝塚」 1980年
- 秋田県教育委員会 「大湯環状列石周辺遺跡分布調査概報」 1975年
- 秋田県教育委員会・鹿角市教育委員会 「大湯環状列石周辺遺跡緊急分布調査報告書」 1974年
- 鹿角市教育委員会 「大湯環状列石周辺遺跡分布調査概報」 1976年
- 鹿角市教育委員会 「大湯環状列石周辺遺跡分布調査報告書」 1977年
- 鹿角市教育委員会 「大湯環状列石周辺遺跡发掘調査報告書(1)~(6)」 1985年~1990年



P L 1 大湯環状列石全景

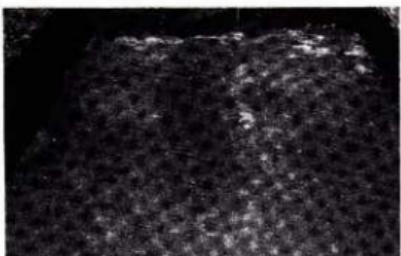


F<sub>2</sub> 区 全 景

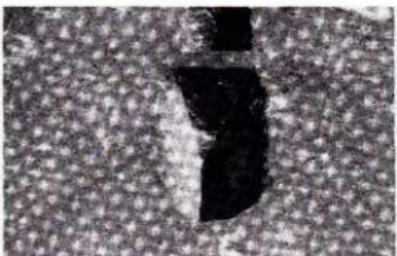


砾 群

PL 2 F<sub>2</sub> 区全景・砾群



第461号Tビット



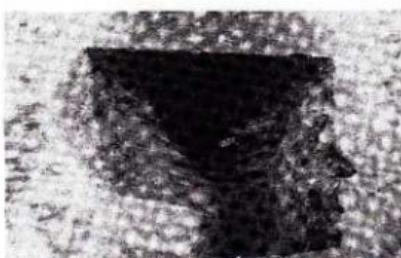
第461号Tビット



第461号Tビット



第463号Tビット



第463号Tビット

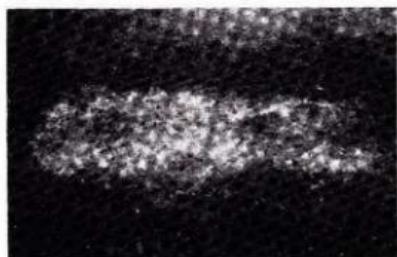


第463号Tビット

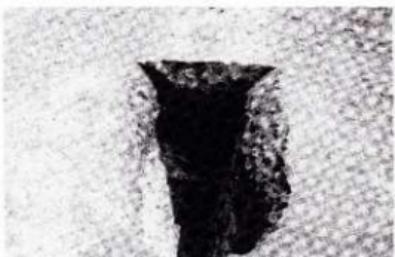


第464号Tビット

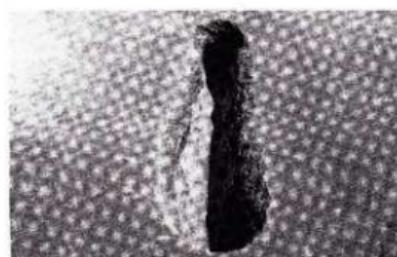
PL 3 Tビット (1)



第466号Tピット



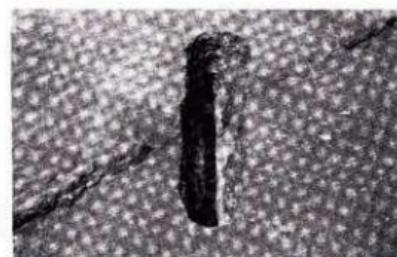
第466号Tピット



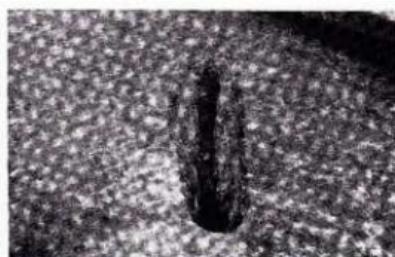
第466号Tピット



第468号Tピット、第469号フラスコ状土壤



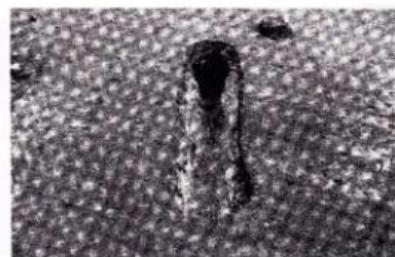
第470号Tピット



第472号Tピット

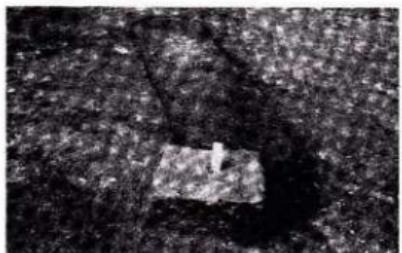


第473号Tピット

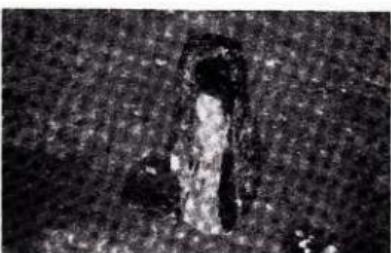


第473号Tピット

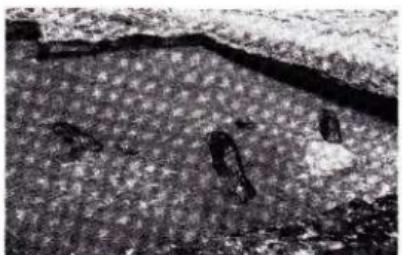
PL 4 Tピット(3)・フラスコ状土壤(1)



第474号Tピット



第474号Tピット



第472号～474号Tピット



第475号Tピット



第475号Tピット

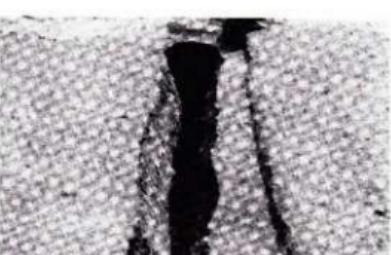


第506号Tピット



第507号Tピット

PL 5 Tピット(3)



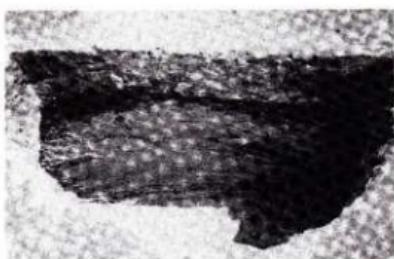
第507号Tピット



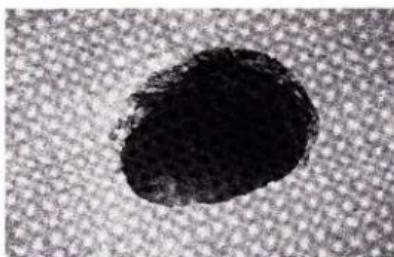
第509号Tビット



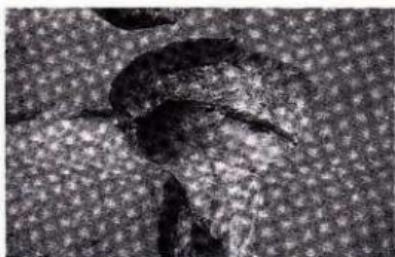
第509号Tビット



第467号フラスコ状土壤



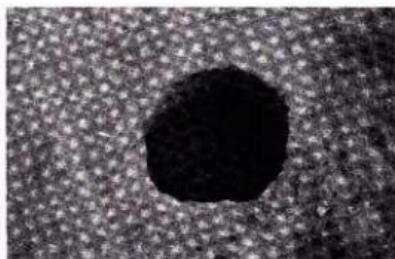
第467号フラスコ状土壤



第469号フラスコ状土壤、第468号Tビット

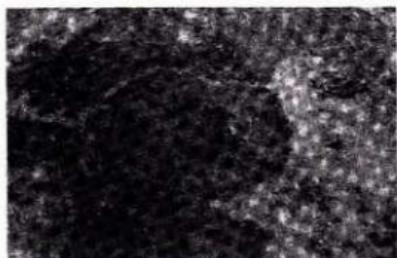


第476号フラスコ状土壤



第480号フラスコ状土壤

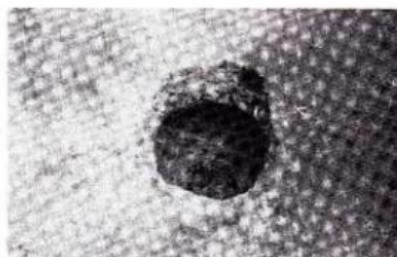
P L 6 Tビット(4)・フラスコ状土壤(2)



第481号 フラスコ状土壤



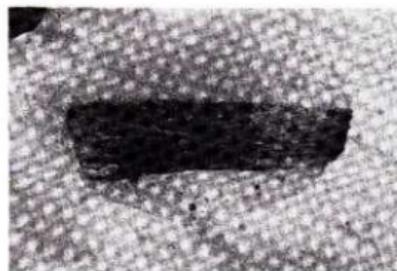
第481号 フラスコ状土壤



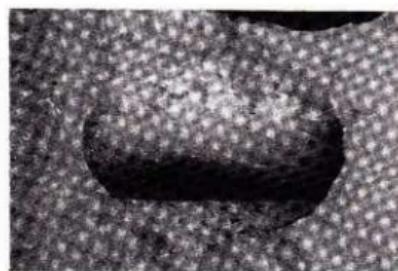
第482号 フラスコ状土壤



第483号 フラスコ状土壤



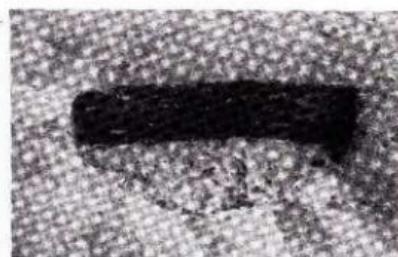
第485号 フラスコ状土壤



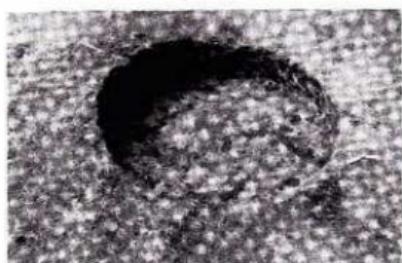
第484号 フラスコ状土壤



第484号、第485号 フラスコ状土壤



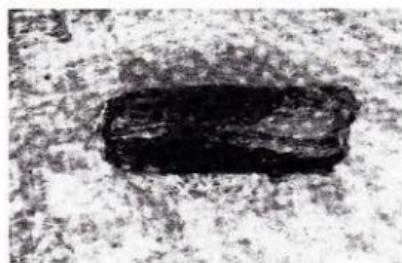
第487号 フラスコ状土壤



第487号 フラスコ状土壤



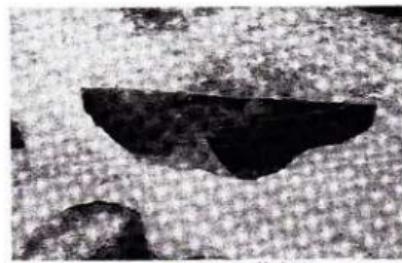
第488号 フラスコ状土壤



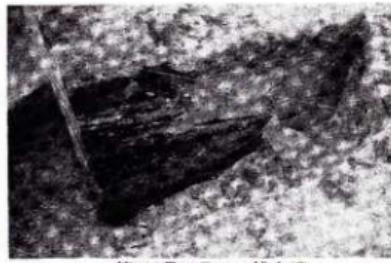
第488号 フラスコ状土壤



第488号 フラスコ状土壤



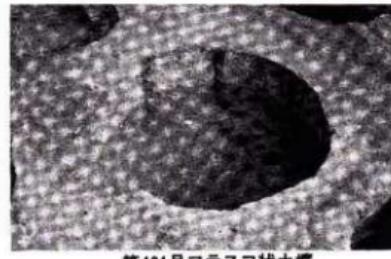
第490号 フラスコ状土壤



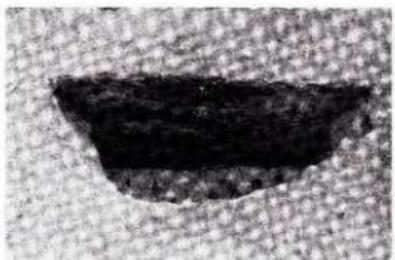
第490号 フラスコ状土壤



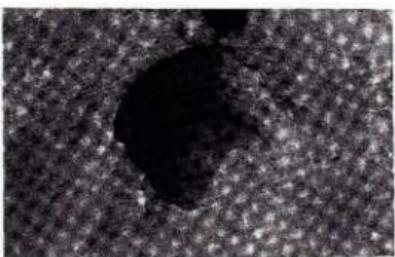
第490号 フラスコ状土壤他



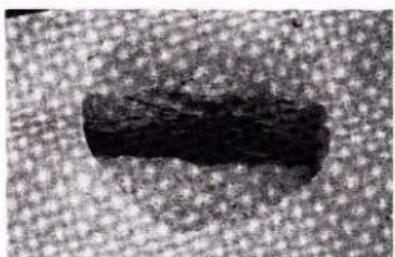
第491号 フラスコ状土壤



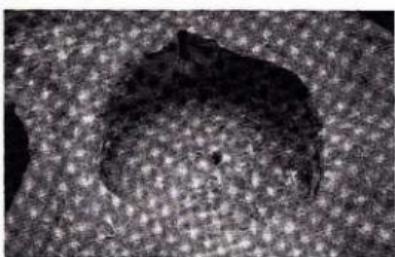
第492号 フラスコ状土壤



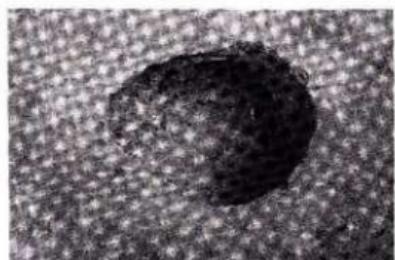
第490号 フラスコ状土壤



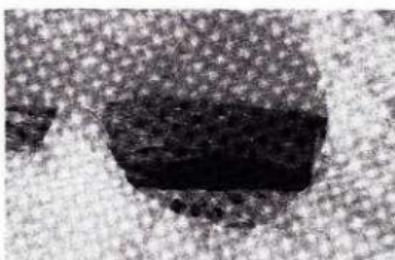
第493号 フラスコ状土壤



第493号 フラスコ状土壤



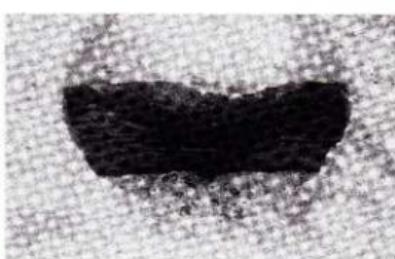
第494号 フラスコ状土壤



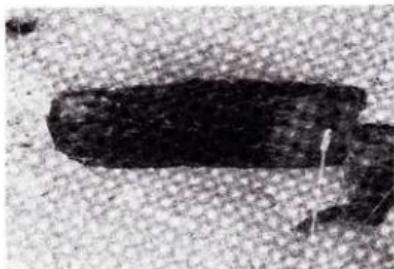
第495号 フラスコ状土壤



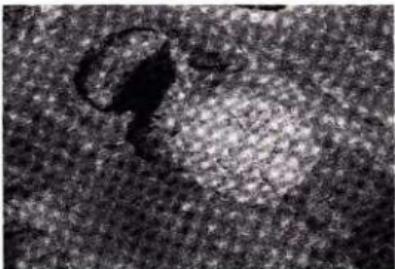
第499号 フラスコ状土壤



第499号 フラスコ状土壤



第500号 フラスコ状土壤



第500号、第501号 フラスコ状土壤



第501号 フラスコ状土壤

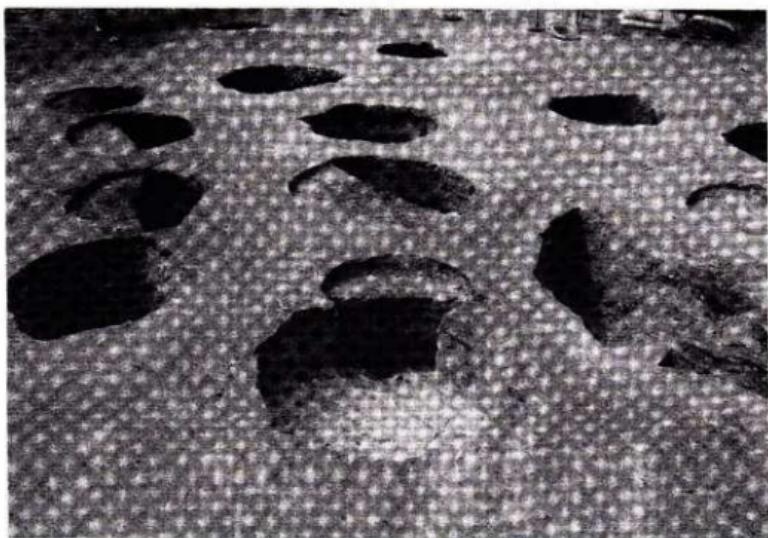


調査風景

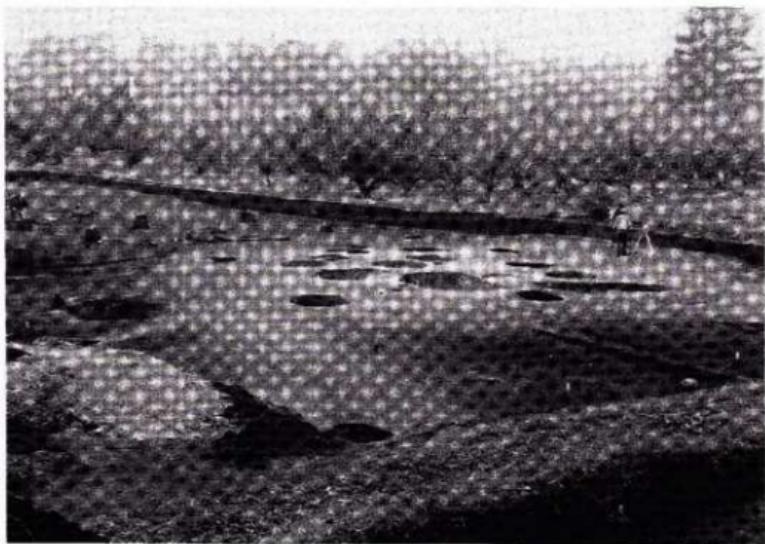


フラスコ状土壤群確認状況

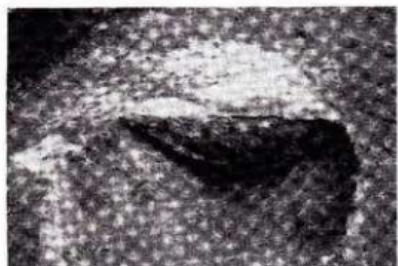
PL 10 フラスコ状土壤(6)



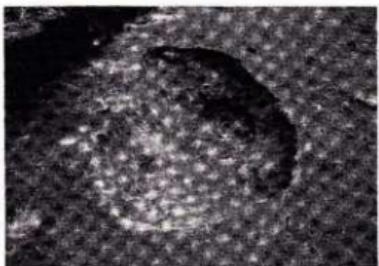
フラスコ状土壤群近景



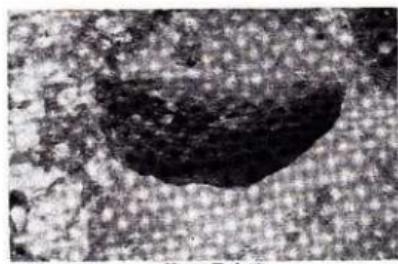
フラスコ状土壤群全景



第462号土壤



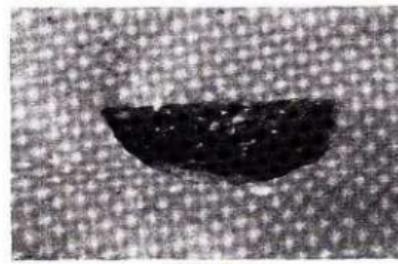
第462号土壤



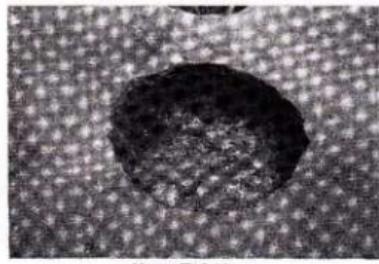
第465号土壤



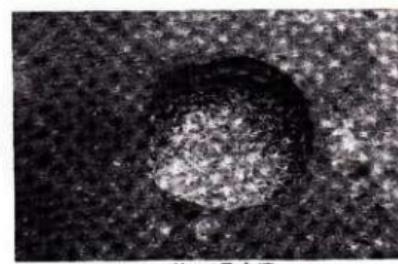
第465号土壤



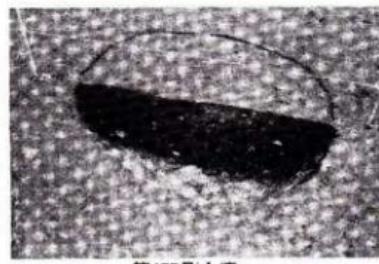
第471号土壤



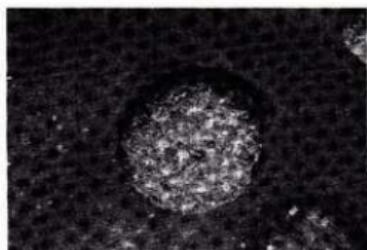
第471号土壤



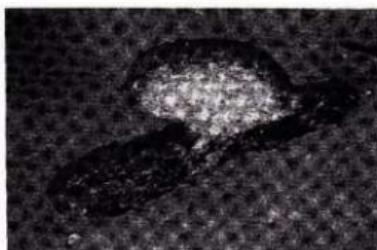
第476号土壤



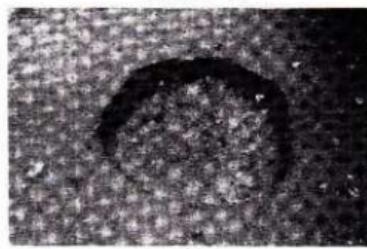
第477号土壤



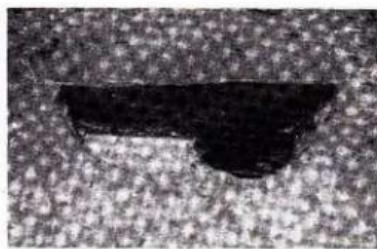
第477号土壤



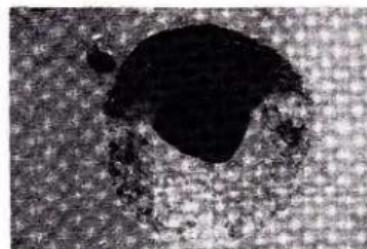
第470号Tピット、第478号土壤



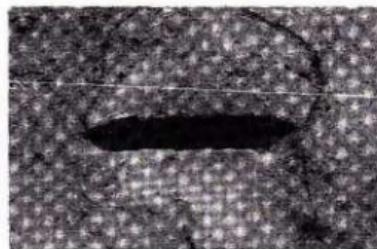
第479号土壤



第503号土壤、第504号フラスコ状土壤



第503号土壤、第504号フラスコ状土壤



第431号焼土遺構

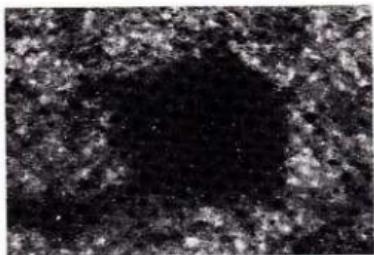


第431号焼土遺構

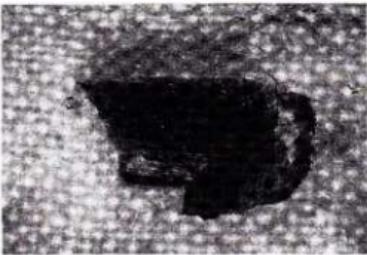


調査風景

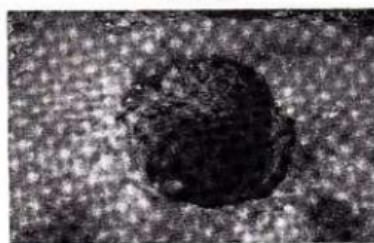
#### P L 13 土壤(2)・焼土遺構



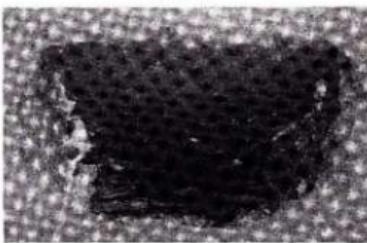
ピット101



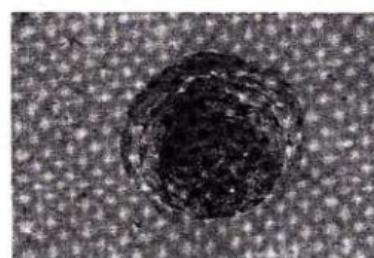
ピット101



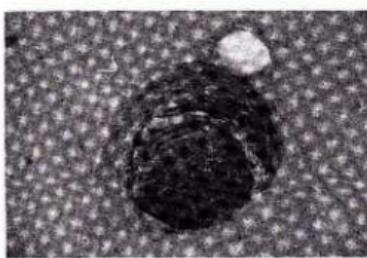
ピット101



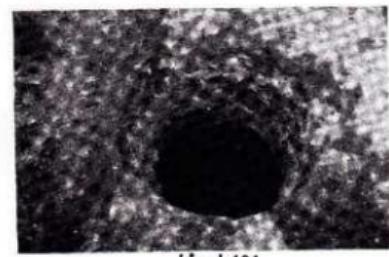
ピット102



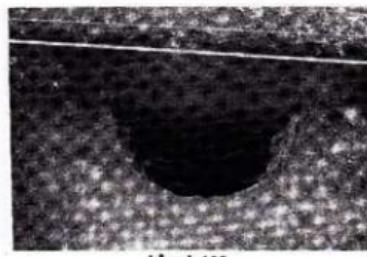
ピット102



ピット103



ピット104



ピット105

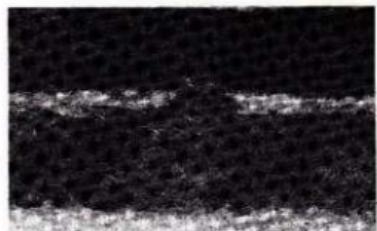
PL 14 柱穴状ピット(1)



ピット列



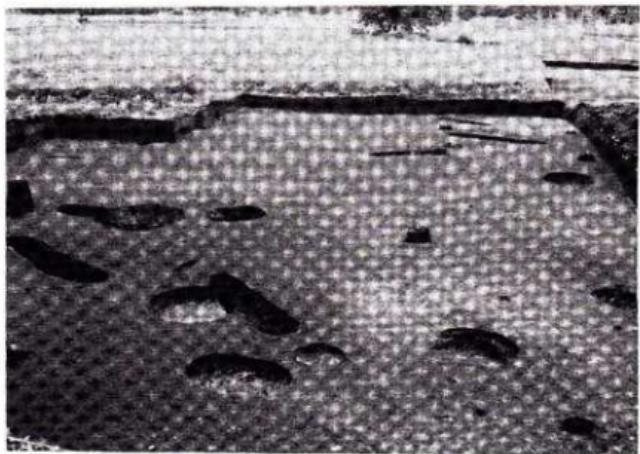
ピット106、107



基本層序

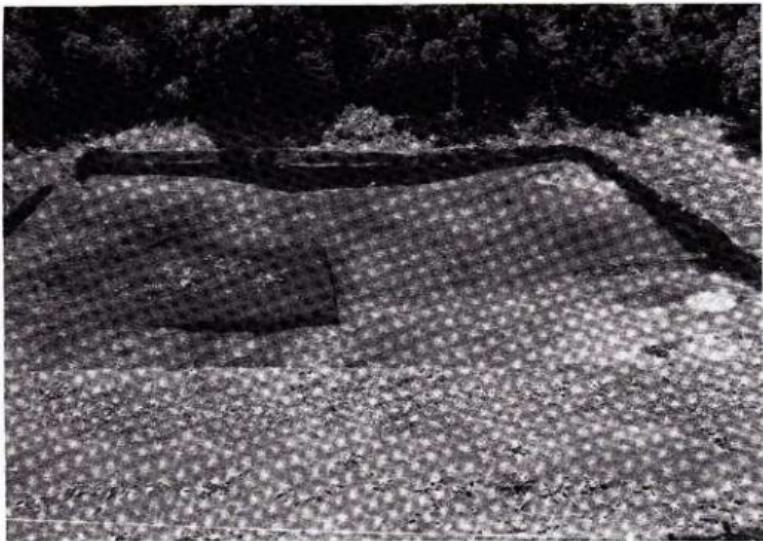


十和田高校体験学習

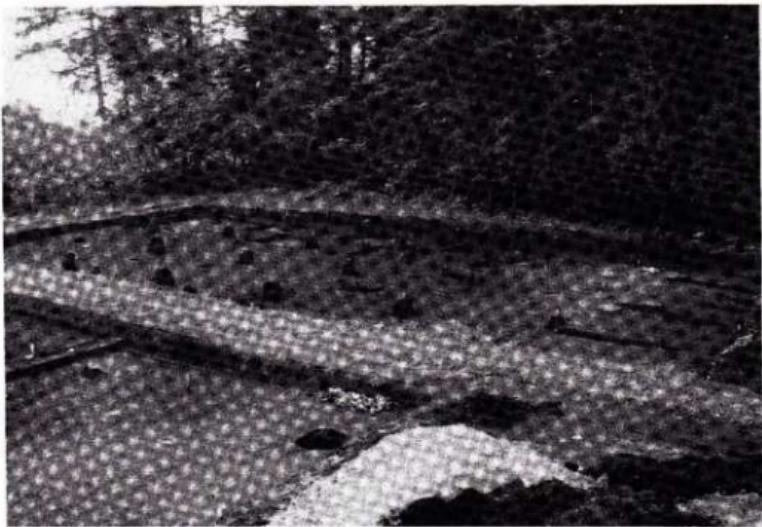


調査区東側

PL 15 柱穴状ピット(2)・基本層序

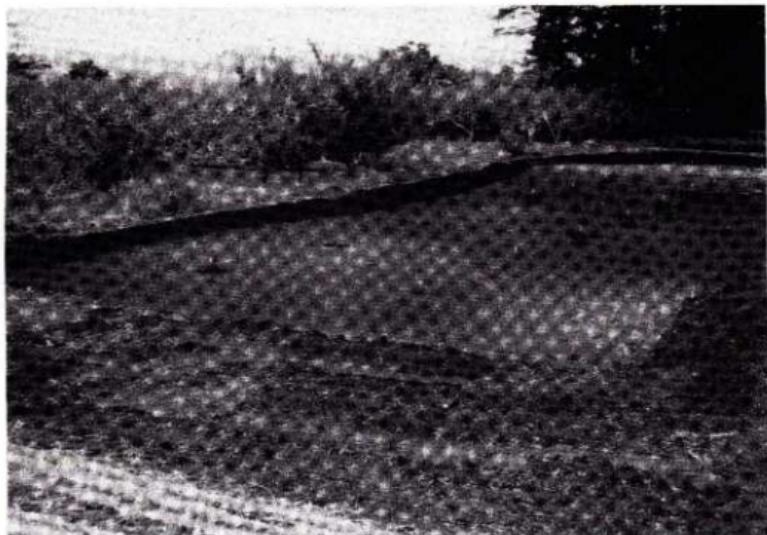


調査区北端部

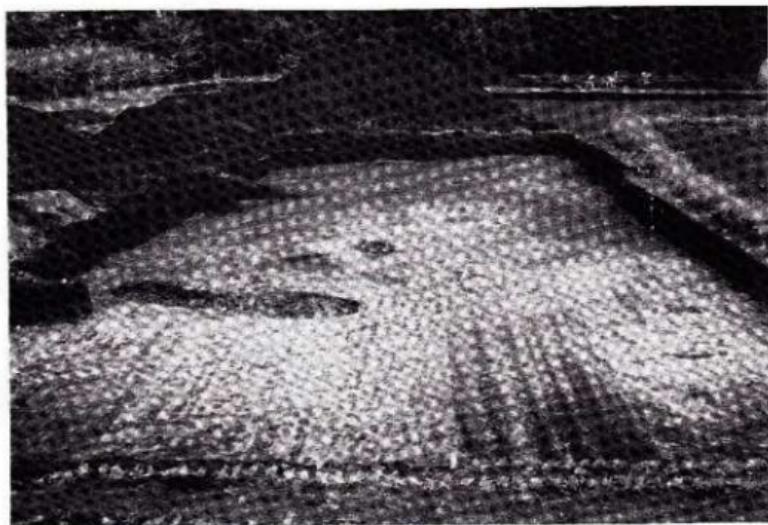


調査区西端部

P L 16 調査区北端部・西端部



調査区南部

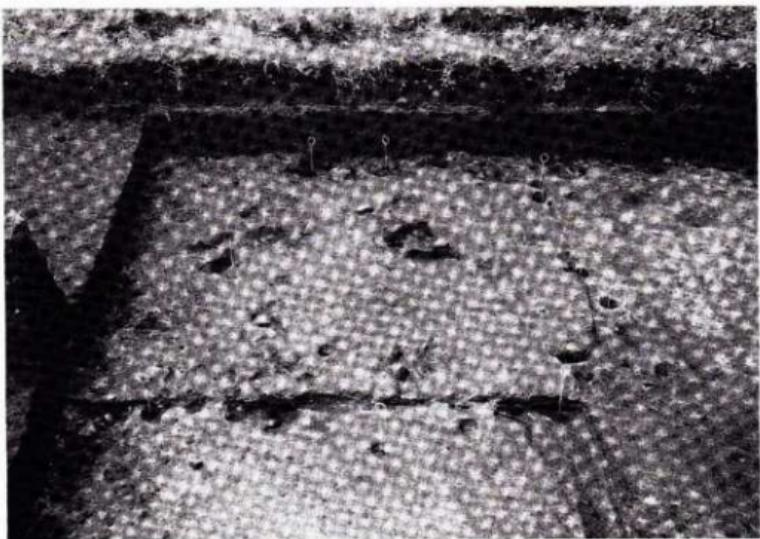


調査区南東部

P L 17 調査区南部・南東部

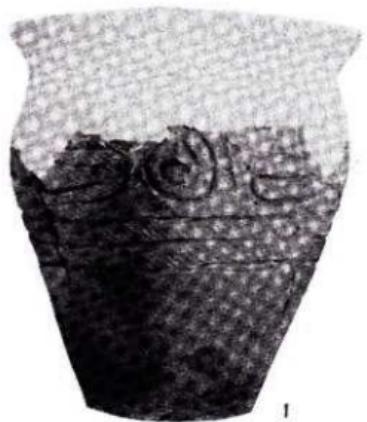


昭和50年度C地区発掘調査地

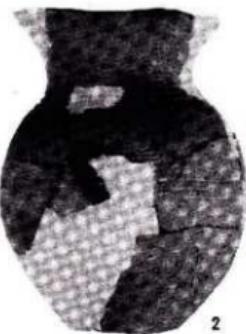


同上 住居跡

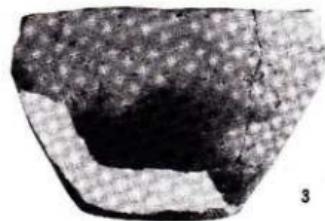
P L 18 昭和50年度C地区発掘調査地・住居跡



1



2



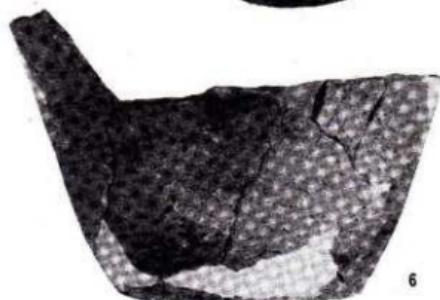
3



4



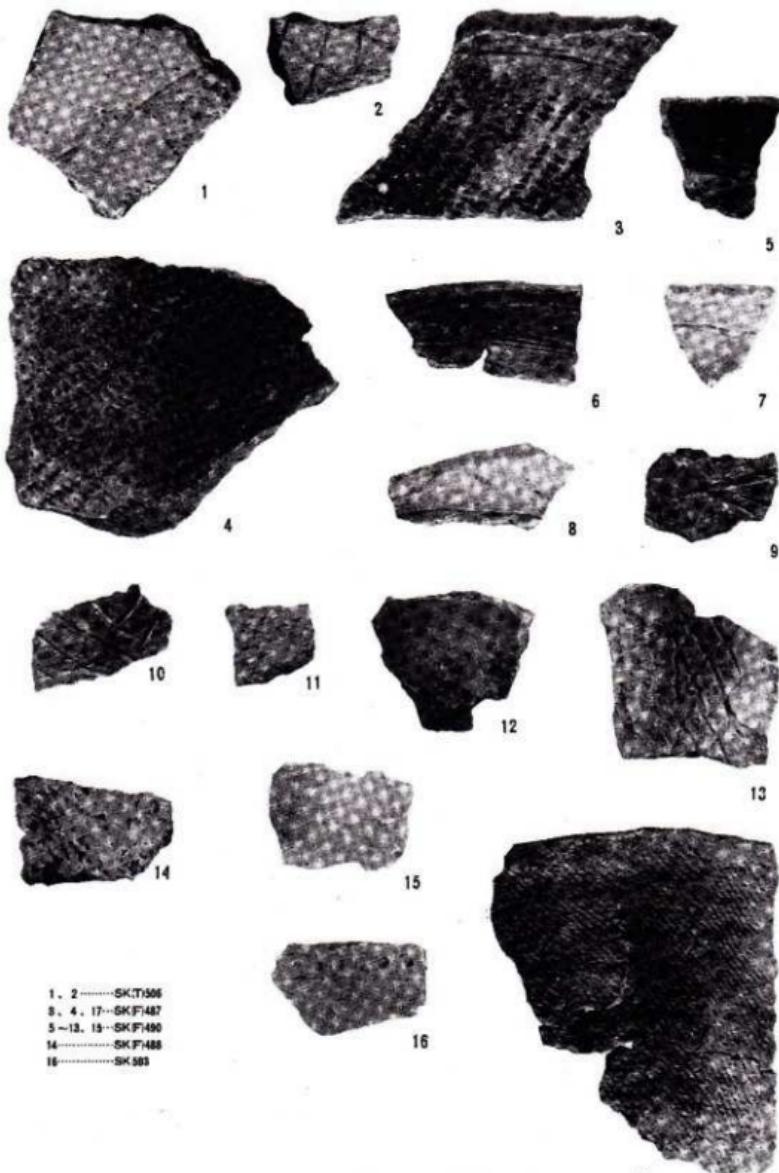
5



6

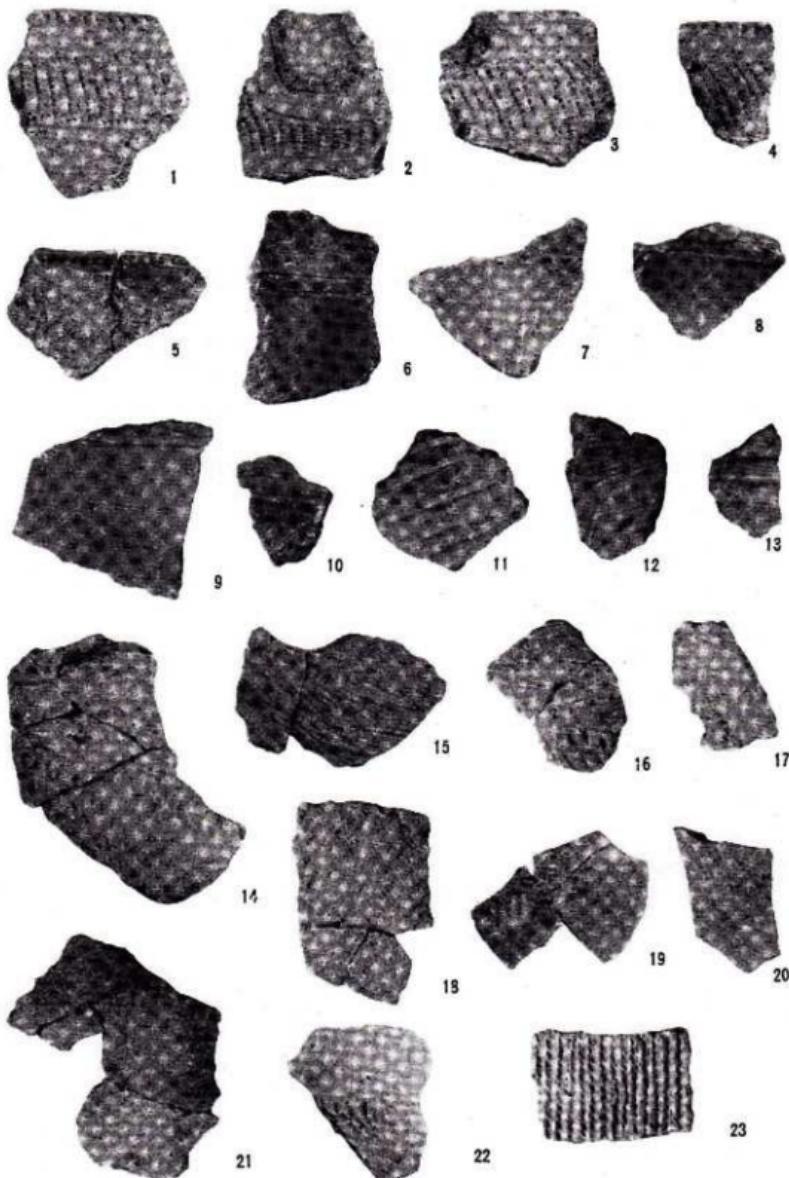
1………SKP148  
2~6……遺構外

PL. 19 遺構内・外出土土器(1)

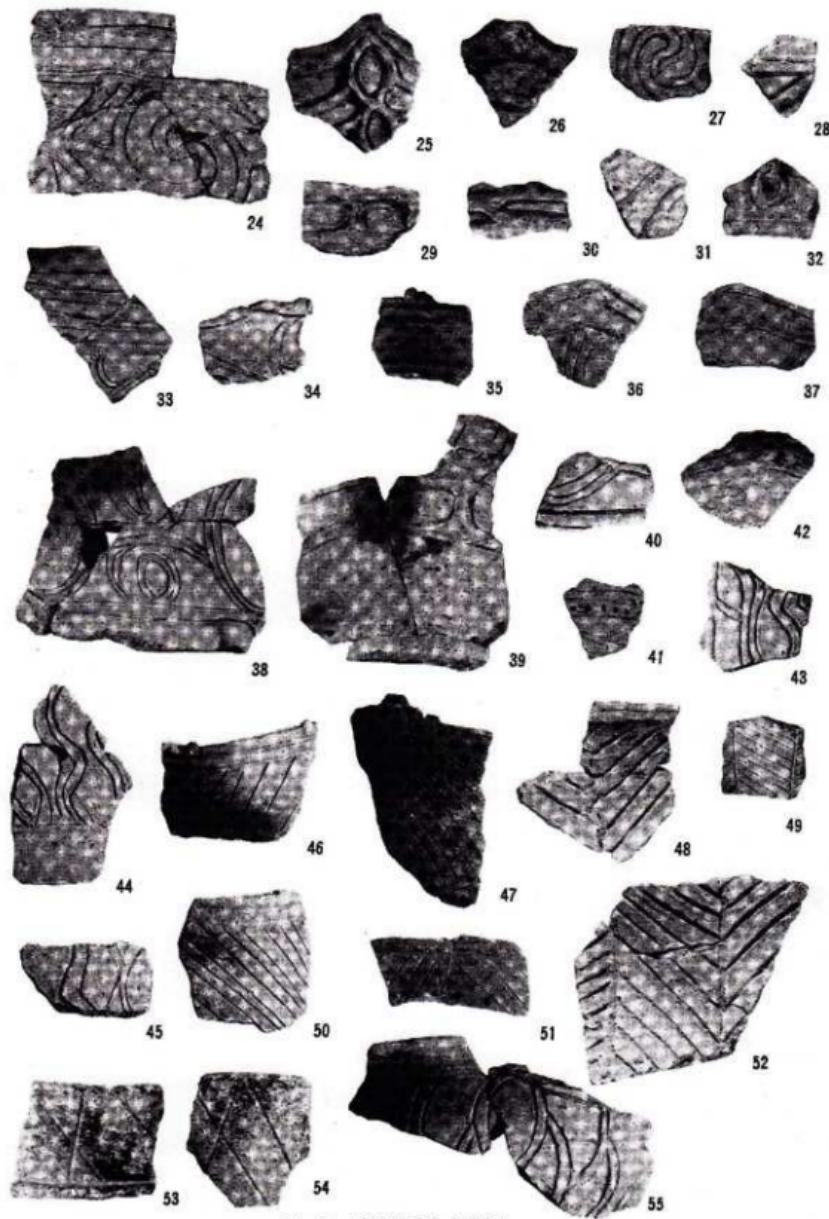


1. 2 -----SK:T56  
 3. 4. 17---SK:F487  
 5---SK:F490  
 14-----SK:F488  
 16-----SK 563

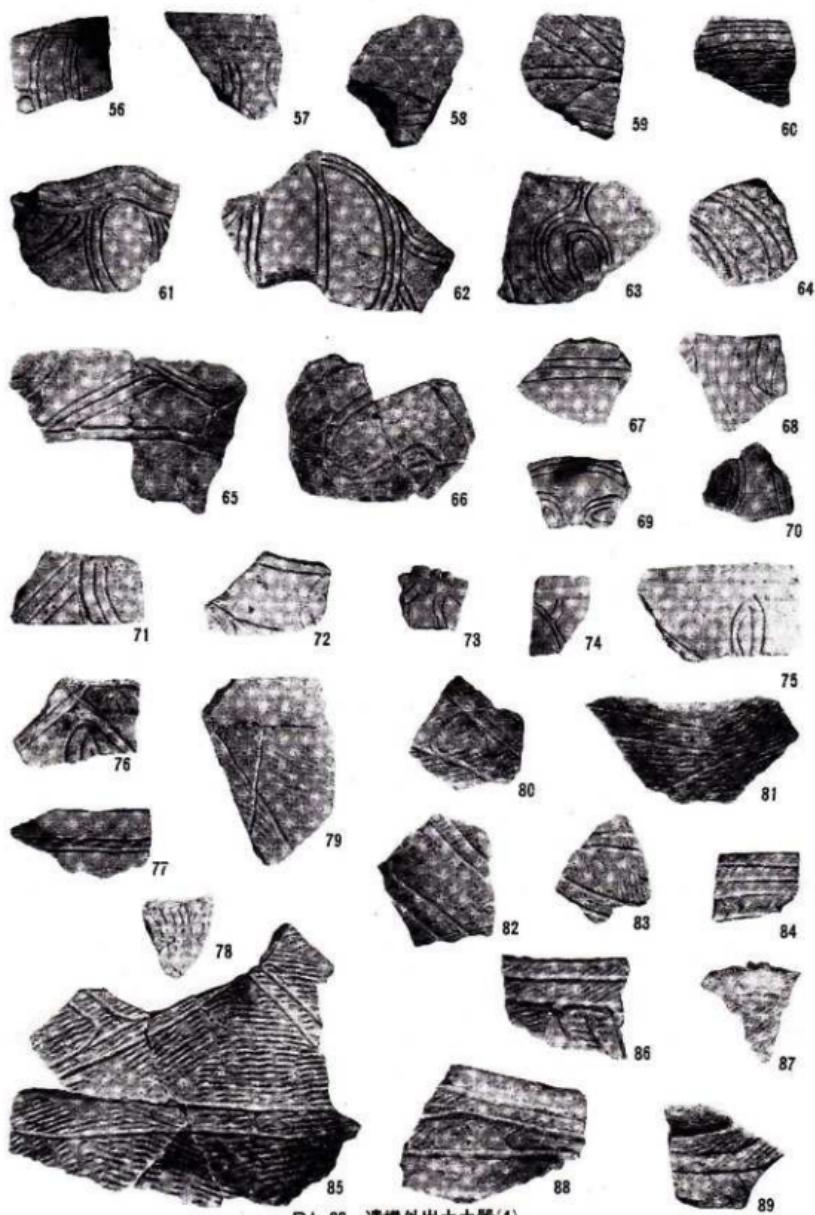
P L 20 遺構内出土土器(2)



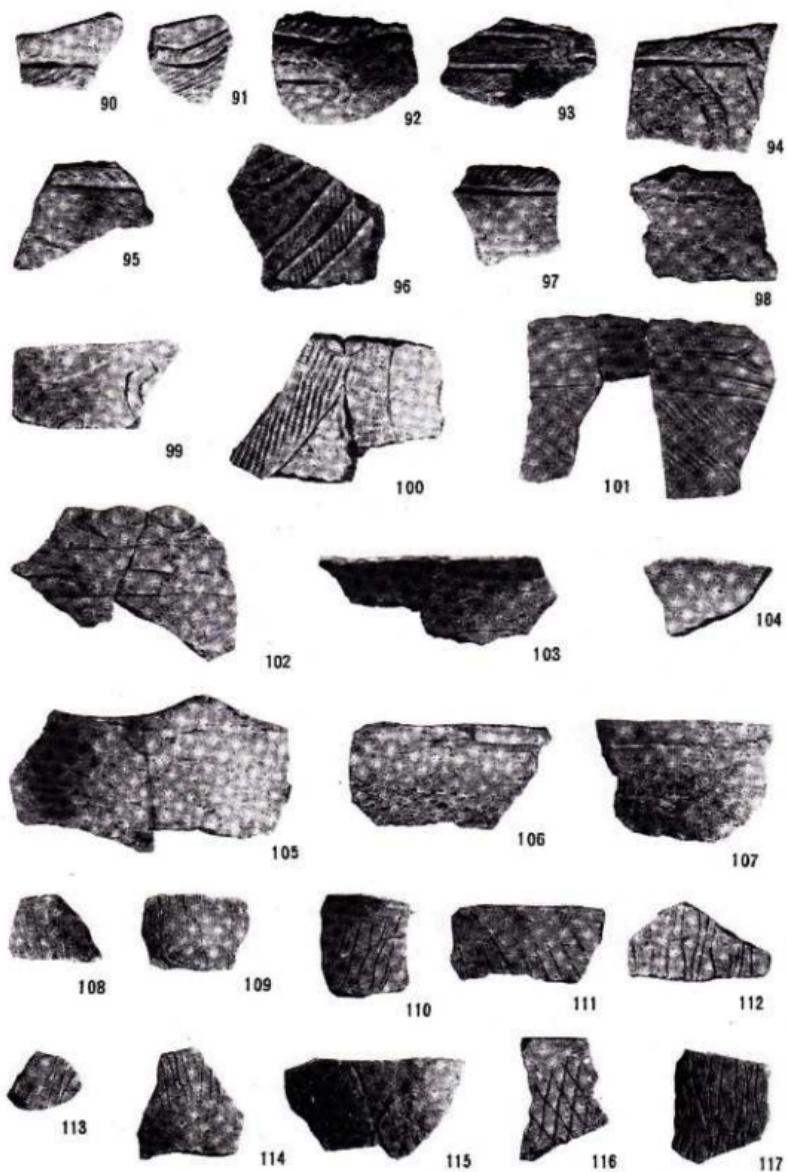
P L 21 遺構外出土土器(2)



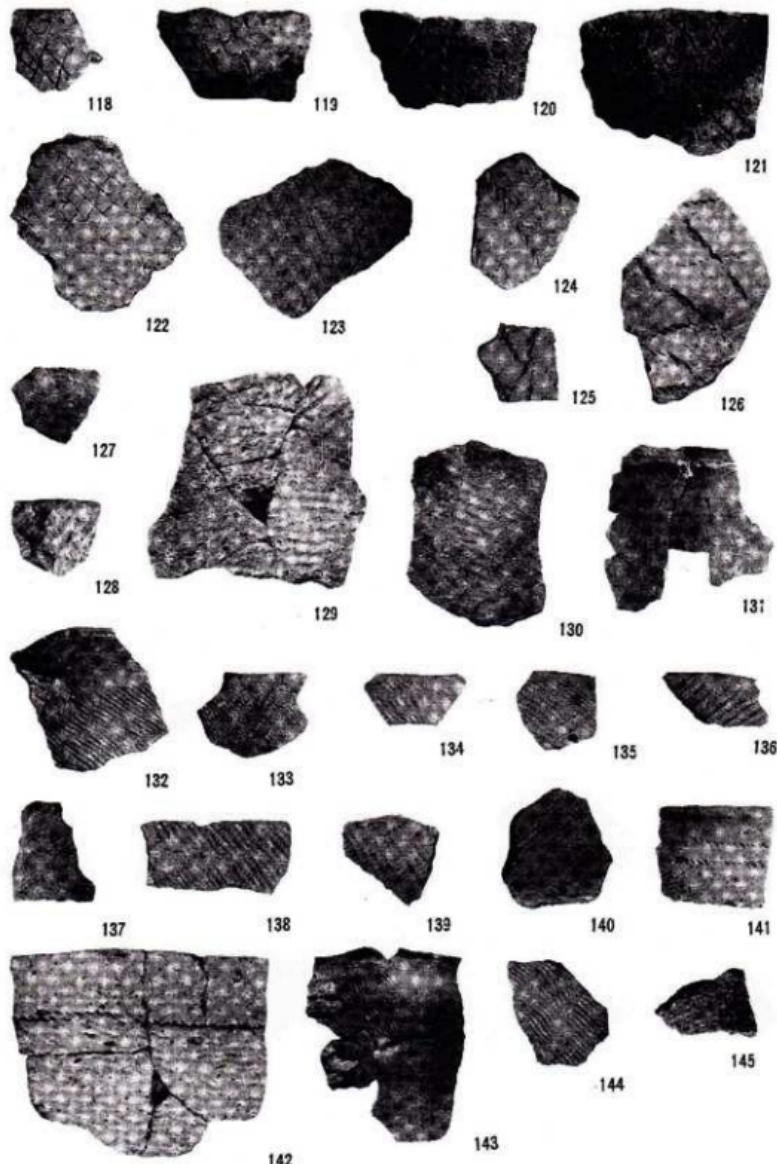
PL. 22 遺構外出土土器(3)



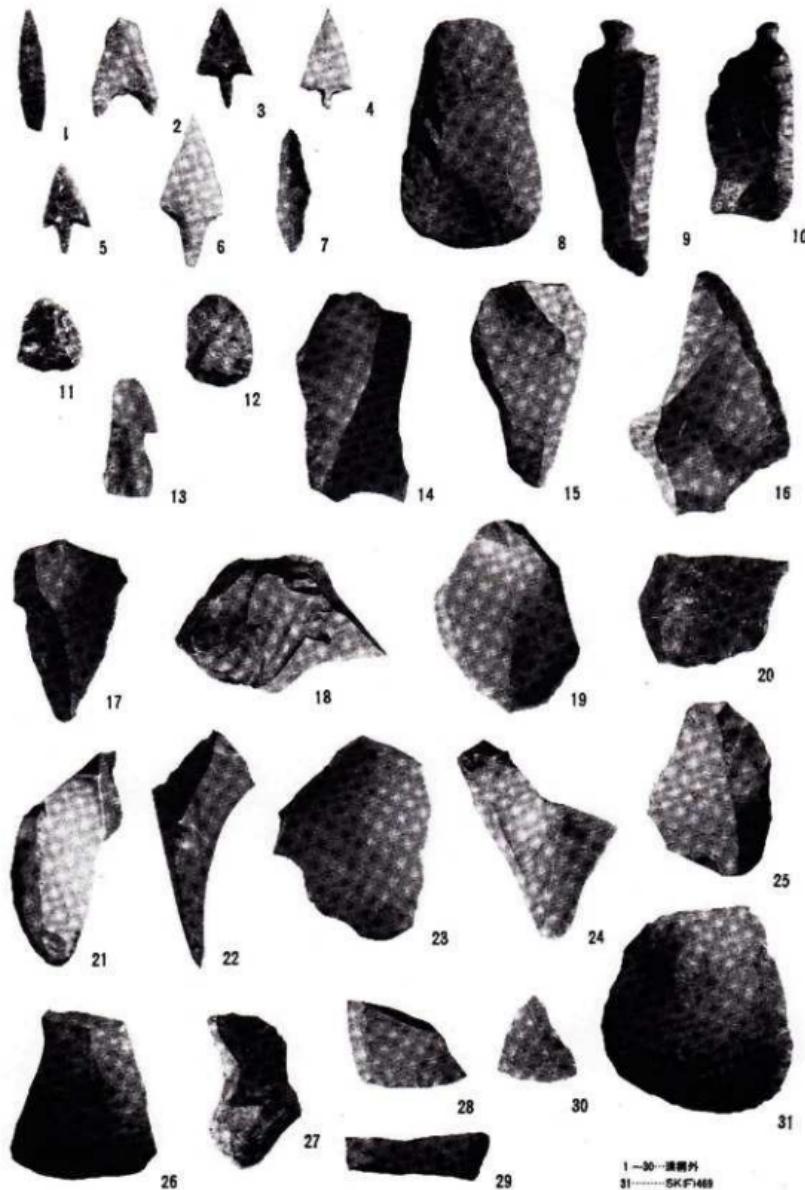
P L 23 遺構外出土土器(4)



P L 24 遺構外出土土器(5)

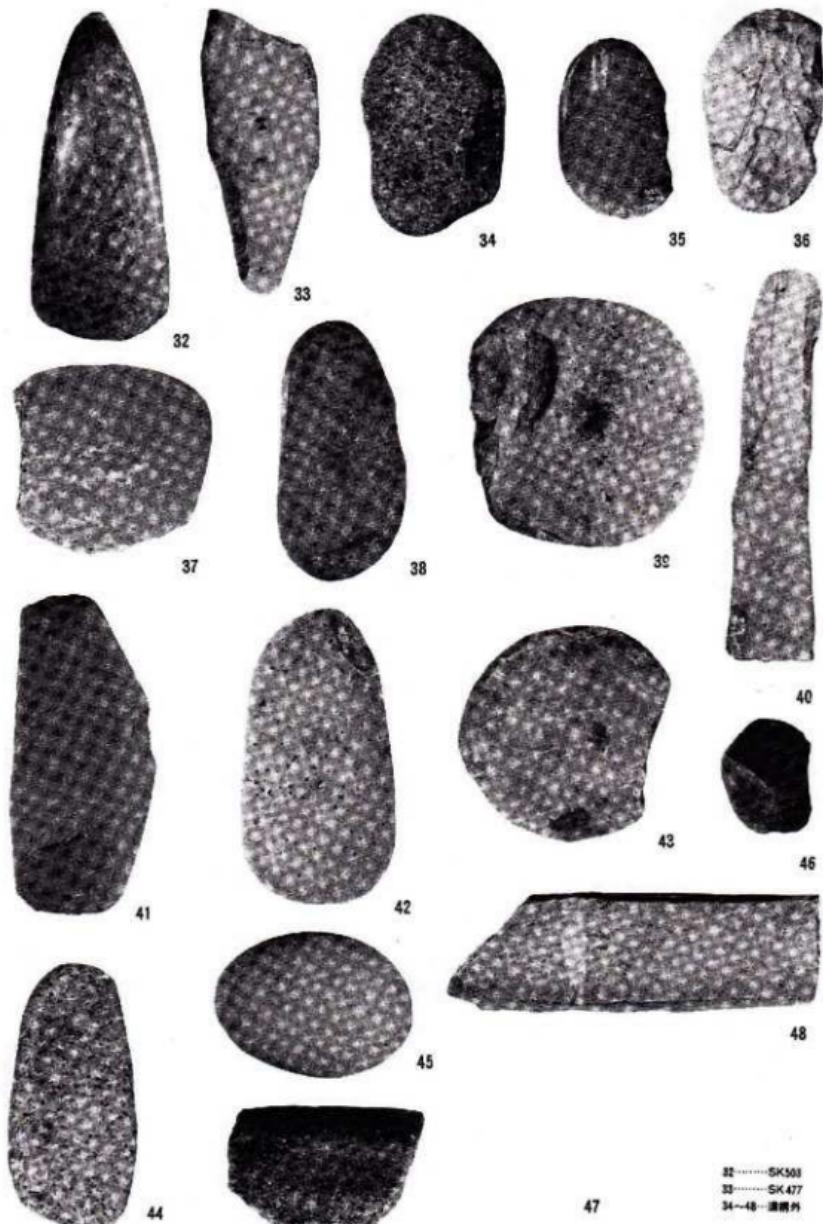


P L 25 遺構外出土土器(6)



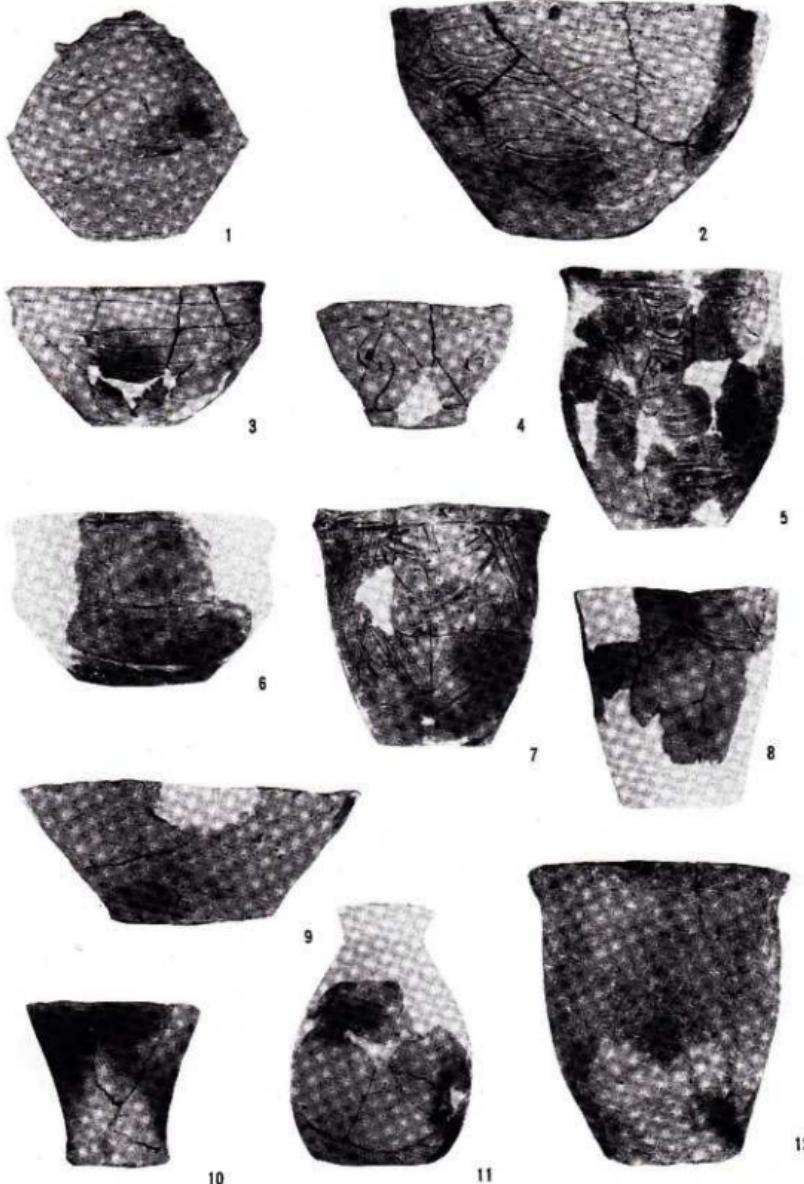
1—30…遺物  
31……SKF469

PL. 26 遺構内・外出土石器(1)

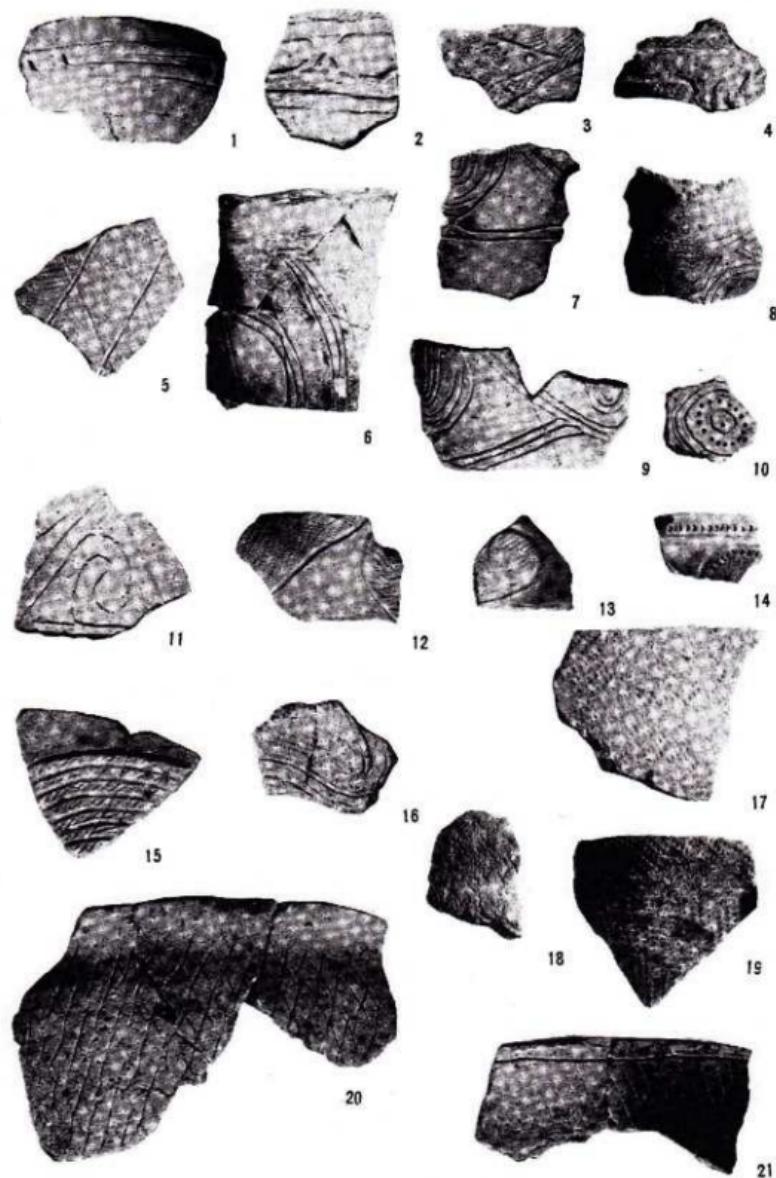


PL 27 造構内・外出土石器(2)

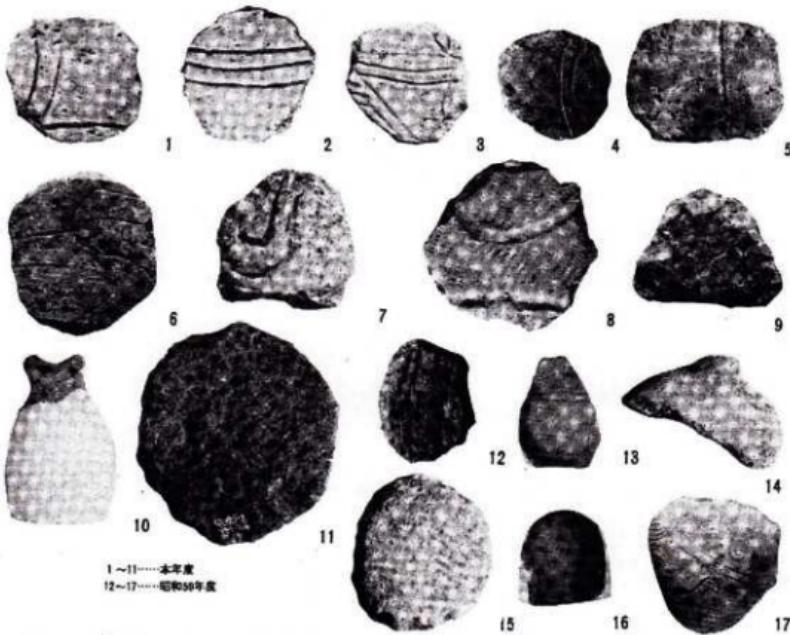
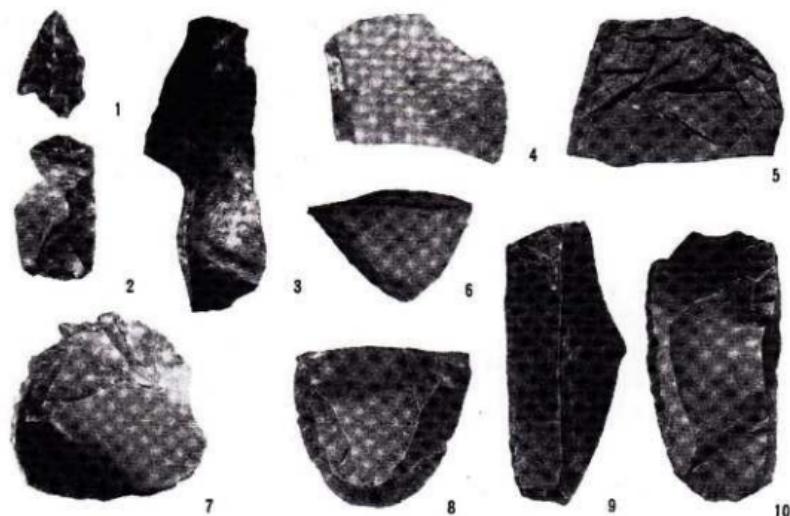
32……SK508  
33……SK477  
34~48……遺物



P L 28 昭和50年度C地区出土土器(1)



P L 29 昭和50年度C地区出土土器(2)



1~11……本年度  
12~17……昭和50年度

P L.30 昭和50年度C地区出土石器（上段） 造構外出土土製品・石製品（下段）

---

---

鹿角市文化財調査資料42

## 大湯環状列石発掘調査報告書(7)

発行年月日 平成3年3月30日

発 行 者 鹿角市教育委員会

〒018-52

秋田県鹿角市花輪字荒田4-1

TEL 0186-23-5111

---

---

印 刷 所 (株) 大館孔版社